

直す戸田武藏守平塚因幡守の先刻より黒田細川と合戦最中ありしゆども是も此跡を見て引返
し備を立る大谷刑部少輔今日の出立の練の二小袖其上に白絹に蝶を疊繪にしたる鍔直垂の
佩楯に朱の頬當し甲冑の若さず薄青の絹の覆面は顔さし入頬當の下にて紐を結び四方取放
しの橋に乗じて近習の士共にかゝせたり(大谷鳥毛の兜を著し馬上といふ)誤(六百
人を一手となし鎧冑を作て待掛しが敵兵既に近付と其まゝ鐵砲四百挺打ちけ不義無道の秀
秋吾怨骨髄に徹す秀秋が首を見ずば吾死とも瞑目に及ぶべからず汝等身命を抛て彼敵を
追崩し秀秋を討果すべしと其身輪を乗廻し先手をばげます平塚因幡守爲廣十文字の鎧を打
振て前後の敵を突立し獅子奮迅の怒をかじめたりを擲て打めぐる戸田武藏守重政の馬上
より鎧を取落しければ大刀を抜て敵一人を確立る戸田が奴僕主人取落したる鎧を捨て出せ
ば武藏守其志を稱美して扱たる大刀を其奴僕に授く大谷が従兵共身命を抛て奮戦すれば
金吾が勢の散るに突立られ追崩さる平岡石見稻葉佐渡の大音聲を揚て小勢の堅きは敵の
擲といふ事あり大谷たどへ鬼神ありとも此大勢にてあつ取こめ討取らん事何程のとあらん
や吉隆討て軍功をたてよ手にも足らぬ小勢の敵は息なつかせぞ追ちらせと下知するに屬

され田中勘左衛門布田新平をはじめ踏留て討死する者廿九人創を蒙る者五十餘人御旗本よ
り秀秋の陣中の軍使奥平藤兵衛當手の兵平岡戸田が死物狂ひに追立られ松尾山の麓までな
だれうらるを見て大に怒り群がる敵中に馳入て首取て家士にもたせ御本陣へ奉り其身の猶
も敵中へ馳入て比類なき働して討死す是の奥平美作守信昌が弟之神君其戦死をふしませ
給ひしが子もなけれハ母に米地三百石下されしと老藤堂佐渡守織田有樂父子津田長門等の
最前大谷が兵に懸立られ敗走せしが松尾山より裏切の金吾勢も出すを見て取て退し大谷
が左備の方へ討てうらる脇坂中務少輔小川土佐守朽木河内守赤座久兵衛も反忠の時至れり
とて同じく藤川を渡り大谷が勢の右の方へ討てうらる秀秋の先手も是に威を得て大軍一手
に引返し大谷が旗本を目ざして押懸る大谷も平塚戸田も元來小勢の事あれば三方の敵にも
みたてられ隊伍も今は亂れたりされども吉隆平生士を愛して衣を脱て着せ食を分て喰ひし
め父子兄弟の如く親をみけれハ恩義を感じたる家人あるが故下河原宗右衛門池澤七郎瀬川
又一を始め三十餘人雜兵百餘人一足も退くが同じ枕を討死す平塚因幡守の吉隆が前に來り
さりども思ひこ願も盡果て秀秋が裏切に逢ぬれハ我らが運命も今日限りいとて涙を流せ

大谷も吾早く秀秋を討て捨す一大事を空くす此怨生うはり死うはり秀秋に思ひしらせ
 置べきうと目見へぬとも涙の雨の如く鐘直垂の袖しぼりたる有様理り過て哀ありじ
 らく有て面をわげ嗚呼愚ありく我三成と年頃斷金の交捨がたく彼が頼みを否みがたく
 天の助くる内府を敵とし思ひ立たる此大望とても成就する事おらずとの始より思ひ敵じと
 なれば今更悔むべきにわらずもより盲目には成たり悪病にて面の人に向がたじ一時も早
 く自害して黄泉の下にじて故大開殿下へ半分せんといへが平塚夫の猶早し爲廣先手に参り
 軍の有様一覽して案内仕らん先夫造の御待有べしといひすて又馬を馳て秀秋が勢の中
 へ馳入縦横に馳散らも敵數十人討取て見れば馬廻りに頼み切たる郎等二十餘人皆討れたり
 平塚も取渡れまばら馬を休むる所秀秋が近臣横田小半助かくと見て馳より一鎗突けば平
 塚も十文字の鎗にて其鎗をたきつけ終に横田をつきよせて其首とり大谷が方へもたせ送
 るとて矢立の筆より出し一首の歌をぞ書添へける
 若がためすつる命のあむらじ
 つひよとまらぬ世と思へば

此首の某自身討取ひへ眞土の土産に参らせし日頃の契約を失はず某の追付討死と存し
 貴殿にもはや覺悟せられ尤にいと使者に口状をゆ含めたり大谷其使に逢て因州武勇とい
 ひ詠歌といひわたら武士あへなき最期おしみても猶あまきあり我等も思ひきわめんとて
 契りあれはむつのもまたて待てまばし

おくれ先だつたがひ有ども

と打吟じ其身眼の見へねば甥の僧祐玄にかへせて送りけり平塚此返歌を感吟し彌討死と
 思ひ定たる所へ小川土佐守が家士榎井太兵衛馳來り平塚殿と見たるの僻目かいと一鎗とい
 へば爲廣立上り汝がやとく我をそ因幡守を汝志の者之勝負せよといひあから十文字の鎗
 を掲て太兵衛が鎗をたしたかに打んとせしが太兵衛受はつして踏込平塚を突倒す爲廣倒れ
 あから其鎗を投出し是の汝が家寶にせよといひながら討れたり爲廣が子の庄兵衛も戸田武
 藏守が子の内記も同じく力戦して討死す戸田は此跡を見ながら石田が備へ馳行て金吾が裏
 切にて軍のばや敗れし平塚も討死す大谷も自害せしならんといふに三成聞て何事も前世の
 宿願誠には非なき次第之然し某の今一度最後の一戦せんと思ふ其元も其心得せらるべ

しどいへば戸田承はりぬと走歸り黃備一手を以て有樂父子津田等が勢に討てうれば郎等從兵爰うしこに取込られ悉く討れたり津田長門守信成の戸田を自懸て討てうりし所津田が馬太刀影に驚てかけ出す其跡へ織田河内守長孝馳來り入替て鎧を合せしばらく突戦しけるに戸田猛勇といへども數刻の力戰に心力疲れたぢくどよろめく所を長孝踏込て戸田が兜の吹返しを突しに戸田の其まゝ倒るゝ所長孝が近臣山崎源次郎走寄て首をとる戸田が郎等鶴見金左衛門主の仇逃すまじと長孝に討てかゝるを長孝が郎等矢田太兵衛走來つて金左衛門を突倒す此頃までも大谷吉隆橋をすへさせ時節をはかり居たる所へ郎等湯淺五助敵の首提來り乗物の前に跪き涙を流し合戦もはや是迄にい平塚殿戸田殿も御討死しといへば吉隆來て時刻うつり雜兵の手にかゝらんことゝ殘念あり腹切べし我面跡惡病の爲に損じ人に見られんことを恥れ兼てや付し如くはうらふべしとて又橋より黃金壹包取出し討殘されし近習共に汝等の皆討死せんも無益之是を路用とし何方へも逃去べし今は思ひ置とましどいひまがら五助に介錯せよとてあし肌ぬき腹十文字に掻切べ五助其まゝ首打落し其首へ三浦喜太夫羽織に包み近邊の田の中へ深く埋めたり吉隆今年四十二歳喜太夫も其所にて腹を切て死す五助の悉く見届て又馬を馳出て藤堂が備へ無二無三に突て入藤堂仁左衛門が爲に討れたり五助が首御本陣に獻じければ神君湯淺の名を知られたる勇士之五助ならば缺唇あらんと仰ければ御近習の人と彼首を見るに相違なく缺唇ありしかば各舌をふるつて御説を感じけり吉隆が子大學木下山城守兄弟父が自害を聞て悲歎し共に自害せんといひしを乳母子の橋本久八郎諫て秀頼公の御大事今日に限るべからず一先敦賀へ御立歸り北國の味方をめたらひ御父君御本望をも達せらるべしとといへば兩人其諫に志たがひやうくと敵中を切ぬけて敦賀へ歸りしうども思ひの外に敗軍の士も集らねば陸方かく大坂へ登り秀頼の脇近もて勤仕しけるが山城守の程なく病死し大學の元和の時まで大坂に有て秀頼と死を同じぐし父が志を繼しこそ哀き宇喜多中納言秀家の松尾山金吾が手より裏切すると聞て大に怒り先手の勢の先刻よりの合戦に疲れたらん秀家が旗本勢を以て秀秋が旗本一文字にかけ入て倅め刺進へ此の鬱憤散ずべし秀秋のみにあらず毛利黃門輝元も盟約を違背して今に出馬せず南宮山に備たる宰相秀元も異心と見へ今に軍を進めねば天下傾覆の時節到來せり早く討死して故大岡の舊恩に報すべし馬引りせよと命ぜらる家老明石掃部金登鎧

て腹を切て死す五助の悉く見届て又馬を馳出て藤堂が備へ無二無三に突て入藤堂仁左衛門が爲に討れたり五助が首御本陣に獻じければ神君湯淺の名を知られたる勇士之五助ならば缺唇あらんと仰ければ御近習の人と彼首を見るに相違なく缺唇ありしかば各舌をふるつて御説を感じけり吉隆が子大學木下山城守兄弟父が自害を聞て悲歎し共に自害せんといひしを乳母子の橋本久八郎諫て秀頼公の御大事今日に限るべからず一先敦賀へ御立歸り北國の味方をめたらひ御父君御本望をも達せらるべしとといへば兩人其諫に志たがひやうくと敵中を切ぬけて敦賀へ歸りしうども思ひの外に敗軍の士も集らねば陸方かく大坂へ登り秀頼の脇近もて勤仕しけるが山城守の程なく病死し大學の元和の時まで大坂に有て秀頼と死を同じぐし父が志を繼しこそ哀き宇喜多中納言秀家の松尾山金吾が手より裏切すると聞て大に怒り先手の勢の先刻よりの合戦に疲れたらん秀家が旗本勢を以て秀秋が旗本一文字にかけ入て倅め刺進へ此の鬱憤散ずべし秀秋のみにあらず毛利黃門輝元も盟約を違背して今に出馬せず南宮山に備たる宰相秀元も異心と見へ今に軍を進めねば天下傾覆の時節到來せり早く討死して故大岡の舊恩に報すべし馬引りせよと命ぜらる家老明石掃部金登鎧

の袖をひりへて御憤りのさる事ながら君の三軍の命を司る大將軍にてましませば卒忽の御舉動の勿躰なしたとひ大老奉行中義を捨て敵に降参せらるゝとも君御身を保ち給ひ豊臣家の天下恢復の御計畧いか程もいへし秀頼公御爲されば一先此所を落させ給へど諫しかば秀家實もやと思へれけん江州伊吹山の東祖傳ひ主從廿騎計りにて落行けば掃部もやうく戰場切脱て主人秀家の跡を慕ひ尋ねけれどもはや秀家の行衛知れざれば掃部詮方さく近江より都をさして急けり關東方御本陣には神君御大聲にて軍ははや勝たると進めくんと御下知有て御旗本より鯨波をめぐれば御先手の益勝に乗じ縦横に駆立れば西軍の皆辟易して散亂す石田の嶋左近を招ておれを見よ南宮山の毛利勢長東長曾我部安國寺も此合戦を徒に見物して手を出さぬの何事ぞかく言甲斐なき者共を味方にかたむし不運さよといへば左近さりととも致方有べしと先手に下知し亂るゝ士卒を制して踏こたへ黒田加藤田中金森等が駆立る勢に向ひ大筒を放ちかくれば黒田加藤が勢も是にひるんで見へける所へ藤堂并に有樂父子とも大谷を討て引返し横合より突てかゝり七八度追つ返しつ戦ふ程に石田の家入浦生大膳同大炊北川十郎をはじめ従兵百三十人枕を並べ討死するを見て石田三成小西行

長自身乗付て働ども勝ほこりたる東兵に駆立られ石田小西が人数の藤川をさして逃走る此時田中吉政が手に石田が隊將高橋權大夫大山民部左衛門大島井勘十郎も討とらる御旗本より米津梅千之助小栗又一等こゝに乗付て高名す嶋左近が嫡子新吉信勝兼て大力の聞へ有しが大將と組んと思ひ味方の敗軍を餘所に見て藤堂が備へ突り藤堂を善長政と組て伏し芝番が首を播落し立上る所を芝番が兒小姓山木平三郎走寄て新吉を二刀さして首を取る芝番が首迄取て歸れば高虎感ずる事斜ならず浦生備中喜多川平左衛門は同じく將机よかり士卒を下知して居たりしが此手の者共皆討れしうば備中今は是迄なりと大太刀を振て敵兵めまた進倒し馬も離れまはしたゝすみ息つきて居たる所へ織田有樂が來りければ君の老らしめさずや某の浦生氏郷が方にて横山喜内とて會津掘川の城主にていし者にいといふを有樂聞ていりにも知る人之幸の事あれば我に従ひ來るべし内府公へすて助命せしむべしといへば備中からくと打笑ひ君のまさしく織田殿の御弟にありしあがら餘りに人物の御見分なき事裁備中危に臨み義を捨て生を貪る者と思召るゝかといひあがら有樂が右の股を切る有樂大に驚き左の方へ落馬す有樂が郎等鎗取て備中を突んとす澤井久藏と名乗

かゝるを備中其儘切倒す澤井が家人一太刀討て引組しが其者を組敷て首を取立わがらんと
 する所を大勢にて取込て備中に切てうゝる備中數ヶ所の深手に堪へ兼倒るゝ所を有樂やう
 く起上り傍に寄て其首を取る喜多川平左衛門其場を遁れ行衛知れずと成にけり鳴左近
 も亂軍の中にて討れしにや（天元實記に始菅六之助が属兵の打たる鉄炮にあたり死たり
 と見ゆ諸系圖纂に左近兩人の子討死と聞て敵中に馳入て討死す左近父子が牌與福寺持寶院
 に現存すこの左近滑興が父豊前守建立の寺と見ゆ此説によれば是るが如し）左近が二
 子十次郎ハ兄新吉と同じく討死せり三成が勢終に敗北して右往左往に散亂すれば三成も詮
 方なく伊吹山にかゝり近江路さして落行ぬ（基業）小西攝津守行長手勢の敗走するを見て大
 に怒り使役を先手へ遣つし今のうちに三町ばかり練引にし足輕共を一所に集め置搦合を見
 て筒先を揃へ鉄炮を打ちけ我等旗本を以て突懸るべしと下知す先手ハ此下知を守り備を練
 引にするを東軍ハ小西が勢ハ石田が勢の逃る故友崩れして逃ると思ひ大勢にて八方より追
 うゝれば小西が勢ハ行長が下知の場所にも備を立兼行長が旗本ハ崩れかゝれば行長大に怒
 て制すれども諸勢耳にも聞入ず混亂して逃走れば行長も制する事あたらず伊吹山さしてぞ

落行ける（天元實記）嶋津兵庫頭義弘入道惟新も散々に戦破れ主從纒に千騎計りに討ちされ
 しが石田小西が勢敗走するを見てかゝる時味方敗走する方に引退んとするハ足手まどひ
 ありてよからず幾度も向ふ敵を打破て通るにしようすと下知し中務大輔豊久にもかくと告げ
 る豊久（原書義家とします大に誤之嶋津が家系義家といふ者あり）答へけるハ我等が人数
 ハ只今秀秋勢と合戦すれば急に引揚難し豊久ハこゝにて討死すべし其間に御身の早く切腹
 て御歸國あれと言捨て其儘馬を駈出し秀秋の大軍と火花を散らし奮戦す平岡石見稻葉佐渡
 も是を大將と見大勢にてあつ取込討取んとす豊久今ハ是迄ありと馬上に鎧踏はり大音聲に
 吾ハ鎌倉右大將家の後胤嶋津兵庫頭義弘なり運盡て只今自害す人手にかゝりしにはあらず
 後日に過誤をいふべからずと言さから馬上にて腹うち切太刀の先を口に含み馬より下に落
 ち貫かれて死す是を見る郎等八十餘人皆敵中にかけ入て思ひくりに討死す豊久が首をハ秀
 秋郎等笠原藤左衛門是を取る此ひまに兵庫頭むらがる敵を打破りくち退く所を福嶋刑
 部大輔正之是を遮り討んとせしが小勢ゆへ打破られ其時御旗本先隊酒井家次が備も亂れた
 つ東軍是を討留んと右の方より突うゝる義弘も今の討死せんと覺悟して大敵の中へ馳入ん

と見るを見て家老阿多盛淳入道長壽(一本忠實)是を留め恐れありといへども某御諱を犯して御身替り仕へし其間にどくく退給へて吾こそ義弘入道惟新ありと名乗大勢の中へ駈入て散々に戦て討死せり此時義弘が手勢多く討れ残兵今の三十餘騎雑兵五百ばかりにて落行所井伊直政の忠吉朝臣をともなひ今朝より勇戦ししは馬を休め居たりしが今義弘主従落行を見忠吉朝臣逃すまじと馬を馳給へば直政が手勢貳千計り直政眞先うけて追うくる義弘が主従の早足に逃て地理を見計らひひしくと折敷て鉄炮をはなちかくる柏田源藏(一本大野將監)といふ者が放たる鉄炮直政が腕にあたり馬より落しが浅手あれば事共せず又馬に乗て手勢を下知し追討す義弘二男又七郎を始とし従兵五人雑兵三十餘人討れたり石田より嶋津方へ付置たる入江權左衛門ねらひ寄て直政が左の高股を切る直政が馬驚て南へ駈出す井伊が勢の主人深手負て退くと見て主人の跡を追て引返す御旗本勢嶋津を討留んと進みけるを神君御覽じ備を亂さず引退く敵の追討へうらずと制し給へば義弘の残兵を引まどひ落て行爰に筒井伊賀守定次會津陣の御供して東國に下りしが小山より本國へ馳登る伊賀國上野の居城を守りたる家人ども定次歸るを待に及ばず上方の大勢に恐れ城を寄手に

避渡しければ定次途中にて此由聞て詮方あく御先手の人とどおなじく岐阜攻の人數に加ひりたり今日の二陣は備へ先刻より合戦せしが只今しばらく休息す(藩譜)家老中坊飛騨守秀祐嶋津が落行を見て是を追討給へといふ定次味方の大勢前にありて人數を進めたりしといふ中坊しうらば某御先へ参り地理を見定むべしと福嶋が備脇より小溝を渡り備へ嶋津が兵と挑み戦ひしが義弘の此所をも切脱し瀬土岐多羅の山路よかへり落延たり又長東大藏大輔政家の石田三成が先刻天満山にてあけたる合圖の狼烟を見ると其儘に宰相秀元の本陣へ使を以て早御先手へ御下知有て御人數を南宮山へ進め給へどや送る秀元尤ありとて先手へ其儘遣はされしが吉川藏人少しもさへがず旗を直さねば秀元勢せんかたなく兵糧を遣ふと予觸て時刻をうつす其間籠に備へし長東安國寺長曾我部兼て吉川關東へ内通の事の察したり秀元も裏切するかど氣遣ひて終日戦を餘所にして山上を守りつめて居たりける秀元の人數兵糧をつらふまねをして時刻をうつしたるを以て宰相の空辨遣と後々までも傳へたり彼是する間に關原上方の軍物取績とありぬ(基業)長東政家が郎等一人此時主の政家を諒けるの合戦のならひ今日の負が始終の負にもあらず東軍の打勝たれば所々に散亂し

内府側よ人はあるまじく急いで御かゝりしへ内府を討つ只今にていといへば政家尤なり
と早く一手の勢を以て駆出しが如何しけん途中より直に伊勢路へうり落行けり是を見る
と安國寺も長曾我部も備を崩して逃出す秀元へゆるく明日此所陣拂ひすべしと其用意
る所へ安國寺立返り弟子の僧菊首座を以てやけるは愚僧へ長束と同道して退くんと存し得
共愚僧秀元様を御見捨すべきにあらざし只今立返れしや法師首刎給へんとあらば覺悟に
いとやけれは秀元も且感じ且憐みて扶助ありしが翌十六日安國寺も召具して陣陣せんと用
意せし所安國寺何とう思慮しけん十五日夜ひそかに南宮山を逃出し京都をさして急ぎける
(三將傳)今日敵の首を討取事三万五千二百七十餘級(基業二万八千餘と有)御味方も討死三
千餘人と雖ども大將分の者の一人も討れざりしかば神君御悅斜みならず誠や今朝御進發の折
から御旗の上にいづかたともなく鳩飛來り集るを見て八満宮神慮も思ひやられしうべ城和
泉も御勝軍疑ふべうらずと賀し奉る又青鷲の飛來るを見て伊奈圖書例の青鷲が参りしとて
悦しと成り(大成記基業)實にも天意神慮感應する所尤かこきとあるべし物て今日の合戦
辰の刻に始り其終りの未の上刻頃なりとぞ(天元實記)

案るに天元實記の大道寺内藏助が物語を引て關原戦の日本國が東西に別れ雙方廿万
に及し大軍關原に一所に寄集り辰の刻頃始り未の上刻時分に勝負の片付たる軍され
ば作法次第といふともなく我がちにかゝり敵を切崩したる事にて逗留あどいふ事も
なく四方八方へ敵を追行たれば中々脇ひら見る様ある事ならずと見へたり是さるとな
るべしと思へる又石田三成武道不得手ある様に世人沙汰すれども殊外士を愛し武道譽
の者どさへやせば万事を置て抱集しゆへ關原表にいても先手組の者共晴ある討死
を遂たる者も數多有り小西行長へ肥後の國半分領知し金銀財寶の不足なかりしが武功
譽の者に高知わたへし事嫌ひし故先手に能者なりしうべ大軍に似合ざる見苦しき敗
走したるよし淡輪六兵衛が物語したる由をしるす是等皆當時其所にて目撃せし者の
説なれば實事と見へ珍らうなるによりこゝに附しおく物なり

諸將御本陣參詣の事

關原一戰關東勢御勝利逆徒皆敗走しけれは神君の御本陣にて御床机をめし勝て兜の緒をし
むるといふ諺ありと御兜を召さる左右に伺候せる御譜筆近習の大小名皆と鎧一縮し袖をつ

らぬて今日御大切を賀し奉る我等の手もあろさず各達の忠勤にて心のまゝに勝利とありぬ
 と仰に各有難しととりく御武徳を感仰す御先手の諸將も追ふに兜を脱て高紐にかけ御本
 陣に参り御武功御大成を賀し而も戦功を聞へわぐれば黒田甲斐守長政を衆人の中にて御傍
 近く召て今日の勝利全く其元の戦功による此芳志報謝するに詞たらず黒田家世々疎畧ある
 まじとて長政が手を取て戴りせられて是の當座の引出物なりとて吉光の小脇差を賜われば
 長政恐入て感涙鍔の袖を濡せり夫より諸將夫々に皆御戦功稱美の御詞を施さる福嶋正
 則今日本多中務が人数あつらひ聞しにまさり目を驚かしし事にいとやければ忠勝も御先手
 の諸將御側何も比類なき事にいとやて又打笑て今度の戦の事五度も七度も有べし
 と存ししが思ひの外弱敵もろく崩れ本意なく覺しといへば聞人舌をふるひ其猛勇をぞ感じ
 ける田中兵部少輔金森法印藤堂佐渡守有馬玄蕃頭生駒讃岐守峰須賀長門守加藤左馬助等次
 第に参り其戦功をす上れば粉骨を盡されたりとて御感斜からず諸手に討取者共一御實檢
 有て戦功優劣の御沙汰あり本多内記忠朝のあまり烈しく働いて太刀も反て鉏本五六寸鞘に
 納りぬしかば横に持て御前へ参る其方高名仕たる者と御高聲にうけらる織田有樂の其子

河内守同道し津田長門守と同じく参りたり有樂は是浦生備中が首にいと自身御覽に入る御
 坊老跡に不似合の手柄致されたり備中若年より聞及たる者不便あり其首の御坊懸に非り給
 へとて有樂へ遣りさる(基業)河内守の戸田武藏守といふ武功の者討とられ高名比類なしと
 御稱美有りしよ近臣側より河内殿武藏を突れたる鎧兜の左より右の方へ突貫られしに少も
 損ぜぬよしにいとや上れば其鎧御覽あるべしと有らう河内守家人にもたせし鎧を取て近
 臣にわたす神君其鎧を御みづから鞘を脱し御覽せらるゝとて御取落しあり御指にあたりい
 さゝか血の出給ひしうと其儘御覽有て此鎧の尋常ならず作の文字村正にいなきうとの御詫
 あり有樂いふにも村正の銘いとや上程なく御前を退き近習の人々にむらひ先刻鎧を御覽に
 入し時村正が作りと御尋ありし何ぞ子細いふと問はしに近習の人々がけるはされば内府の祖
 安祥の三郎殿家人阿部彌七郎がわやまつて不慮に弑しける刀村正が作りに又其子岡崎二郎
 三郎殿を家人岩松八彌酒に犯し傷しむ村正と承りいと答ふ有樂聞て然らば内府の御味
 方に参る程の我と村正が作の用ゆべきにあらずと近臣の見る前にて其鎧をば微塵に打くだ
 きおし折て退去せり又下野守忠吉朝臣今朝嶋津手にて合戦に御手を負給へば腕を絹に包み

襟たもとにかけて参り給ふ井伊直政も手負てまひたるまゝにて郎等に扶けられて御前ごまへに出る神君御覽みまはじて下野手を負たるかど仰らる忠吉朝臣たけよしかすり手にていと仰ける其躰そのみまともゆゝしく御舉動ごさうどうを見る者悉く感心す直政の手疵なまはらをバ殊外ことごと驚おどろ給ひ御床机ごしやうきを離れ給ひ御掛視ごかけしより御藥ごくすりを取出給ひ直政が疵所きずしよへ御自身ごみづか付て下されたり有難ありがたかりし事にころ直政の下野守殿御手柄あつぱれ天晴あつぱれゆゝしき御事にい逸物いぢりものの鷹たかの子ハ逸物いぢりものにていとや上れば神君との外悦あはれせ給ひて逸物の鷹匠たかにやうが取飼とりかひたる故ゆゑなりと仰られ御機嫌ごきげん大方おほあらず直政又諸將しよしやうの方に向ひ今日我等手より軍を始はい事御先手諸將ごせんしよしやうを欺あそぶたるとくといへども全く左にわらず其ハ物見ものみに出しが惣合しやうあひよくいし故止事やむことを得ず軍を仕掛し各諸將しよしやうの御武功ごぶく感じ入いれとやけり其後池田輝政いけだ淺野幸長あさの參謁さんてつす今に始めぬ手柄てがらありと御感稱ごかんしやうあり兩人すハ毛利宰相吉川藏人きしかんも同道仕どうだべしといへども大坂表の事こと必元かならずあくいへば吾われらハ只今より直に毛利吉川同道きしかんし大坂へ参り輝元てるなも猶なほ又諫め合躰あひあの約やくを堅く仕しとて退出たいしゆつす神君ハ此時村越茂介むらごを召て金吾中納言きんごが何の憚おそる所有しよりていまだ此所へ來られざると見へたり汝なんぢ迎むかへて來りいへと命いのちぜらる茂助松尾山まつすけに至りて見れば金吾きんごが備ひの皆金の杖釣えつづの指物さしものにて有あければ金を以て山をつゝみたるが如くかはやきけり秀秋

やがて近習十人計り引つれて御本陣ほんじんに來れば黒田長政くろだ披露ひらせし神君床机しんきんを下させ給ひ御兜ごかぶとの忍しのびの緒計り解とけ給ひ中納言殿ちゆうなごん弓矢ゆみやの禮義れいぎ是迄こゝにいと仰はつと秀秋ハ道芝みちしばの上に低頭ていとう平へい伏ふして今日御大勝ごたいしやうを祝し進まらす神君ハ中納言殿ちゆうなごん今度裏切このたびにて我等勝利しやうりと成なり戦功せんこう莫大流石なげ小早川殿こはやしの世繼よつぐと感じ入いれ此後如何このああるまじくいと仰あり御側ごがはより長政取次ながさて秀秋卿しゆあくにハ明日直に三成み成なりが佐和山城さわやまを攻せ拔はて三成親族郎等しんしゆ迄も一ひと討うちます度たびいと願ねがはれハ彌御満足やみごまんぞくのよし御挨拶ごあいさつあり秀秋恩おんを謝あやまして歸陣きじんせらる夫に引つゝ脇坂中務少輔わきざか朽木河内守くしき小川土佐守こがわ赤座久兵衛あかざ稻葉佐渡平岡石見等いなばも追おひまりまり參謁さんてつし御祝義ごしゆぎや上る其次つぎに三河守秀康朝臣まゐより御供ごともふ付られたる眞砂ま砂さ作兵衛山名ま興き次兵衛兩人も兜首かぶとくニッ持もて参りければかせきたりと御詞ことばをかけられさて合戦あ戦せんの様子秀康しゆかうさぞ案あじら煩わづらふべし兩人早はやく罷下ひり勝利しやうりの事秀康へや聞安心こころさせよと仰あり兩人畏かしこり奉りハ然る所兩人事ふたりにごとハ手負てまひいへハ道中みちちゆう急いそぎなし事ことかなひ難たがしとや上あしらばまうらば緩ゆるく養生やうじやう加くへいへ使つかハ他人たにんにや付つべしと御説ごせつあり此兩人このふたりにハ原書太田美濃守はらとす誤あやれるに似たり今ハ天元寶記てんげん基業きぎやうによるより岡江雪おかえ是を福嶋又山岡ふくしまといふ誤あやれ今いま日逆徒等ひさか悉敗しよつぱい北きたし夜の明あたるとく被成ひ成なり御凱歌ごがいを取行とりまり然るべしとや上る神君しんきん聞召きこしめし

にも尤なり去あから各はじめ諸將の妻子大坂城に證人として出置れたる事なれば我志諸將の心中を察し心苦しき思ひ三日の間に大坂へ攻登り諸將の妻子を引渡し其後目出度勝開規式取行ふべしと御誼あれば是を聞大小名この御妻子の事を思ひ出せ者もあき所此仰にて始て妻子を思ひ出し我々心中思召やらせ給ふ御仁心と骨髄に徹し深くかこみ各感涙鏝の袖をうるをしけり黄昏に及び此所を御出馬あり大谷吉隆が陣取し藤川の臺に御動座有て大谷が拾置し陣小屋を其まゝに御陣屋とさされ今夜の爰も御止宿ありいかに御簡易の御事と上下感じ奉る今日申の刻より大雨篠をつくが如し諸陣飯を炊事うさはず其時神君下へ令し下されし必生米を食ひ病を引出す物あり只今より米を水みひたし置戌刻に至て食すべしとなりかゝる瑣細の事まで御心を用ひさせ給ふとたぐひなき御事の下迄落涙して有がたく感じ奉れり其後朽木河内守元綱の一旦石田に組し御敵と成りし罪告所なしといへども秀秋裏切の時の少しく志を顯し大谷が陣に攻入し上の御免下さるゝ様にと細川越中守に頼りに愁訴しければ忠興黙止がたく思ひ同道して御本陣に参り御直に朽木前罪を悔て御免許を願ふよし申上げるにいまだ御答もあらざる所へ朽木の御幕の内へ首さし入何と

ぞ御免を願奉ると申ける神君其眈を御覽じ笑ひせ給ひ其方などの草のきびきといふ物にてさのみ罪といふ程の事もなし本領安堵と仰ければ朽木始て生たる心地して只有難じくして其所を退く小川土佐守祐忠の柳監物直盛が叔母鯉なるゆへに一柳を以てさまぐ隙謝せしうども小川父子の石田三成がちあみふりき者ゆへ御免の沙汰に及ばずされども一柳があなごちに願ひ奉るにより死罪一等を減じ父子ともに助命ありて一柳は召預らる爰に又諸大將の御本陣に参りし夜戌の刻あり神君何事ぞとて御對面有しうば今日下野守殿御自身御高名有て御手負のせ給ふよし承りし連れ其御武功くわしく承はり度旨なり神君聞召下野事の井伊兵部同道して先手へ物見に出し所時刻よしとて不慮に颯津が勢と戦ひ下野兵部手負たるよしにて先刻我等前へも来りしを其場の様子我等もいまだ聞ず其場へつけ置たる小栗又一常陣に罷あり此者に承るべしとて又一を召出さるれば諸將又一に向ひ今日下野守殿御自身御高名の御働諸勢耳目を驚らししと承りし其元見られし所委細演説承りた心どいへば又一聞て先刻も入りに聞れて番取に及び其故の某も下野守殿に従ひ直政とあまじく先手の物見に罷越し所福嶋殿御備脇を通らんとせし時福嶋殿の御内可兒才藏

名乗今日先陣の内府公より左衛門大夫仰候りいへば何人にても通すべからずといふ故直
 政親の井伊兵部と名乗り先手物見に罷越と断り人数の跡に幾も二十騎計にて先手へ乗抜
 見いへば盪合まければ其儘備津が勢と戦を始ると銘々命限りに面もふらず戦ひ以て余所
 の事見る暇なく以下野守殿組討の機子さらば存ぜずといふ答ふ諸將是を聞除方多く其儘退出
 ず其跡にて又一に何故下野が働き委しく諸將に語らぬと御尋有しに又一謹て申上げる
 の凡自身の手柄高名を心掛し事又一等少如き匹夫の事にあるべく以下野守殿に正しく
 御所構御公達にて今度の副將軍にてわたらせ給へば三軍の命をつらさとり軍旅の進退を御
 下知あるべき事あらすや然るを匹夫の勇を争ひ御身敵兵と雌雄を争ひ給ふの恐れあがら御
 卒忽勿跡あしと存し是を外様の諸將に物語せんに彼入るもしや下野守殿大將の器あらずと
 さみする者もいりんうと存じわざと知らずとはすい之誠の備津が内にも九州一と聞えい剛
 勇無雙の名に願れし松浦三郎兵衛が太刀風味方の兵の辟易しなびき立たる其中へ下野守殿
 乗寄給ふを見て松浦が打りくる太刀を右手の袖に受とめ松浦が馬手の綿嚙より頭の半切込
 んで引祖兩馬の間に落ちさきり二三度上下に轉ひ給ひし時某幸に御傍に有ければ助太刀

致さんどの存せしが初陣の高名に人の助太刀を得たる時の必癡と成る物と古老の詞を聞し
 故わざと見ぬふりして居たる間に守殿御力やまさりけん終に松浦を組敷ちつとも働かせず
 首をも郎等にどらせ給ひける御力量なら早業なら諸人目を驚かしぬるもさる事なりと申上
 しうバ神君も始て委細を聞召守殿の武勇又一が遠慮の程御威大かたならざりける(天元實
 記)かゝる時何者の仕業にや關原の町はづれよ二首の落首を札に書て立にける(基業)

徳川のはけしき波の打こえて

石田宇喜多の跡うたもなし

音なきく青のが原の名のみにて

みる紅のよしきをぞしく

正校 三河後風土記卷第四十

佐和山落城の事

かくとたにえやの伊吹のさしも草さしもいさみし石田方西軍すべて十万余騎宇喜多石田を
 始として伊吹なる所に吹散らされ峯の紅葉は野邊の露皆散々に敗北し伊吹の山に逃入て右
 往左往に散亂す三成が居城江州佐和山に三成が父石田隠岐守政成(一本重成)兄空頭重成
 (一本正澄)其子右近朝成三成が子隼人正朔宇多(一本尾藤)下野守頼忠同河内守同惣次郎尾
 藤善四郎等の木丸をまもり筆尾に山田上野北丸に河瀬織部中の丸に養壽院たて籠りて堅固
 に守護し九月十五日關原表東西の一戦勝負いかに待居たまはして城中に残りし女房稚子
 の神に祈り佛を頼み吉左右をのみ待にける然る夕暮方に味方終に負軍しぬと聞へしう
 は女房たちいといと猶是のいかにと驚きて泣より外の事さき隠岐守空頭等の城兵に下知
 し然らば今夜定て三成のよも歸り來らんと城中烽火を焚せ木戸を開て待けれども三成の
 音信さらに聞へされば若討死わりしう生擒れしういづれにも明日の關東勢當城へ押寄すべ
 しとるども三成が居城やとくと乗取られん無念ありいと一防して寄手の來るをさびや

かさんと城内嚴しく用意してぞ待りけたり明れば九月十六日神君の藤川盛を御進發あり正
 法寺山に御陣を移さる佐和山寄手の總大將筑前中納言秀秋昨日松尾山裏切手ぬるくて諸將
 の嘲りを恥ぢわごと所望して今日城攻にむらひたる事あれば平岡石見稻葉佐渡も殊更氣を
 とき精をみがき諸勢を下知す小早川隆景このかた生残りたる武功場敷の勇士もあまた有け
 れば今日此城攻落さずしての再度人に向まじと勇み進む黒田甲斐守田中兵部少輔藤堂
 佐渡守井伊兵部少輔石川左衛門大夫等も跡よりつき摺針鳥本より二手に分れ押寄る井伊
 の殊更筑前勢に押並ぶ(家忠日記)黒田の別後藤又兵衛に命じ備を張出し筑前勢のたゆみ
 あるの入り入り一働せんが爲め是も筑前勢先手と押並びてぞ進ける筑前勢の大手口より押
 寄たり大將秀秋此日の出立の紫下濃の鎧に菊桐の下金物打て着し白星の兜に吹返にの金銀
 を以て一文字に三星の紋を付龍頭は鍬形打たるを猪首に着なし獅々に牡丹の正平革の脇楯
 し十王頭の脇當金作に虎皮の尻鞆うけ白波といふ月毛の馬七寸計なる太たくまじきに金覆
 輪の鞍置紅の厚房の鞆萌立計あるを掛て打乗り金の釣枝の指物朝日にかいやすき朱の旛取て
 一陣に進み衆を勵まし進よ攻よと下知ある有様天晴大將軍とぞ見へたりける大將精をもみ

て下知あれは士卒のうてう少しも猶豫すべき押寄るとひとしく闘を作りうつき進てぞ攻め
 うる城中にも待設けたる事なれば矢炮雨霰の如く打出し射出し嚴しく防戦すれば寄手討
 る者數を知らず一手の侍大將物頭自身一陣に進み乗廻し下知すれば討る者をも
 翻みず乗廻し攻立れば城兵も防兼て予見へにける其日も夕陽西山に傾け御本陣より
 して今日の兵を引あげて明日早天より攻へしと御下知あれは松野主馬石川佐右衛門鎌田五
 郎兵衛谷澤茂右衛門等兵をまとめて虎口を引取城を圍て夜を明と其夜中城中頗に思ふ長谷
 川右兵衛とても籠城叶ひがたしとや思ひけん平岡石見が陣へ矢文を射て降参を乞ひたり其
 事石田隠岐守開出し大に怒り是を誅せんと用意せしが右兵衛又其内意を推察し水道より進
 出し筑前勢へ降参す蜂尾を守りたる山田上野も夜に紛れ出奔すれば城中のいど頼み少あ
 く見へにけり十七日に早天より平岡稻葉松野に筑前勢を下知しおめきさけんで口より
 攻寄る石川左衛門大夫等の松原口切通口より攻入井伊直政(基業田中吉政とす誤れるに似
 たり今の家忠日記による)の水の山口より攻入れ城兵今の防戦もあらず皆本丸へ引入け
 り直政が手より城中に火を放て折ふし暮秋の事なれば山風烈しく城内所々に燃付る城兵

忍びくゝに落行て或ハ次第に入少に成り女童部の烟にむせび泣叫ぶ目もあてられぬ有様
 心剛なる石田隠岐守同空頭宇多下野守等防戦是迄にハ三成ハ一族眷族共ハ皆自害仕へし城
 中男女の命御助下さるべしとぞ請にける直政其旨を御本陣に申上しに其頼のまゝハ計らふ
 べしと仰われハ直政より其旨返答す隠岐守空頭さらハ我ハ切腹し城中に是迄残りし者共の
 命を助べしとて隠岐守空頭下野守河内守惣次郎善次郎等石田ハ一族一座に並居おまじく腹
 をぞ切たりける土田桃雲ハ三成ハ妻を始めゆかりの女房一ハ介錯し其身も其座を去らずし
 て切腹す十七日尾州佐和山既に落城せしかハ石川長門守内藤紀伊守西郷若狭守をとりめて
 城を守らしめ(基業にハ金吾黒田兩家の者と有今ハ全く家忠日記によつてしるす)神君ハ秀
 秋に御對面ありて佐和山城攻の軍功比類なしと御稱美われハ秀秋ハ直政ハ武功聞しに百倍
 せりと御挨拶ア上られける神君ハ午刻正法寺山の御陣を永原に移され田中兵部少輔吉政を
 召て三成佐和山ハハ歸城せざると見へたりしかれば何方に逃隠れしう知がたし其元ハ江州
 案内者なれば草を分て搜索あるべしと仰付られたり(基業)

大垣城攻の事

大垣城には宇喜多石田の命を守り福原右馬介直高本丸を守り垣見和泉守家純熊谷内藏助直
 陣木村惣左衛門父子三丸は高橋右近長昌秋月長門守種長相良左兵衛尉長每守り居たる所大
 垣の城の押に置れたる水野六左衛門勝成西尾隠岐守光教松平丹波守康長津輕右京亮爲信
 天元實記にハ津輕ハ人數のみ出せしと見ゆ)取く評議したる所中にも水野勝成は父和泉
 守忠重を先頃三州池鯉鮒にて討たる加賀井彌八郎が子も常城に有と聞ゆハ一日も早く此城
 攻落し加賀井が首切て父ハ幽魂をも慰めばやと思へば早速に相談して九月十五日曉天より
 弟市正忠胤をともなひ西尾津輕并丹波守康長等と共に樂田ハ押寄ければ敵一人もあらず
 れハ直よ勇み進んで大垣の城ハ押寄る城兵も兼て覺悟の事あれば町口ハ張出して防戦ふ西
 尾光教軍を進め真先くけて東大手に馳り、れハ城兵ハ引取て惣門を閉る西尾ハ郎黨小寺平
 兵衛一番乗と名乗て塀に乗るを城兵三人にて突落す水野兄弟烈しく下知して其人數にて惣
 門を押破る西尾水野兩家の人數押込み三丸ハ攻入らんとす城兵も身命を抛て爰を専途と防
 戦す所水野勝成自身鎧を振て敵を突伏せ其首とれとて小姓岡田彌源太に其首をとらしむの
 いて河村繼服同新八村田長兵衛西尾掃部丹羽彌左衛門高名津輕爲信松平康長足輕に下

知して鉄炮を放ち大手の堀五六間忽ち打破る寄手是に氣を得て忽に三丸に亂入す水野
 が家人松浦六兵衛高名して討死し鈴木與八郎神谷又右衛門の高名す西尾水野が郎黨五六人
 城兵を追たてゝ暮ひ馳入所を門役の者付入せられじと門を閉ければ其五六人の門に立入
 らる西尾が郎黨桑原助右衛門大剛の者あればしらく城兵に紛れ門内に有て又城兵突出る
 時夫に加ひり馳出しうべ死中よ活を得たりとぞ寄手は終り三丸を攻破り町屋を焼拂ひ其趣
 關ヶ原御陣へ注進す神君此時の關ヶ原合戦最中成りしが四將の戦功を大に御稱美あり此上
 の關ヶ原表の凶徒敗軍せば大垣の攻ず其落城すべきこと火急に攻む味方も死傷多かるべし
 只遠攻にして陣を張るべしと仰下さる然るに其夜三丸の守將秋月相良高橋三人水野が陣へ
 密書を以て其等此度秀頼公仰ありとの催促に無據石田等に一味せし條後悔致す所全く本
 意にわらず若罪科を御覽遊のされいんよの福原右馬介を始め垣見熊谷木村等悉く誅戮し
 御忠節ア上へしとぞや送る十七日に佐和山既に落城しければ神君御陣を永原に移さる是
 よ々先野波の里にて中村彦左衛門横田内膳大垣へまより寄手へ力を合すべしと命ぜられ中
 村横田も大垣へ着陣せり(基業)又松平康長水野勝成兩人より永原の御陣へ使を以て秋月相

良高橋等が所中上しうべ井伊直政取次ご其由言上す康長勝成兩人にてよく討ふべしと仰
 遣のさる依て兩人其旨城中に中送れば相良又中越しけるの我く本意の如くとのいも首
 をもたせ出し塵を振へし其時旗二三本城に入らるべし其旗を我々の陣所に立置き味方討な
 うらん様計ふべしとぞ約しける扱十八日に相良秋月高橋方より本丸へ使者を立て福原に軍
 臨ありとて招きければとも右馬介の何うあやしく思ひしにや病臥せりとて参らず熊谷垣見の
 何心なく三丸に赴し所を相良秋月兵を伏置主従廿八人計り忽に討果す木村惣左衛門の其子傳
 藏も跡より來りしが此物者に驚て備中丸へ引返さんとする所を相良秋月高橋の手勢透間さ
 く追詰て木村父子をも討取たり相良左兵衛尉が家老相良兵部垣見熊谷木村父子都て五人の
 首を羽織に包み門を開て塵を振ければ水野が手方鈴木與八郎合圍の旗を持たせ城中へ遣じ
 けるを見て松平康長中村彦左衛門横田内膳が人数水野が勢よあくれじと先を争ひ亂入すれ
 ども城兵鉄門を閉て厳しく防げば攻入事を得ず引返し諸將又重ねて降参の輩評議して四方
 より本丸へ攻うゝる福原右馬介直高の兼て今度逆徒の張本人三成が聲さればとても逃るべ
 き身にわらずと覺悟し随分と走めぐり力を盡し精をもみて下知を加へ城兵も必死を極め矢

玉を借まらず防しうべ思ひの外堅固にして本丸落べし共見へざりしが其夜三成が郎黨日野七郎左衛門關ヶ原より逃來り城に入て石田始め味方の悉く敗軍し諸將の行衛も知れずと告げられ福原始め城兵力を落しおき果しが夜中溝を越へ矢狭間をくわり逃失る者のみ多くして残り留る者雜兵わづらに二三十人にて過ぎりけり福原も今の防戦術盡て覺へける所に西尾豊後守光教矢文を以て福原へ中送るは關ヶ原の戦ひ關東方大勝により西軍の諸將皆生擒せらる相良秋月等の早く天命を知て降参し本領安堵せり其元にて何を頼みに籠城して誰が爲よ力を盡さるゝにや其城中加賀井彌八郎が子を籠置るゝ由之寄手水野六左衛門に加賀井の父の仇なれの水野其首切て憐憫を散せんとす其元孤城を守り討死せられん事天命を知らざるに似たり益なく討死せんより加賀井が子を水野兄弟に渡し城を退去せられんに本領迄こそかたからめ某軍功にりえても一万石の進ずべしと有けるにぞ福原も詮方なく人質に賴書を添へ給いらんに仰よ從ふべしとぞ答ける西尾尤ありとて誓詞に添て家老谷清兵衛を遣ひたり福原今の詮方なく剃髪し道温と改名し九月廿三日城外へ出しに大垣守將の事されば先づ勢州朝熊山に盤居せられ御本陣の御下知を待たれ尤とぞわれれば福原詮方も

あく大橋より出船して朝熊に至る此所迄谷清兵衛見送りしうべ福原あつく謝し清兵衛に關兼光の脇差をあたへ光教へ書状を送り清兵衛以下送りの者を返しける其状にいふ
 昨廿七日朝熊へ致参若し則今日清兵衛并送りたる衆返進の條令啓上は被入御念にて路次中泊以下に至迄無殘所馳走共に由彼是以御芳志難報い度く如や上内府様御前の儀彌奉願計し猶以拙者所存の通爲可や上使者を相添進入し間被聞召御分別を以如何様共御馳走所希し願て御左右奉待し恐惶謹言

九月廿八日

福原右馬介入道道温

西尾豊後守より大垣城を受取し事共并福原を助命の事并伊直政迄其旨やし上げられ大垣城の松平周防守康重も遣ひされ勤番せしむべしと命せらる松平丹波守水野六左衛門西尾豊後守等の周防守に城を引渡して其地を引拂ひ豊後守福原右馬入道助命の事度願ひしかども福原事石田が歸にて常に權勢に誇り倭奸を振舞其上重罪の者されば御許あるべきにあらずとて西尾より檢使を遣ひし切腹せしめらる福原も流石驚きもせず我身はかく有べき事ありと覺悟せしむべきよく切腹したるを哀なれ又もと大垣の城主なりし伊藤彦兵衛も兼てい今

村に在陣して居たりしが西軍の敗れたりと聞早に踪跡をかくし退去せしとぞ(大成記家忠日記藩譜天元實記基業)

長東政家切腹付水口桑名神戸龜山城の事

長東長曾我部安國寺等の終日毛利の裏切を氣遣て關ヶ原の一戦を見物して居たりしが味方惣敗軍と成りしうへ取る者もとりあへず九月十五日夜に入て南宮栗原山を逃出しければ十六日の曉方此徒を追討せんと池田徳永市橋横井等多藝口より牧田筋迄追掛たり安國寺の天益を旗としよろひたる者百餘人雜兵二千五百人召具し武家の眞似して出たりしが利を貪り慾に耽りし寺侍又の田舎のあふれ者共義理をも忠節をも辨へぬ者共嶋十郎左衛門といふ者一人下知を加ふれども一とへもさへず亂れ立蜘蛛の子をちらすが如く逃行たり長東が勢への松田金七郎秀宣といふ者追來る敵を熊手にかけて數十人打殺す追兵是に辟易してまばらぐ猶豫する其間に長東も安國寺も別れしに逃失しが金七郎の踏留り追兵あまた討殺し其身も終に討死せり此者もとの浦生氏郷の家人ありとぞ爰に山岡道阿彌の小山御陣より御暇賜りし御先に馳登りしが福島正則が弟掃部助正頼あまりに小勢されりとして道阿彌其

加勢を命ぜられ勢州長嶋の城を守りて居たりし所既に關ヶ原の一戦味方勝利と聞へしうへ然らばいつ迄此所に籠りて詮なし近邊の敵の城を攻取んと手勢三百七十餘人引分て長嶋の城を打て出香取の里大島居迄至る所に長東政家の松田金七郎討死の間に虎口を逃れ居城江州水口へ歸らんと急ぐとてはじたるく道阿彌に行逢たり(基業)道阿彌天のあたへ願ふ所の幸と國の慶を作り旗を進め大音聲よて只今夫へ來られし長東殿と見たるの僻目みかたすの山岡道阿彌あやと名乗突てかゝる長東も殘兵四百餘騎とてを遣れぬ所と相掛りに打てかゝり互に矢砲を飛せ散らに戦ひしが長東が兵の敗軍の落武者願神にさそひれて山岡勢に突立られはうへくの跡にて討るゝ者百餘人政家やうく殘兵を引まどめ其場を馳ぬけ水口さして落にけり(家忠日記)道阿彌の長東に取ひ勝て大に勇み直に勢州桑名の城に押寄る此城に氏家内膳氏廣同弟志磨守行繼寺西備中守定持籠りたり此城の東北は海にて石壁嶮とと崎立も西南の外堀子内堀子とて大堀あり北に川口舟入ありといへども船なぐての通ふべからず山岡勢の南の太手口より寄たりけるが從兵共すけるの此人數を二手に分て一手の太手一色目より四家本町へ攻入一手の渡地藏の邊より蟻須賀口に入直に進て吉野丸を乗取夫

より東にめぐり朝日丸三丸を攻取べしとすといへども道阿彌いやく其事おじりあん多
 くらぬ勢を二手に分てハ覺東あむ城兵もどより小勢あれども一色口蟻須賀西の口三方へ兵
 を分て防んとすべし味方ハ唯一手になし一色口より攻入べしと下知じ大手より関を作り
 短兵急に攻立る城中にも關原の戦ひ上方の軍敗北すと聞へければ籠城の兵多半落失て殘兵
 纒に百騎計り所口に分れ矢石を飛ばせ防戦せしうと山岡勢の勝に乘じ忽に大手を攻破
 り二丸三丸をとり取虎下橋の邊にて挑み戦ふ氏家兄弟とても防戦叶ふべからず和睦して城
 を明渡さんと乞しうバ道阿彌尤も同意し氏家内膳正剃髪し狭道喜と改め十七日城を出て
 大坂城に逃入て其後の秀頼卿に昵近す又道阿彌ハ桑名の城を受取家人を置て守らせ其身ハ
 直に同國神戸の城に押よする城主羽柴下總守雄利のものと織田信雄の重臣たりしが近頃故太
 閤に仕へて第一のきりもの之八百餘兵にて籠城せしが山岡に攻立られ忽に降参す雄利や
 ぐて恩免を蒙り御家人に列じ本氏瀬川と改めたり山岡こゝにも番兵を留め置き是より同國
 龜山の城に押寄る城主岡本下野守宗憲も城兵多半落失て防べき手だてなければ首を低て降
 参す道阿彌は不日に敵の城を請取て武威を近邊にかゝやかしたり岡本下野守ハ先年舊主織

田三七信孝を攻たる不忠の罪あればとて一命の助けられしうども流罪に處せられたり神君
 の十八日に永原より御陣を八幡山にうつし給へば道阿彌御本陣へ参上して今度の軍功を
 上げれば神君道阿彌を御前へ召され我干戈を勞せず不日に三成を降せし事其元の武功莫大
 の事と御座稱有ければ道阿彌拜謝して是全く某が武功にあらす全く内府公御徳威のまうら
 むむる所と啓じければ彌御感淺うらず(原書此三成を降せしを池田輝政の功とするハ誤
 なり今ハ大成記家忠日記による) 切も長東大藏大輔政家の大鳥居にて山岡道阿彌とはした
 なく行達さんぐに打なされやうく馳抜て江州水口の居城に歸り籠城し防戦の用意すと
 聞へければ神君池田備中守龜井武藏守兩人に水口へ参り長東大藏大輔同伊賀守父子に切腹
 せしむべしと仰付らる兩人畏り早速水口近邊へ至り使者を城中へ遣はし入けるハ其元籠
 城して關東勢を敵に引受一戦あらんとの御志感ずるに餘りあり然りといへども關原一戦
 關東方の勝利と成りし上ハ上方の諸將皆降参し天下一統に内府公武徳に歸順す是まうしな
 ぐら天命のまうらしむる所人力を以て争ふべきにあらす其元一人天命に背き孤城を守りた
 どひ張良陣平の智謀奨諭周勃が猛勇を振ふるゝとも天下の勢を敵に引受運を開かれん事

千に一ツも有べうら早前非を悔て罪を謝し其城を明退給ひ後榮を期せらるゝに志あり
 るべしといひせける政家も此程敗軍に心慮したる折から従兵も多く脱落てあまりに城中
 微勢にのみありたり家人等が心中も計り難ければ其使者に同意の返答して家人少々召具して
 櫻井谷の民家へ移りたり池田備中守龜井武藏守兩人さらば政家父子に腹切らせんと櫻井谷
 へ向ひければ政家の家人奥村左馬助西川兵庫を使として御兩所是迄御來臨ある事の全く我
 等父子に切腹せよとの事成るべしとより覺悟の事さればさらに驚くべきにあらざ但しい
 きう時刻延引給るべし其用意仕るべくいひせける池田龜井兩人も御覺悟の上の御心
 靜に用意尤いと返答すまはらく有て政家が嫡子伊賀守の廣庭に疊を敷せ其上にて兩人の儉
 使に一禮のべて腹切ければ郎黨林甚藏介錯して其儘其身も腹切らんとするを傍の者押止め
 其刀を奪取る其後政家自装束にて閑をど座に直り池田龜井兩人に向ひ是迄御出御苦勞よ
 さらば御暇すまで又申ける御兩所に頼み置事あり某家人奥村左馬助幼少より身近く召使
 い故定て冥土黄泉の供致し心得と見へし殉死の益無の事なればかみらず御留給り度いと
 いひて其儘腹士文字は搦切しに左馬助介錯して其刀にて其身も自害せんとするを池田龜井

が家人多勢取付其刃を奪ひ兩人も主人の遺言を背うん事却て不忠あらんとやうくに教訓
 すれば左馬助も力なく其座を退たりかくて兩人の水口の城に入て無檢するは政家府庫に
 積残したる金銀黄金五千枚銀三百貫目金銀斗つきの刀脇差千と其外金銀をちりばめたる
 珍器奇玩山の如く有けるを其由御本陣へ申上しうバ悉く檢使まよりたる兩人へ下されし
 ぞ成り此政家もどの丹羽長秀が家人ありしが故大團抜擢の恩を蒙り水口の城主と成り五奉
 行の其一人とせられしうバ權勢天下を傾け財寶を集め安富榮耀を極めしうと一事の堪れも
 きく滅亡せしこそはうきけれ(甚業)

毛利秀元退口の事

毛利秀元の關原一戰終る迄南宮山に在陣せられし所長東安國寺もついで落行しうバ吉川
 藏人福原式部兩人先陣より來り常表の一戰はや終り此度の御弓矢の御家の大事と存して兩
 人ヤ談内府の御和談整ひし長束殿始め皆々敗走被致しへば御家の事はや御安心有べし
 つとも今回の和談にいかたき書面の取りうしなくいへども更に御氣遣ひひかずといふ秀
 元夫の合點ゆるぬ耐らひ心得ぬ事と思われしが輝元も既に同意とわれは詮方なく同意の

返答す吉川福原兩人其共の明日内府公御川有て御先へ參り間是迄の御備立にてゆるく當
 表を御立遊べし御尤にいとて退出す秀元ハ兩人の事條心得ぬ事と思われ明日ハ夜明物色
 さだりならず當地を引拂べしと陣觸有て十六日朝日の昇る頃出立あり中國の者共多方昨夜
 中逃散て毛利讃岐守元政父子計り三千餘騎にて秀元の跡をうつて従ふ徳永法印市橋下總守
 が勢を始め郷人共是を遮んと大勢跡を暮ひ來る秀元馬廻りより田代助六内藤三郎次郎同四
 郎右衛門宮城太郎兵衛等引返し鉄炮を打掛く追拂ふ吉見善右衛門繁澤與三右衛門等ハ牧
 谷口にて郷人共あまた討取る又鷲籠山の麓にて郷人大勢付幕ふを追散らし伊吹山の麓にて
 日も夕陽に及びしうハ其所へ陣を張られける明れば十七日八幡山を過る頃先手の者共何を
 う聞誤りけんどつと崩れて秀元旗本迄きたれり秀元かくと見て馬より下り敷皮の上に
 座し崩りたる者あらば討捨にせよと下知有ければ先手漸々去つたり依て又秀元馬を進
 めらるゝ所に永原の町屋焼立通行を得ざりしが夫も漸く焼落ければ僧軍行を進めらるゝ
 所に吉川と福原兩人來り御家の御爲されハ宰相様ハ内府の御方へ證人に御出遊さるべしと
 申ける秀元聞れてよも内府左様の事ハ申さるまじくハ我等は輝元卿の仰を蒙り此地へ出馬

せし事されハ輝元卿へ對面をせざる中ハ思ひもよらずと答らる兩人何事も中納言操御爲に
 ていへハ人質に御出御尤いと諒けれど田代助六此事を聞て宰相様御若氣にて兩人仰の如く
 人質に御出有べしと仰られし得共其かく被置問ハ左様ハ相成らずといへハ吉川も福原
 も無興氣にて退ける此助六元ハ織田右大臣家に近侍せる者にて美濃尾張の地理ハ熟知し木
 石の敷迄も覺へたれば御心安らるべしといハ甲斐くしく秀元の馬前に付添供奉しければ
 人諸其老練の舉動をぞ感じける扱醒り井邊迄至れば唯今關原勢石田の佐和山の城を攻る様
 子にて天守ハ火燃へ出城中一面黒煙立登る此邊一圓に關東勢入亂れたる其中を秀元勢押通
 らんとするを見て道を遮り留んとして秀元の軍行の間を押隔立切らんと所々より雲霞の如
 く集るを見て毛利讃岐守并田代助六前後の人数を指揮して他の勢に少しも混せずゆるく
 と噪りぬ跡にて秀元馬廻り兼指物もいさゝら亂れず整々堂々として押通る佐和山より向ふ
 の方廣き所に金の扇の馬印押立たるハ正數内府公御陣と見ゆれば秀元方の者共いりにも心
 を悩ましける所御本陣の方より何事やらん黒具足に紫の四半中に白立筋一付たる指物にて
 黒鹿毛の馬に乗たる武者唯一騎かけ出す秀元方ハ何事ぞと不審する所此者秀元の前迄馳付

て馬より下れば秀元も馬よりありられければ彼武者一禮して某の永井右近大夫直勝とすい
 内府使にてい内府口狀に數日の御在陣御苦勞に今度の一戦御殘多思召べくい軍の勝
 敗心に任せぬ習ひ古今珍しからずい某やがて上洛すべくい其節委細承承るべくいと演
 しうバ秀元も御念入い儀畏入い仰の如く上洛の上向事も入べくいと御返答に及べバ永井
 右近大夫の一禮を述て立歸るとて馬を乗出し雲霞の如く群たり關東方の勢に向ひ安藝宰相
 殿唯今御通行されバ東國の勢の右の方へ片付左の方の宰相殿御人數を押通しいへの御詫
 なるぞと高らかに呼りて馳歸る是迄押並て來りむ者共の御詫と聞にぞ大に恐れ皆道を開
 て通しければ秀元勢の道廣く押通る右近大夫の御本陣に立歸りしうバ神君秀元軍令の整
 たる様を聞召て加様の時こそ人の剛應の見ゆる者なれ中しつうに通る難き物之若年あが
 ら老功の工夫覺悟を持たる人ぞとて御稱美有けるとぞ福嶋左衛門大夫黒田甲斐守の吉川
 戸福原と相談し秀元人質に抑留せんと思ひ先に膳所の湖水邊へ陣取つて秀元の來るを遷
 しと待掛たり秀元の御本陣の前をすきて登里計り進み行所右の方に赤嶺押立て眞丸も備た
 るの井伊直政が備と見ゆれば秀元方從兵ども是をも氣遣ひしが直政少しもかまひぬば彌

進んで江州野路迄至る所福嶋正則來りて對面し膳所湖水の邊に黒田甲斐守着陣して御待す
 い御立寄御休息下さるべしといへバ秀元承諾して黒田が陣に立寄らる福嶋黒田兩人相議し
 秀元をもてあし互に竹葉酌うのてむつまじく物語と扱輝元卿御爲にいへバ御和陸の證人
 として御滞留めらば然るべうらんとす出じければ秀元聞れ其儀の吉川福原等も度々聞い
 へども某今度當表へ出陣せし輝元の命に依て然れば輝元に而談せずして何と仰ら
 るゝとも同意あるまじくい兎角輝元へ而談を急ぎは得ば暇やて早大坂へ罷越いといわれ
 なから甲斐守が右の腕を小手ぐるみに取てしめ付突倒し其儘座を立て大坂へおもむきけり
 甲斐守の秀元にしめ付られし腕より肩迄しびれて不自由なりとぞ(毛利家記)

小西行長就擒付小幡助六の事

小西播津守行長の父を彌十郎(法名如清)とて泉州堺の藥商なりしが才覺ある者みれば太閤
 間諜とせられしが浮田直家を味方に引付し功により太閤采地千石を授らる行長其子にて初
 め彌九郎といへり太閤に近侍して頼りに登庸せられ終は肥後半國の領主となり加藤主計頭
 清正と共に朝鮮に押渡り武勇を異國に顯はしけるが石田三成との同氣相求る習ひ無二の親

友互に謀詐邪佞を巧にし太閤世にありせし間の隨一の出頭にて財寶不足あく榮耀にほごり
 じ今度逆謀第一の徒黨なれば三成と同じく關原に出陣せむと上方の逆徒惣敗軍と成りた
 れば行長が勢も心もらず散亂し行長詮方なく伊吹山に逃入じと四方皆敵に道を塞がれて落
 行方もあられされば其夜の山中に明したり紅葉を透る秋風の袖の身にしみて裏枯渡る虫
 の音のともにもうさをや歎くらん明れば十六日伊吹の麓東精川といふ所に少しき知るべを尋
 ね一兩日隠れ居たりしが飢餓をしのぎ兼ねけり此近邊の相川といへる所に林藏主とて禪僧
 の隠居せむと有りけり此者思ひ掛けず行長に行逢じとさすぐに名ある落武者と見て御邊のい
 うある人にておのりするどと問に行長兎角我身終に忍び果へくも思われず自身潔よく名乗て
 出んと思ひ我こそは小西掃津守とて今度上方にての一方の大將之關原の一戰味方あへさく
 押負じしが心もならずも從兵に離れ爰うしと忍び隠るゝといへどもはや飢餓おせまり一身を
 寄べき所を關東方にの草を分て我の踪跡を搜索有べし一樹の陰も他生の縁御僧我に逢じ
 の大幸なり今の唯我を引つれ關東方の陣所に赴きば恩賞有べきぞといへば林藏主も流石に
 天は驚き小西殿とすの異國本朝に名を顯はし給ふ名將勇猛の武功世上恐怖する所あり勝負

の合戦の習ひ負たりとて恥とせんや何ぞ故にいさぎよく自殺のせずかく見苦しき様にお
 りするぞといふ行長聞て我年頃耶穌の門徒にて天主教を尊信す此宗旨自殺を重く戒むるを
 以てかくなぐらへたりといへども四而皆敵に塞ぐるれば逃行方なし御僧速に我に繩懸て勝
 引有べしといへば林藏主元來猙獰たる墮落の惡僧大に悦び行長に繩掛て其地の領主竹中丹
 後守の陣屋に汗進す丹後守家人の伊東半右衛門足輕數人にて東精川に來り行長を生擒て八
 幡山に來れば行長をべしむらく村越茂助に召預られ林藏主の其實として黄金百兩を授らる
 慈悲善根を行ふべき釋徒の身にて落武者を訴人として黄金を授り手柄顯する惡僧と是を見る
 者憎む者こそあかりけり是の九月十八日之(大成記家忠日記基業皆本文に同心原書には行
 長東精賀部村の寺院に隠れ居たりしを林藏主聞出し惡僧四五人うたらし行長が夜臥せる時
 あし入てからめとるとあり諸記違へり)行長の既に生擒とありしが逆謀の張本石田三成が
 行衛知れされば田中兵部少輔仰承りて四方に手分し草を分てぞ捜しけることば三成が近
 臣小幡助六といふ者石山邊に隠れ居たり此者生擒られ御本陣へ引られ三成が行衛や知るか
 と質問せられしに助六少しも慮せず答けるに某の幼少より三成が厚恩を蒙りし家人に似へ

只今に於て三成が隠家を委せし存い去あがら御賢察をも御加へ下さるべし主と成り従者
 となる君臣の道ハ人の大倫と承りし君取らしめらるゝ時ハ臣死すると古語ありいかに我
 身の危難遣れんとて主人の隠家を告る事のうなふべきたどひ水火の責車裂の刑に處せらる
 ハ其此儀に於てハ上べうらず某又謀叛人の従類あればとくハ首を刎らるべしと切
 ていたり檢斷の役入もてあまし拷問仕べきうと伺ひしうハ神君開召夫こそ忠勇の義士とい
 ふべけれ決して三成が在所ハ知るべうらず若も知る程ならハ三成が側を離るべき者ならず
 かゝる義士を機察して救すべしかゝる忠義の者を罪人囚徒同様の拷問あとして責ん事ハ政
 道の本意を失ふといふべしとて放ち還せとの御詔に諸人其御仁恵を感じて助六に其旨ヲ渡
 せば助六も天の助る御大將大度の御仁心有ぐたしと落涙して退出せしが其近邊の寺に入て
 某ハ石田が郎黨既に重罪に處せらるべき身が不慮に助命して爰迄あがらへ來るといへども
 謀叛人の従類なれば此後又いかなる憂目にははんも計りがたし唯今自害して主人冥土の先
 陣せん死骸ハよきに計ひ歸郷に回向し給のれと云て其儘自害して死ければ寺僧大に驚き
 て抑留せんとせしりとも力及ばず其旨御本陣へ訴ければ彌其志しをせしませ給ひ懸は難

埋の事を仰付られける

勅使草津參向付京大坂御政令の事

九月十九日神君御本陣を草津の宿より移しまします此所へ勅使參向あり給旨を述らるゝ赴
 の今度不慮に天下兵革起り四海鼎の如く沸を以て激慮を惱まざるゝ所内府上方逆徒征伐あ
 らん爲關東の敵を捨て神速に馳上り先日伊吹山の麓に於て數万の逆徒を一戦に討亡さるゝ
 事古今未曾有の大勳といふべし彌國土安穩天下太平の功を遂て宸襟を安んじ奉るべしとの
 事ハ神君謹て風佐に答奉り給ひしハ万乘の聖聽に聞召にたがはず豊臣秀頼幼稚なるが故
 に逆臣共姦計を巧にし既に天下を傾んとする所幸に忠義の武臣等戦功を勵し逆徒を一戦に
 打敗り侍りぬまわれハ諸國の殘黨並を卷て降參し四海靜謐の功不日に奏聞すべしと仰あり
 ければ勅使其旨奏聞し宸襟をなぐさめ奉らんとして歸洛せらる其後大野修理亮治長を召て
 其方は唯今より大坂城へ參り秀頼並淀殿へ今度宇喜多中納言石田治部少輔を始とし大老奉
 行に秀頼の仰と稱し諸國の大小名をかたらし我等一門を亡さんと謀叛を企ければ既にハ
 や天下の騷動に及し所去十五日澹州關原において一戦を遂て逆徒原悉く切鎮めい今度軍勢

促催等の令條には秀頼の名判顯然たりといへども是皆逆臣等が仕業にて幼少の秀頼淀殿の
 しろし召事にあらざれば我に於ては更に怨を残さざる旨尼孝藏主を始め奥殿の老女共對面
 しまくく申渡すべしと仰付られければ治長も御仁心の厚に感じ悦び大坂に赴たり(基業
 天元實記皆同じ一説に片桐市正小出播磨守より一亂の始に今度秀頼公並淀殿更に知し召さ
 かるよしを飛札を以て井伊本多兩人に申送りし所此御使を遣はさるゝとあり原書に神君は
 秀頼母子を誅せんと仰けるを諸大名諫て助命し給ふといふは大なる誤也)かくて京都より
 公卿殿上人仕人僧徒等もくく御本陣に來り逆徒御征伐御速成の御大功を賀し進らすれ
 ば奥服師茶師猿樂其外京坂近邊の市人工人つとひ參る者雲霞の如くにて御祝儀上る者遣
 もさりあへず兼て御用承る奥服師猿樂共御側に召て近日京邊の様子尋給へば關原にて敗軍
 したる殘黨等にもしや二三日以前より洛中へ入込寺社市中を狼藉して下人共迷惑仕しよ
 ち申上げれば是はいかにもさる事有べしとて奥平美作守板倉四郎左衛門に急に上洛し假に
 所司代をつとめ洛中洛外を鎮撫し加藤喜左衛門大久保十兵衛も是にしたがひ京邊の亂妨狼
 藉を戒め尤番所を設けて往來の旅人を改むべしと仰付らる又福島左衛門太夫黒田甲斐守池

田三左衛門淺野左京太夫等は大内守護として急ぎ上洛し人數を召具し洛中洛外に制札を立
 て非常を籌備すべしと命ぜらる(基業此事を九月十七日永原にて命ぜられしとす家忠日記
 天元實記等は皆十九日とす)猶も洛中混亂し九重を驚かし奉らんかと御心を川ひられ御家
 人の中にては物頭を遣はせ給ひ伊奈圖書近藤登之助加藤源太郎に命ぜられ日岡畔に番所を
 置て往還を吟味せしめらる此所の大津八丁ありかく嚴重の御沙汰ありければ軍勢落人京都
 を亂妨する事を得ず洛の内外忽に靜謐し震襟尤穩之(天元實記)

中納言殿御對顔の事

九月廿日神君御陣を大津に移し給ふ是より先に中納言殿は信州上田の城に押の勢を殘し給
 ひ木曾路を急ぐせ給ふ大久保助左衛門忠益を先日神君の御方に御使を遣はされ御戰期をど
 ひせ給ひしに十日頃には美濃表御着陣あるべければ急ぎ御上洛あるべき旨御返答仰遣はさ
 る(諸書助左衛門を神君よりの御使とす故に此御使の名さまづくに混じたり大久保が譜に
 助左衛門父子の台徳公の御供して信州に赴くと見ゆれば古人物語の説より神君へ御戰期を
 伺ふための御使と治定せり)神君よりも山本新左衛門大久保市十郎を御使として御戰期を

仰遣りたる依て御道を急ぐせ給ひ甲州の鵜澤にて關原御勝利の事を聞召是の十七日の事あり(諸書に信州妻藏にて此注進を聞せ給ふといふ諸書に於る者地理不案内の説之妻藏が大津へ五十餘里なり基業に見ゆ此御使兩人の姓名の成績に見へたり)是よりいと一夜を日に繼て御道を急ぐせ給へども所へ日本一の險阻あり其上連日霖雨にて木曾河原限て大軍行あやみ十九日漸く草津に御着陣あり然れども神君思召所や有けん寸白といふ御病ありとて御對面なくして御供の輩も皆拜謁を許されず依て陣中に今度若君御上着御延引有て御戰期にわくれ給しうば大殿御氣色以外の外よからず御勘當ましくたるありとて雜説區となり御家人等も驚き思ふ事大方ならずまして山道の御供せし難忍れものゝきしが三日經る迄猶御對面の事おはしまさず榊原式部大輔康政夜中ひそかに御本陣に参り内へ見参して此度若君御不審蒙らせ給ふ事罪科唯康政が身にわがたいし風聞の及ぶ所中納言殿上田の城をも攻落し給はずとに當表御一取にも逢せ給ひぬ事を御不審ありと承はりぬ若左もいんに恐有事にいひとも殿にも御誤さきにしもあらず抑殿に九月朔日に江戸を御首途有て同十一日尾張國清洲に着りせ給ひわづらに三日を過て美濃國へ御陣を進められ十五日

御参戰事終りしも御父子御二所に三成を誅し給ひんとならば早く軍の御首途あらん期をも告させ給ひ又海道よりまへへ御使を参らせられ今まはち清洲の城に御馬をどいめられ山道の御勢をも待合せ給ひんに三成等が謀りう程の事ういへき何故にわく御一取を急うせ給ひけん只今に至り偏に若殿の御意の様に相成し事若殿の御不運にこそいへど憚る所なく受けられ神君聞召されればこそ山道の勢も急ぎ馳参り軍の手合せよといひひつれど宣ふ康政又受けける其御使今月七日信州小諸に参着して(大久保助左衛門が歸國の時的事あるべし)仰の赴を中止し夫より道の程御急ぎのれども道だにも日本第一の難所と仰傳たる木曾の細道を大軍を引つれ大雨を凌ぎ一日が中に十五六里が程御馬をすゝめ給へ共人馬も皆さかづみ疲れ御難義に及びいへきと申上る神君其使の何故遅く参着せしぞと御使を召て糾問ありしに霖雨に逢ふて木曾川水増増り人馬の通路も絶て以故思ひ外の通参いしと申上る康政重て受けける上田の城を攻給ひざりし古老の者ありと申め参らせし故之年老たる者若殿も付給へるの諫をもすゝめ謀をも献れどの御事なれば年老たる者共中陳る事御心に叶ひぬ迄もそれ等が詞を用ひ給ひしも御過失といふ難くは夫御父子の御

中にわたらせ給へ凡の事御庭訓のいふほども御嚴重に仰らるゝども御年も壯に行未の天下の事をまろしめさるべき御子を弓矢取ての道にて御父上の御志に叶はせ給ひぬ事有て天下の爲然るべうらず御父上にも御過失に成るべくは是程の御遠慮ましまさぬこそうたてければ涙を流しければ神君忽に御心解て今夜御對面有べしと仰出さる(是藩譜並鳩巢小説よのせる所之基業成績に台徳公御供の者は拜禱をゆるされれば康政御本陣へ参るべからずといひて此説を誤りとすされども康政如き閩閩舊功の輩へおして御本陣へ参向し眞言や上る事ありとすべからず又靈巖夜話並基業に井伊直政は忠吉朝臣岳父ありしとは朝臣の御事功を頌譽し台徳公御遷参を嘲りしかば酒井備後守忠利大に直政を而折せしを以兩公是を感し給ふ旨をしるす不審故本文にのせず)此時本多上野介正純は今度若殿御遷参ありたるは父佐渡が計らひあり佐渡に腹切せて若殿御過誤あらざる事を天下の人に示させ給ふべしと申ける(其業鳩巢小説)此時又大津の市中は高次龍城の節自焼して御旅宿とあるべき家更に幸し正純が計らひにて草津邊在り民家を割渡し御供を宿らしむ然る所に夜よ入て正純より大股御病御快からせ給へば明朝大津御本陣へ渡らせ給ひ御對面遊ばさるべし御供

の輩も皆安心し喜の眉をひらいて翌廿三日(藩譜に廿五日とするは誤之今は家忠日記並天元寶記にしたがふ)早朝大津の城に渡り給ひ御父子御對面御供の人々も皆拜禱し奉る其時中納言殿へ對せられ神君仰けるは惣て天下分めの一戦などいふ物は國基の勝負とちなじ事にて元石さへとり得ぬればたどひ相手の方に目を持たる石幾所有ても用にたぬぬ物之今度關原表の一戦にさへ打勝ぬれば眞田如き小身共は如何程城を堅固に持堅めても自然城を明渡して降参するより外はなき者之今度供せし者どもの中に其心付たる者はあかりしやと仰らる中納言殿聞召戸田左門は最前より左様申ひとて上田表にて左門やたる軍議を仰上られしかば御供の輩並居たる方を御覽有て左門を召さる左門御前へ参りければ御傍に有ける御菓子兩の御手よて御すくひ遊ばし左門へ下され小身者口かきかれざるなやがて口のきかるゝ如くおして遣はさんと仰らるれば左門はあまりの有がたきに物をいはざうしに御傍より中納言殿左門事 忝 御意を蒙り有がたく存べくい謝し給ふかくて後中納言殿の神君仰に寄大津より直に醍醐に御陣を移させらる先に大内守護の爲京都へ登りたる福嶋池田黒田淺野等の諸將も中納言殿御着陣を聞て書狀を奉りければ銘々に御返書を遣はされける其中

にも黒田長政へ遣はされたる御書にいふ(基業)

御懇書本望の至に被存し路次中日夜相急し得共切所故遅く迷惑御推量可被成し扱
度御手柄共難し盡次第にい何様上着の刻以面上可申し恐く謹言

九月廿日

武藏守秀康御書判

黒田甲斐守殿御報

猶度御手柄と申もよろか御座し

(此御書の譜牒餘録にも見へたり)中納言殿に榊原康政が此度の志を御感有て我家のあら
んりざりの子孫に至る迄更に忘るゝ事有べからずと御自筆の御書を賜りけるぞ
其後康政の此程の勞をも慰んど井伊直政本多忠勝舊友の事なれば一夜酒飲て打とけ四方
山の物語しけるに直政康政に向ひ扱も今度其元身を捨て大殿を諫め参らせし御父子の中た
いらかに渡せ給ふ事惣て當家の御爲のみにあらず凡天下の爲にいいうにも戦場の功よまさ
る事近しと申ければ康政快氣よ見へたり其時忠勝我等の心得ぬ事一ありといへば康政笑て
何事にやといふ忠勝其元大殿をたに加程強く諫奉りながら本多佐渡が跡にのミ随しこそ

心得ぬ我等主人の事の當家にさるものゝ世にも人にもゆるされたり弓矢取ての道に
榊原式部が事さみせんもの又有べからず其元先陣して一日の内に眞田が城攻破り早御
供して打て上られんにはたどひ關原表の合戦にありせ給はずとも大殿など御不審のいべき
又其元身を捨て諫諍するにも及ぶまじと思ふはいうにといへば康政答る詞もなく三人一同
に打笑ひ數盃の興を添にける康政と忠勝とは同年にて同所の人とありしかば幼少より互
にしたしがりしかば常にかゝる事をもいひ戯れしとあり(藩譜鳩巢記)

日岡關所騷擾付福島強訴の事

先日仰を蒙りて伊奈圖書近藤登之助加藤源太郎三人の物頭は天津八町日岡は新關を設け當
番を定め與力同心數十人勤番し往來の旅人を嚴密に檢察せり京都警衛よ登りたる福島左衛
門太夫正則は九月廿三日内府公大津御入城有しと聞急に御旨を請て佐久間作左衛門(一説
に小島助之進と見ゆ基業天元實記本文におなじ)といふ者を大津の城へ使とし参らせたり
(原書には福嶋より池田へ送る所の使者とす誤あり)此使者日岡新關を下馬せず通んとす今
日伊奈が常番あり其組の足輕共何者なれば此御關所を乗打するぞと咎むれば佐左衛門是は

福島方より大津の御本陣へ御用の事有て参らする急使之此關所は何人の關所なれば乗打を
 咎め休哉としばし口論に及びしが卒忽の足輕同心共大勢皆集り來りきやつ物ないはせぞと
 棒を以て打て懸る此時作左衛門は棒を以て打れながら下馬して關所を過ぎ大津に参り主人
 の口狀を演へ御返答承り立歸り京都福嶋が陣所に至り御返詞を告て後家老福嶋丹波に逢て
 某事大津の新關にて恥辱を蒙りいど委細演説し其節番人共一々討て捨んとは存し得ば公用
 の御使大切の事なれば恨を忍んで御使をば難なく勤み此上は御暇を給はるべし只今より彼
 所に罷越番人共一々撫切にし其其座を去らず切腹仕べくいど訴ける丹波私に計りがたく
 其旨正則に訴ければ正則其日いさゝか風氣にて打臥たりしが是を聞とむつくと起上り作左
 衛門主人の爲恨を忍んて是迄歸り來る條尤以て神妙され我目前に召出し汝一條死んど覺
 悟せしかと問仰にや及ぶべきと答ふよし／＼さらば夫にて腹切れ正則汝に代つて伊奈が首
 取て汝に手向ん物をといへば作左衛門此御恩冥土迄も忘れやまじと落涙して忽に腹切し
 べ正則其首打落し正則が家人伊奈殿に恨やべき事ありとて腹切ぬ彼が首御實檢有て其心得
 せられよとて伊奈方へ持せ送る圖書組の與力同心に事の様聞て大に驚き井伊本多に議して

當家の同心六人が首切て送る(今の世にいふ根來組あり)正則是を見て大に怒り其首の皆送
 り歸し返詞に凡天下の人貴あり賤あり貴の賤に同じくらず正則身不肖といへども内府の
 御味方して随分微功を顯しし事全く正則が一身の功にあらず是然しながら郎等共命を捨
 身を顧ず夫に正則が士を以て伊奈殿の手下の足輕に准せらるゝ條正則天下に向ひ面目を失
 ひぬ正則が進せし首の騎馬士の首一級之首多く所望せずかゝる足輕等が首不用にいへば速
 に返し進らするぞとやける井伊本多彌齋き福嶋殿宣ふ所道理至極しぬさらば伊奈が手も属
 せし騎馬の侍が首切て参らせ伊奈と中直りし給いらん事公私の大幸何事う是に過んやとや
 送りければ正則家子郎等にうとまされて重てはか／＼とき軍せん事叶ふまじ此後の御味方
 に有らん事も詮さしとて引籠る(此時福嶋逢坂山へ人數を出し三井寺へ陣替せんとせし一
 説ありといへども是は正則京都にある事をしらざる説なり)井伊も本多も大に當惑し私に
 決したたく正則事今度關原表戦功にほこり我儘を事と存し趣申上げれば神君聞召御氣色
 を變ぜられ正則が所其理あきにあらずたどひ戦功は有とも無とも人の主と成る者が我家
 の士を他家の足輕などに棒めしらしにせられて忍て其儘になし置へけんや况哉彼關の我

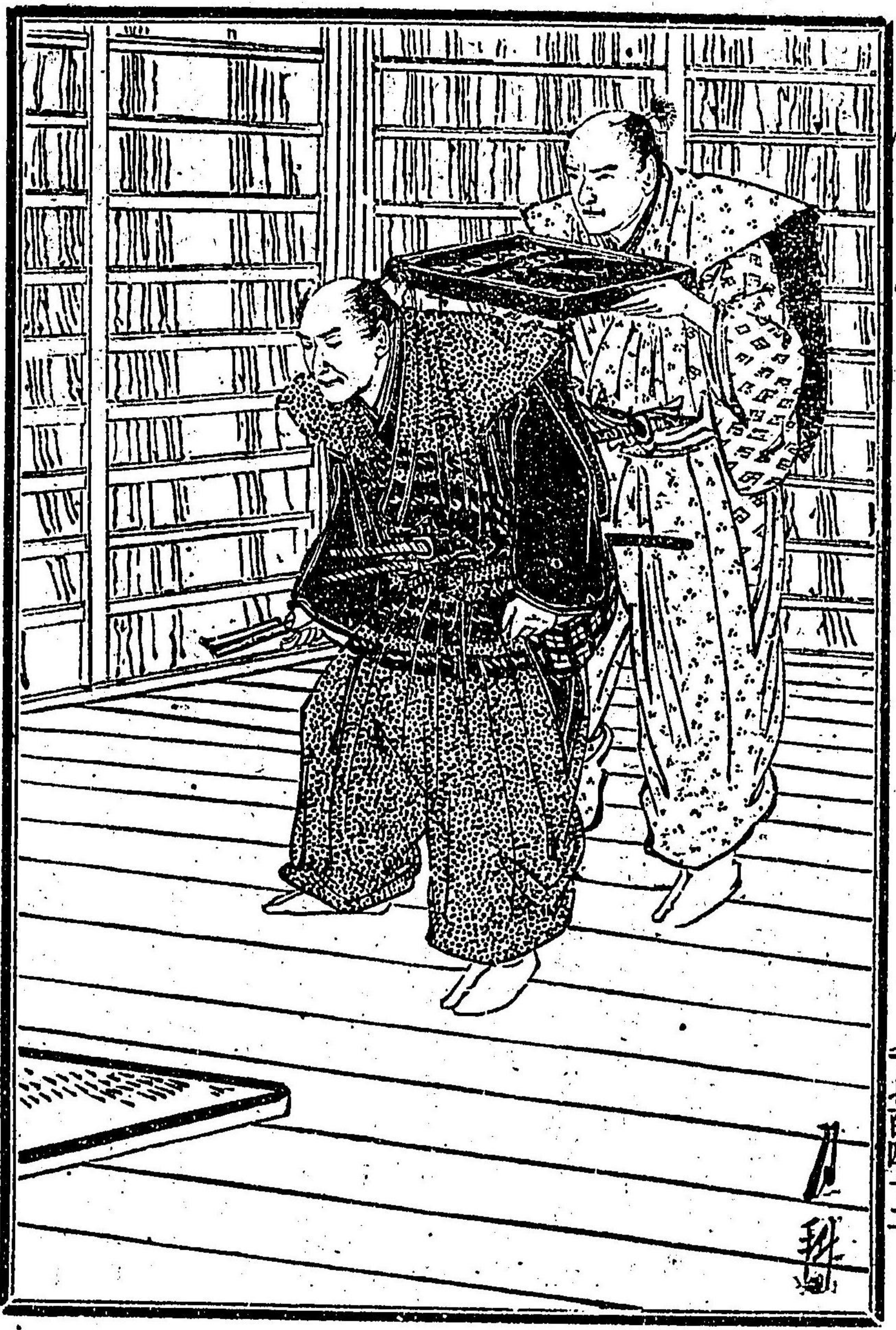
等父子上洛に及ぶ迄の間亂妨戒むる迄の番所あるを今度の一戰勝利するを以て圖書が組の足輕同心迄もはや權威を振廻い左様の無禮を容す事沙汰の限りなり全く屬更共かゝる事を容す事其頭の命令もこたるが故こと仰らる圖書の其御口説を承はり傳て其儘切腹したり井伊やがて圖書が首切て正則に送りければ正則大に悦び井伊殿の御力にて正則恥をすゝぎいと申たりとぞ（一説に神君に圖書に腹切らせん事を御許容なかりしを直政うくて天下の亂いまだ定まらざる福島又御敵とあらば天下の大事とも成るべしと諫て圖書にも其旨を諭して切腹させしといふ説あり此説の是なるが如しといへどもいまだ天下の主にはあらず諸大名歸順するといへども未だ君臣の分あるにあらず福嶋あらずとも諸將の家人にもうゝる事あらば其所置さのみ異なるべうらず況哉正則が功にはこりたるのみならず元來狼戾強暴の性質なるやを神君も止事を得給ひぬ時務なり神君より切腹と命せられしにあらざ圖書の君の爲に死を甘くせし所是又止事を得ざるに君臣ニツゝみながら是を得たる所なりとあるべし本文の天元實記藩譜基業によつてある所なり）

石田安國寺爲廟付小袖恩賜の事

關原の戰既に敗れしうべ石田治部少輔三成の散々に打なされ伊吹山の方に退き一夜を明しければ妻戀鹿の鳴聲に木葉をちらす嵐もいと烈しく吹そへば夢も結べて翌日の草野谷より大谷山を越へ鳥上山に至る頃も磯野平三郎渡邊甚平惣野清助三人の跡を慕ひ來りしが三成此三人に向ひ我まばらく此邊の山野に身を隠し義弘どのつかひせし事のあれは薩州へ赴き再び軍勢を催さんと思ふあり汝等の是より離散して再會の時を期すべしといへば磯野平三郎この御情あき仰を承はる物觀御尊途を見ん爲是迄御供の仕たる物を甚平清助のときれめくまれ某のどこ迄も御離のやまじくいといふ三成聞て千田采女の定て古郷へ歸るべし彼が住所迄赴んといへば平三郎重てやけるの采女の歩行心にまかせぬべ定て討れしと見へて只今迄來らずし某が兄出家よて摺津に住しへば摺津迄渡り給ひ大津より御船に召し大坂へ至らせ給ひ然るべしといふ三成大坂邊へ定て敵充満すべし中々忍び行事叶ふべうらず然れば汝等を伴ひ行時の人目を忍ぶ事かたしひたすは是より立去るべしもしや我詞にまたがらんに我愛にて自害すべしといふにより三人も力なく主従ともに涙を流し立別る三成山中に人イみ日を暮し幼年の昔物學びに行通ひし羊福寺村寂動院を尋行し門



囚虜石田小西
 等の旧功を重
 んとて家康
 陣内に時服を
 授けす



月
 刊

内へも入事をゆるさぬバ又立出て其近邊善住院の住善院といふが知音成りしかば是を頼み
 しに此僧りひくしく頼まれしうバ爰に一夜をあうしけるに翌朝に成りてはや里人共聞出
 し此寺に落武者を隠し置るゝと聞ゆ公儀より御穿鑿厳しければ早く追出さるべしとあく
 ば地頭へ注進せんといへば三成爰にも安居成難くさしも權勢榮耀にほこりつる身も一身の
 置所なく一飯を乞ふべき便もさく雲を凌ぎ翼を冒し木實落穂を拾ひ四五日を過しける中に
 腹痛を煩ひ出し詮方更にあかりしが古橋村に與次郎太夫といふ者の三成世に有し程の思憐
 をかけし者之彼が家またどりつき身の上を頼しに與次郎太夫かゝる時からずバいりてうゝ
 る暇がふせやに御立寄の有べきぞと種々いたわり寐所へふかく忍ばせ置ぬ然る所に田中兵
 部少輔の三成を搜索すべしとの嚴命を蒙り北近江井口村に滞留し諸方へ手分をなし日々穿
 鑿嚴重ありしが與次郎太夫が宅へ同村の又左衛門といふ者來り御身の石田殿を隠しあきい
 どの風説専らあり田中殿此節嚴しく穿鑿どもかくも早く計り給へといふ與次郎太夫のさら
 ぬ軀にもてなし又左衛門をバ歸しける三成物陰にて其問答を聞て今ハ我運命極り迎ものガ
 るべきにあらぬバ田中にさかして出されんよりの汝我を縛り田中へ引渡へし左あくバ汝が身

よも危難來るべしといふ與次郎太夫いうてさる事いべき猶何方へ忍ばせ給へとて三成に襪
 履の衣を着せ破笠をかぶらせ腰へ鎌をはさみ樵夫の姿にあして家を忍び出しめたりされ共
 三成の病に苦しむ岩陰に伏し居たるを田中が家人田中傳左衛門（一説澤庄右衛門又野村傳
 左衛門）三成を見知りければ擲取て兵部少輔陣所に返れば兵部少輔是を悦びもとより知音
 なれば途中迄出迎へ懇懇にもてなし家人を付置饗應すれども三成更に食事もせず馳走役の
 者ども御志のさる事されども御食事をもあされ御氣力を補給ひ御最後の御たしあみ有べ
 きにやといへば三成尤もや聞けん然らば我腹痛なればとて菲雜水を所望して喰ふ田中吉
 政猶も所勞をいたり醫者を命じ藥を進めしむ三成今此身に成り醫藥を用ゆべきにあらざ
 ると辭しければ吉政御命を救へんとにあらざり暫時の苦痛に休めん爲なれば強て服藥し給へ
 と諫ければ三成も其厚志を謝し是より藥を服用したり田中が懇にもてなすを謝して
 三成其時迄身を離さる切又貞宗の短刀の太閤恩賜の品なりしを吉政に授しとすかくて九
 月廿三日の夜に至り吉政の三成を召具して大津に參りければ吉政が功を賞せられ三成の本
 多上野介正純に預らる（基業）安國寺の惠瓊長老の天蓋を旌旗とすし法衣の上に甲冑を着し

武士の眞似して出陣せし甲斐も亦く秀元歸陣以前に長束と同じく南宮山を逃出し多藝牧田邊にて追兵の爲に散々に取北しひろかに毛利が陣所へ逃歸り秀元八幡邊迄至らるゝ頃は従ひ來りしが毛利が陣に根來の普門院といふ山伏ありしを頼み又秀元と引分れ普門院を案内とし船を頼み北近江へ赴き夫より京へ登り鞍馬寺に月清院とて安國寺が恩をかけて院家となしたる程の僧ありよも見捨のせじと月清院を頼み給ひに月清院唯一夜留めて吉川藏人より穿鑿強く留置難しとて追出しければ安國寺頼む木陰に雨もりて詮方なく十方に暮しがやうく六條邊にしろへの者ありてうひくしく頼まれ隠し置しを月清院開出し訴人に及びければ(基業には佐々木浪人輩が訴人せしとあり不審あり)與平美作守(毛利家傳に井伊直政とする)誤之此時井伊の京都にのあらず)大に悦び家人鳥居庄右衛門に手の者若干添て差向しが安國寺もかくと聞て平井藤九郎長坂長七兩人を召具し張興に乗て忍び出しが月清院案内して與平が人數追取巻けば藤九郎のどてものがれぬ所なれば安國寺を敵にわたさじと乗物ことに安國寺を一太刀切たり其間に大勢取籠て藤九郎も長七も討れ安國寺の死もやらず乗物より引出され縲紲の辱めをうけ大津へ引れけるに劍療治せよとて美作守へ召預

けらる(毛利家譜)其折節石田小西安國寺三人とも衣服皆破たり此輩逆徒張本といへども皆匹夫にあらず大關の時に權威をふるひし者共このみ見苦と姿にて捨置べきにわらず寒風の折うらみればとて神君のいたらぬ限なき御仁心村越茂介御使にて三人の者へ時服一襲づゝ置にのせて下されける小西の今此身に成りし某等へ寒さを告のげと迄の御厚情忝いにて拜受せり安國寺は劍所を苦み兎角無言ありしが時服を見てあら肌寒しそれ着せよと直よ着用す石田の此時服何人より賜る所ぞと問じうべ上様より下しあうるゝ所ありと答ふる者有しよ上様どの何人をやぞと問内府公の御事なりといへば石田のからくど打笑ひ昨日今日迄上様どの大關様の御事をこそやつれ大關様薨去年もへすはや内府を上様とや事の笑止さよ其上様のいやさ故かゝる一戦にも及びたれど罵りしとぞ(大成記武功實錄)

正純三成問答の事

本多上總介正純の石田三成を預り嚴しく守護せしが或時三成に面對してやけるゝ當時秀頼公御幼小き大老奉行の方々共和して天下靜謐の功を計りいう様にも心力を盡さるべきを益なき亂を引起し天下をして大亂に及ばしむ是誰人の結構ありや餘りに思慮なきに似たり

何人ヲ謀主まうしゆよりめりしよしひやとらへば三成開て其元陪臣の身を以てかく迄天下の安危を
 思慮しりゆある事聞しにまさる才略さいりやく感じ入し大老奉行の人々皆其元と同意にて兎角静謐くどの
 み姑息不斷の長詮議ながせんぎ又志づらく月日を送りしが我等ハ大岡様御厚恩忘れやらず幼君始終の
 安危を計り一日も早く國家の禍を除き幼君の御代万世泰山の安になさんと身命捨て人々を
 進め此一戦を引起したりされば此一戦の張本の御吟味に及ばず此治部一人に其元にも其
 旨心得實否御純明迄もかく治部一人が首を刎て餘の人々の助命し給はんよふ内府へ上ら
 れよかくや時の治部無謀に干戈を動し大勢の難を引出したるに似たれども既に一戦の期に
 臨み無二の一味と頼し或の義を變じて裏切し或の心慮して旗を進めず大岡様數十年恩を
 厚く撫育せられし十方の將卒忽に節義を失ひ忠勇を捨て畏偏して惣取北に及びたり然し亦
 ぐら其敗軍の時迄も宇喜多殿始島津大谷此治部亦と隊伍を亂さず幾度う關東勢を追なびき
 たる事ハ戰場にて皆人々見が如し若諸將約盟を變ぜず忠義を顯はし勇戦ささば其元亦どの
 皆生取とせん物を天運てんうん至らず今かく囚人となりて其元の手に移りし薄命のいたす所更に恥
 とするに足らずと答ふ正統重て御雄辨誠まことに承はり事にていへども猶某が疑うたがひのなきにあ

らず凡名將知士といふハ機を察し微を知るところ承はりいなれ内府にハ野州小山に於て
 上方の變を聞とひとしく引返し直に打て上らるべきを江戸に日數を送り延引ありしハ全く
 先手の動靜虚實をばうる沈實の計略と存し然るにそあたにハ衆情の虚實を察せず足長に大
 軍を動かし反忠裏切の變に驚き大谷殿一人捨殺にし宇喜多殿長束殿にも一日の露命をおし
 んで其場を逃去り其元にもあど花としく御討死のいはずかく囚人と成りて夫にて恥とせず
 と仰らるゝハ如何ある御覺悟と疑はしくいふ三成莞爾と打笑ひ實にも反忠裏切の徒
 不忠不義の者共を味方と頼み義兵をおこせしハ我ガ不明のいたす所と批評せんも道理なき
 にわらず大谷を捨殺にして我ハ立退しと思ふハ流石其元陪臣の身井中の蛙大海を知らず不
 窺玉淵者未知驪龍の所幡不視上邦者未知英雄の所躑しんたうといへるたどへの如し宇喜多我等ハ幼
 君を大切と思ふが故再び時節を伺ふ志之夫も薄命時運よかなはずかゝる身と成りて論辨せ
 ん事無益之唯此上一日も早く首を刎られ死て黄泉に赴き人々の忠と不忠と剛と臆とを太
 閻様へ注進ちゆうじんせよ上と思ふとて此後ハ何事をいひても三成終に無言よて就刑の日を待しと成
 り(基業)此三成幼稚の砌近江邊野寺の兒童なりしが秀吉公鷹野の折から其寺に立寄給ひ茶

を所望せられしに此兒始ハ大なる茶碗にて七八分ぬるく立て進らす秀吉公大に悦び今一碗を請給へば茶碗半程少し熱くして進む三度所望し給へば此度の小き茶碗も熱くたて、捧たり秀吉公きやつ才覺有と感ぜられ住持に請て召つれかへり給ひ家人となされ近侍せしめられしが果してかれがなす所一ツとして秀吉公の氣にかきいさる事あかりしかば佐和山の城主になされ五奉行の其一人權勢肩を並る者なかりしとぞ(感狀記)三成が牌今も大徳寺の三玄院に葬て法號江東院正軸周公と老るして存ずとぞ聞へたり(續閑談)三成生取と成りて田中吉政大津の御陣へ進せられし時御書を細川越中守忠興に遺りたる其御書にいふ(譜牒餘録)

急度申江州北郡越前堺にて石田治部少輔生捕之由田中兵部少輔所より昨日申來い定て御満足い今日は此地へ可來い早進御目出度迄にい恐惶謹言

九月廿三日

家 康 御判

丹後宰相殿

忠興御書を拜戴す此時ハ今洲に陣取けるが早速に大津に参り謝し奉る今度忠興が忠謀に依

て速に凶徒誅滅に至れりと並ぶならぬ御誼を蒙り忠興恩を謝してぞ返ける(譜牒餘録)

利長卿大津參陣付本願寺の事

神君いまだ大津の城ましましける頃加賀中納言利長卿北國の仕置を沙汰し土方勘兵衛雄久并青木右衛門佐を俱して參謁あり關東御勝利を賀し奉り北國筋仕置のさま委細申上られしかば大聖寺の城を攻落し山口父子討取られし戦功御感淺からず利長卿の手を取らせ給ひ今度大老奉行誘引により上方大名多半逆徒一味の所其元には舊盟をかたく守り當家へ忠節双ふ方なき武功感悅此上有べからず今度國多多く進らせて大國の主となしやべし土方も小山より金澤へ赴しは利長卿出馬の跡なれば大聖寺小松の戦ひにぬはざるは更に不審に及ばず今度精力を盡し忠戰淺からずと感稱し給ふ其後利長卿へ舍弟能登殿には如何致されしぞと仰らる利長卿承り利政事大聖寺城攻の時邊は随分軍功を勵まし其後逆徒の姦謀に陥り領地へ引籠りいにより勘兵衛相頼みて度々能州へ遣はし教訓仕いへども承伏仕らずいへば直に討果しやべきや共存いへども上方の御一戦氣遣はしく一日も早くと道を急ぎ上りい所當表御大勝にて逆徒悉く敗績仕い事あれば此上の御仁政には利政が罪科御免願奉る旨申上

る土方も 某兩度迄能州へ立越利政へ種々異見相加へいへども利政承引致されず中納言殿にも御前へ申譯是あしとて殊の外迷惑致されいへども申上る神君開召人の心々はかばる者にいへば其段は是非に及ばずい故大納言殿の呉れく仰置れし事もあり今度中納言殿無二の味方にて莫大の忠戦武功おはします方々能登殿罪科も寛宥の沙汰に及ぶべしさのみ御心煩はさるべからずと仰ければ利長卿も忝しと思を謝せられて重て申上られしは丹羽宰相長重ある最初は逆徒へ一味いへども前非を悔某へ降参を乞ひ先手を勤いはんと申けるが當表御一戦速に御勝利と成りいへば宰相軍忠を勵ましてもいはずひたすら御免を願奉りい此起勘兵衛も存いれ申上られしかば神君長重事重罪の者故赦免あすべからず彼が父五郎左衛門長秀癩痲苦痛忍び兼て自殺に及びしを秀吉公怒給ひ武士の本意を失へりとて領國を没入せられんとの事なりしが我等年頃長秀と入魂の筋目を以て秀吉公の怒を宥め小松城の主として官加階 滞あく仙籍を汚す事いひとへに我等が恩とい世の人の皆知る所之然るに長重我等を敵とし其元へ對し弓矢に及といふい重くの罪科死をゆるすべうらすと仰ける其時江戸中納言殿も出座あり此中納言殿の年頃長重の知音なれば利長卿幸と中納言殿へたより長

重最初逆徒へ一味したる罪あるならざといへども關原の御一戦以前に降参し小松城下にて某對面し和睦の誓約仕たる段の先日飛脚を以て申上るごとく之何とぞ曠世の御仁政を以て御免下さるべき様に申上らるれば中納言殿も利長卿土方と同じく色々と詞を盡し仰上らる神君もあまり余義なく思召たりけん然らば利長卿の仰止難し長重が一命赦すべし早し其城を明て退散し城をば利長卿家人を以て請取給へと仰らる又越前北庄の城主青木紀伊守一矩も前非を後悔し一向御免を願ひ處其身病臥すれば一子右衛門佐同道仕い是も御寛宥願ひ奉ると申上らる大谷刑部が北國表に赴き日數重て北庄に滞留し軍議をあせし青木が敵に一味したるが故なりかく敵に一味しあがら又其元へ同意の返答せしり卑賤の諺にいへる内股膏藥といふ者にて雙方の勝敗を計がたく思ひ勝たる方へ降附せんとの心底丹羽り其元と勝負を争ひしよりの遙に劣りたる舉動さらく武士道にあらずといふべし青木を始め羽柴長吉青山修理丹羽備中以下の越前の國人ども皆領地を明渡して退散せん様に沙汰せらるべし若又違背する者あらば速に人數を差向誅戮せらるべしとの御詫されば利長卿も今の詮方なく使者を以て其旨越前の國人共へ申遣ひしければ青木父子を始とし北國の輩力

かく皆城を明て退散す其後北庄の城に保科肥後守正光を遣ひ勤番せしめらる丹羽長
 重城を退散し丹羽五郎左衛門と改名し翌年の春江戸へ下り芝浦に閑居して居たりしを慶
 長八年の春召出され常州古渡にて一万石給ひり元和八年に奥州棚倉の城を下され五万石に
 なされ寛永四年白河にて十萬石賜ひり世々恩澤を傳へたるこそ有難けれ利長卿に今度の
 軍功の賞として能登國に加賀の能美江沼二郡そへて加恩せられ全く加賀能登越中三ヶ國の
 主とあされ小松大聖寺を合て百廿万餘石となりけり舍弟利政の所領没入せられ命計りの
 助られ孫四郎と改め京へ登り東坂本に隠遁して生涯を送りしとぞ神君大津御在陣の間照高
 院養源院知積院妙心寺等の諸寺諸山を僧綱凡僧日々参り御祝儀をす者引もきらず其中にも
 本願寺准如其兄前住教如も参謁しけるに兄教如を御側近く召れ御坊に殊更懇切の志祝
 着する所今度の一亂御坊などに幸共ありぬべしとの御諭之教如の先以て忝御誕生世
 と忘るべからずと恩を謝して退たり抑此教如といへるの一向専修本願寺開山親鸞より十
 一世顯如光佐が長子にて母の細川右京太夫晴元が女あり此母いかなる故にや長子教如をう
 みて次男准如をいとあしみ深かりしかば顯如迂化の後教如其寺務をうけつぎ一宗門徒に圍

繞謁仰して尊敬す其母いよく兄教如を廢し弟准如が代とあさばやと謀しに其頃太閤秀
 吉公此母を寵愛淺からず常に召まついと給ひければ此母ひそかに殿下に此事を歎訴たり殿
 下忽其長舌を信じやがて教如を押下し准如を以て本願寺第十三の門主と命ぜらる門徒等い
 とあしく思ひけれども力あく教如の隠遁しうき年月を送りしにこの度神君會津御征伐とし
 て關東へ下らせ給ふとき、教如准如兄弟共御陣中の御氣色伺いんとて都を立出しに石田三
 成途中に家人を遣ひし今度秀頼公仰にて内府を退討せんとする時節上人御下向然るべから
 ず早く御歸路有べしと聞へしかば准如の其詞は隨ひ歸京せるに兄教如の石田が詞を用ひず
 はるく江戸へ参向し神君を拜謁す神君其志を感じ給ひ懇の御もてあし有て歸洛せんと
 するに及び石田ののれが詞を用ひず教如關東へ下りしを憤て途中に人を出して生捕て流
 罪に處せんとす其頃岐阜中納言秀信一向門徒成りしうへ秀信も欺てやうく罪を宥られ近
 江の四十九院に蟄居せしなり神君の故大閤彼母の旨ひひりれ罪なき教如をあして隠遁さ
 せられしをいとあしく思召けるのみならず教如も殊更親切の志を顯はしけるを感じ給ひし
 にやかく懇の仰ありけるが果して慶長七年に東七條の境内に佛閣影堂御建立親鸞自作の木

像上州麻橋妙安寺に傳へしを賜り影堂に安置す是今の世に其門徒繁昌して東本願寺と號する靈場之其はじめ教如の本願寺の裏に巷を給ひ隱居せしにより西本願寺を表と稱し東本願寺を裏と稱しむらしの名殘をといめしとぞ(基業天元實記本願寺系圖)

正校 三河後風土記第卷四十終

正校 三河後風土記卷第四十一

秀頼使者謝恩付輝元長盛の事

王赫として斯怒爰に其旗を整へ以徂莒を安じ以周の祐を篤と以て天下に對ふといへる周の詩人の詞に違はず神君天意人望の歸する所戎衣して天下大に定る御威徳まばらく盛旗を大津に留められ毛利中納言輝元増田右衛門尉長盛が動靜を窺ひせらる是ハ宰相秀元吉川藏人廣家既に歸順して人質をも獻せしうとも秀元關原一戰の後いまだ謝恩の拜謁も遂す人數をまどめ大坂へ引返し輝元と一所に備へしと聞へたればいまだ如何なる變詐謀客有べきも計り難けれわざばらく時日に移されたり然るに京大坂に遣はされし斥候細作の者共も馳歸り諸國より諸將の注進も次第に至りしに禁裏を始め奉り月卿雲客寺社四民まで内府公早く御上洛まじく四海靜謐の御政事御沙汰あらん事を待奉る形勢まじして農商の篋食盡漿王師を迎ふる御威光是を遮り妨る者さらにあらずと聞召殊更中納言殿にも山道の大軍を引つれ御着陣あり前田黃門利長卿も北國の大勢を具して上着しければ今ハ近日大坂へ御進發有べしと仰出さるよつて先日京都の狼藉静めんため遣はされし福島左衛門太夫池田三左

衛門淺野左京大夫其外黒田甲斐守藤堂佐渡守有馬玄蕃頭等を先大坂に赴くべしと命ぜらる。此輩は九月廿二日早天に京大津を進發し大坂に至り先萬葉に陣を取る大坂城に増田長盛の秀頼を守護して木丸に有り黄門輝元は西丸に有て諸事を沙汰しけり然所翌廿三日福島黒田等の諸將より城中へ使をたて、輝元卿長盛に其所に籠城有て一戦を心掛らるゝにや又其城を退去して降参せらるゝや返答承はり度いどや送れば輝元もとより降参の志にて異儀に及ばず黒田長政井伊直政を頼み今度宇喜多石田等兼て秀頼公仰とて催促するにより心からずも當城は有といへども本意にわらず秀元も關東へ出陣するといへども東軍に對し矢一筋も射懸ず其志をわらはしたり輝元西丸に居住する事は内府公御上洛まします迄の間秀頼公を守護せん爲之敢て異心を挟むにわらずとて詞を盡して降参をぞ乞れける長政直政其赴を大津へ上けるに御許容ありしかば輝元は翌廿四日大坂の西丸を逃去りて木津の別業は整居しぬ(基業)此時大津よりは福島黒田兩將へ御書を遣はさる其文にいふ(譜牒餘録)

御別紙令得其意は昨日如すは彌はか行は之様尤は恐を謹言

九月廿三日

家康御花押

清須佐渡殿

黒田甲斐守殿

書狀令被見すは其元之様子如徳法印すは早々御受御請取尤は諸侍町人法度以下最前如すは可被仰付は恐を謹言

九月廿五日

家康御花押

黒田甲斐守殿

かくて大坂西丸は仰によりて福島正則是を守護し其外城中は御先手の諸將請取て池田淺野黒田有馬藤堂の諸將門々を警衛す(家忠日記)増田右衛門尉長盛も更々異心なき旨陳謝して廿五日大坂城を退去す大坂の大手より木津邊迄關東勢の立並たる其中を肩を縮めて心細げよ歩行ありさま淺間しくこそ見へにけれ其の後長盛は高野山に閑居しけるが従兵共は途中にて皆ぬけくに落失たり大坂城には此一戦の始より淀殿始女房達までも頼みをかけ豊國大明神の社頭に於て様々の立願あり日湯立を執行せけるよ其湯の釜五の内三破れ

しうは是只事ならず神慮いうにと煩れしに(舜舊記)はたして十五日の一戦上方惣敗軍と
 聞へしうは今の秀頼公御母子の御身の上安うらじと薄氷を踏心地してあきみわらひみふ
 し沈み今や關東勢の攻登るらんと日と生たる心地もせずあつせし所草津の御陣より大野修
 理亮治長を御使として秀頼幼稚の事故さらに今度の結構あるべきにわらず全く石田等の姦
 臣等が逆謀とと思召秀頼母子に於て御不審あらざれば安心せらるべき旨仰遣ひされしうは
 淀殿の云もさらへ大奥の女房達始て蘇生せし心地して悦ぶ事限りなし然らば此御禮として
 秀頼并淀殿より大野修理亮に今度の柘野大炊助を差添て廿五日に大津の御陣に進らせ秀頼
 事一向御はうらひに泄べうらはず何事も内府様御下知に任すべし次に毛利輝元増田長盛の
 全く異心あるにわらず秀頼守護のため大坂に在城せし事之寛宥の御沙汰を願ひ奉るどの事
 之神君聞召秀頼の御事は更に子細有べうらはず輝元長盛事ハ篤く虚實を糾明せされば是非決
 し難しとの御返答を承り兩使の立歸り淀殿へ申述にけり其後神君ハ大津御進發有べしとて
 大津の城をば松平甲斐守大須賀出羽守を留め守らしめらる中納言殿に其日先立て御出馬
 わり伏見にやどり給ふ神君ハ廿六日の朝大津を御進發藤森まで渡り給ひ俄に酒井河内守重

忠并與七郎忠利を召れ大津の樞要の地なれば若輩者にての覺束かし汝兩人是より彼所に赴
 き堅固に守るべしと命ぜられかくて伏見にて御父子御對面あり神君ハ此夜淀にやどらせ給
 ふ翌廿七日兩御所どもに大坂に至らせられ神君ハ西丸へ御座をしめられ中納言殿に二九
 にわたらせらる廿八日に大坂へ勅使參向ありて大坂御入城を賀せらるれば月卿雲客門跡
 方社人僧徒其外京南部堺畿内の工商等まで雲霞の如く集りて賀し奉る(家忠日記)是より先
 宰相秀元ハ吉川藏人共に關原表より大坂に立返り秀元輝元に對面して君ハ秀頼公の後見と
 して内府より留守に置れし佐野肥後守其外女房達を追出し只今此儘にて降參あらんハ尤以
 然るべうらず秀元關原にていまだ一戦にも及ばねハ軍勢も減せず猶も藝州へ申遣ひし十州
 の軍勢を召登せしハんに嶋津立花等味方を引よせ大坂城に立籠り運を天まきうせ烈しく防
 戰し關東方より扱ひ入らるゝをまつて和睦せば所領の事も堅く賸狀を取かりし無難に和睦
 をあし方何ほどもいへししたし此儘に降參せば元就卿以來千辛万苦して切隨へ給ひたる十州
 の地も没入せられバ餘りに口をしき事ならずやと諫じうども吉川藏人福原式部も一同又
 角和睦の契約すてに盡ひたれば只今籠城以外の外よろしうらざとやせば輝元吉川福原のす

めに順ひ木津の下屋鋪しもやしほに盤居ばんぐいして世の動靜どうせいをうかいひじが猶も世の有様さま恐ろしく思ひ竊ひそに木津を逃出て藝州へ馳下はせらんとす此事神君御氣色に叶はず中納言殿を大將とあされ藝州へ討手をむけらるべしと聞へければ輝元恐れ思ふ事大方あらず井伊直政を頼み種々陳謝し其上平城天皇の御子阿保親王の子本主始て大江朝臣の姓を賜りて輝元に至る迄星霜せいそうつもり二十九代あわれ舊く傳へし家の忽たちまちに絶ん事を憐み給へんに周防長門兩國を安堵し事足以安藝備中備後因幡伯耆出雲隱岐石見の八州を獻すべしと謝しけるに予其罪御免有て八州を收公せられ周防長門兩國をハ秀元に賜る旨仰下されしうハ輝元入道して宗瑞と改め我身の長州萩の城に引籠り秀元の同國府中に住しける輝元秀元を養子とせし後設けたる藤七郎といふ男子あり近頃元服して秀就と名乗る此秀就輝元が實子あれば所領をハ秀就にこそ賜ふべけれ秀元我身の纒むつがに豊東豊西豊田三郡を領し秀就成人迄ハ兩國の事秀元執行ハ關東にも常に伺公しける此後秀元妻失せしかば神君御養女松平因幡守康元女を給はり寵遇ちゆうご淺からず秀元纒むつがに十四才の時太閤朝鮮を討れしに大將を蒙りしを始として將軍家三代に仕へ頼母しき者に思召れ文武の名器世にも人にもゆるされ齡積り慶安二年壬十月六日七十二歳に

て終をよくせり(大成記藩譜)

渡邊勘兵衛郡山城渡の事

増田右衛門尉長盛は高野山に盤居し御免を願ふ事頻りなりといへども毛利輝元は御敵ながら秀元吉川福原南宮山より人質を獻じ其志を顯はしたり増田は左様の事もせず關東へ出陣せぬを功として赦免を請事其理りなし、かしあから格別の御憐みをもつて死罪一等を宥められ其子兵太夫と同じく高力左近太夫忠房も預られ武州岩槻に配流せらるかくて増田が和州郡山の居城を請取とて筒井伊賀守藤堂佐渡守本多上野介船越五郎左衛門並池田三左衛門の陣代伊木清兵衛等をつかはさる郡山には増田が城代橋與兵衛堀屋法順等と家老とも評議とりと成りしがこゝに渡邊勘兵衛了とて古老の勇士あり彼は前年太閤小田原の北條を攻られし時中村式部少輔が家に有て山中城に戦功を顯はしたり近年増田に養はれ郡山に有けるが家老共勘兵衛に諸事を頼み委任しければ勘兵衛は籠城防戦の用意し自身城を乗廻り堀裏を守らせ持口を定め嚴重に下知したり然る所に筒井本多藤堂等の人數郡山へ着ければ城中へ使を立て増田父子既に配流の身となりぬ我々其城請取に罷向ふ早々明渡すべしとす遣

はしたり勘兵衛家老共と相談して答けるは我々は長盛の命を受けて當城の留守仕へば長盛の墨付御座あき中は此城明退す事叶ふべからず此事無禮と怒り給はんには我々ども討死仕へ上あらば御渡す難くいと申ける本多藤堂是を聞尤と同意し其旨大坂へ上増田が一札來りしかば是を城中へ送る所勘兵衛と家老田中角之允一覽し是の長盛が自筆との見えずいもし長盛自筆の一札御見せあらずバ城の渡しやすべからずといへば本多藤堂等憤りを含むといへども理のわたる所詮方あく其旨又大坂へ言上す城中より此上の定て寄手城を攻べしとて彌籠城の用意する所角之允の妻子を城に留置くの合戦の妨ありとてひそかに妻子を落したり勘兵衛の城陥る時の妻子共に死するの士の道之是を落すの自身も逃去心と見えたりと怒りしが其後長盛自筆の一札を其家人佐々彦十郎よ持せ送りければ然らば城を明渡すべしとの事に定りたり翌早天に藤堂本多兩家の人数はや本丸迄込入しを見て勘兵衛大に怒り是の城代橋與兵衛惣屋法順が卒忽に鎧を渡たる所とて強て三門の鎧を取返し三時が間の出入を禁し万一城付の諸器械紛失しての城代の者過失と成り城請取渡し城代共御請取の御奉行衆二丸迄御差添すて御請取相濟しと申御口上を承届其後門を開き城兵皆退散仕へし

といひ出し未刻に至り請取渡し事濟其後勘兵衛下知し旌旗を卷せ柳町口より次第に人数を繰出し立退て大安寺伽藍跡にて人数を揃へ勘兵衛を始め諸士一統式代して立別る、時本多藤堂の人数に向ひ勘兵衛の御奉行中へ種々訴訟共々上無禮ありと御怒り御座有べく以得共敷あらぬ我々武士道の亂し兼互の禮義御免下さるべくと挨拶し鎧を渡して退散せり勘兵衛此時の舉動いかにも見事にてさる者と聞へしかば御家人よ召出さるべしと仰下されしかど藤堂佐渡守より約束ありとて豫州へ下りしかば高虎先知一万石に倍し貳万石を授たりとぞ(基業)

石田小西安國寺等鼻首の事

大坂にての井伊兵部少輔直政本多中務大輔忠勝柳原式部大輔康政に今度大名諸士戦功を糾明査檢命ぜられ本多上總介正純に諸人訴訟を裁斷すべしと仰付らる此時直政忠勝康政等諸老臣の評定をこらし當大坂の天下第一の要害の地に金城鉄壁無雙堅固こゝに秀頼を差置れあば此後とも姦才邪曲のやうら秀頼を挟み叛逆する者有まじといふ難し此弊を幸秀頼住居を外に遷され姦臣反心を開くとを得ず天下永く大平に歸すべしと議を獻す神君聞召



石田小西
安國寺等
梟首の圖



汝等國家の爲に慮る所尤も然りとはいへども今度の一亂秀頼幼雅にて更にまられざる事
 明かり全く石田等姦臣秀頼を名とし天下を傾んと計りし所なれば秀頼に罪あり然るを今
 度の一亂幸も幼年の秀頼を遣出さん情なしよしや此後姦臣反賊ありて秀頼をたぶらうし
 當城に籠るども是を追我何程の事あらんやとて秀頼を其まゝ大坂の本丸に居置給ひ神君に
 の秀頼に御對面情も其心を安んじ給へんと種々慰め給ひ片桐市正且元は此後其方故太閤遺
 命を遺へず秀頼成育の程専ら補佐すべしと命せらる(大成肥)市正さる智謀ゆゑしき者なれ
 ば石田等逆道の始め中江式部少輔川口久助兩人を關東へ下し今度の一亂全く石田等逆謀に
 て秀頼公知し召さるる趣をア上しむ然るに中江川口兩人は途中より奉行共にかたられ開
 東へ下らず安濃津の寄手に加はりしうへ市正また小出掃部守と相議し井伊直政本多忠勝へ
 飛札を送り秀頼公此一亂さらしくまろし召さるる旨訴へたれば市正志のほど深く御慮あり
 てのたとぞ聞へけること十月朔日逆首石田安國寺小西等罪科詳定決しければ京都に於て其
 刑を行はるべしと仰出され本多上野介村越茂介の石田小西を捕縛して其罪より與平美作
 守に引渡す安國寺の兼と與平預りし事されば此三人を引出す是より先三人が衣服垢付たり

とて新衣を着替へむ其衣は三人ながら白赤段々も織たる熨斗目の小袖ありさて三人鉢々車
 にのせ洛中洛外を引廻す是を見る者あれこそ大坂の奉行頭人として孰も世上に肩を並る者も
 かく權威を振はれ門前車馬市をあし彼人を奴僕下部迄人を人とも思はず振廻せしが其人々
 の身の果あるよと京近在の男女までむらがり来て見物す其中には彼人々の情なくも我等が
 主君を讒言し主人を亡ぼしたり親子兄弟眷族かの人のためよ失はれし主の敵よ親兄の仇に
 人に報のあるぞとは今こそ思ひしるらめと罵る者も夥たあり其中を小路へ引廻されても
 右田小西兩人は顔色も平生に殊あらず安國寺先日の手紙に惱むゆへにや容貌も瘦せおとろ
 へ顔色も憔悴し面を低て居たりける石田が車ある民家の前に來りし時石田我渴したり茶を
 くれよと車の上より高聲に呼ければ其家の老婆立出てやれいとをしや世が世の時にてある
 ならば御目にかゝるべき身ならぬと今さればこそかゝる山腹に茶を所望し給ふいと召上れ
 ば茶を持出て進めければ三成快く飲ほして今は思ひ殘す事もあしと六條河原まで引れ來
 る三人共車より下り敷草に引すへられ爰に逆邊の住僧はかゝる刑人に十念を授く右田も安
 國寺も其十念を授かりしに小西行長は我もとよが耶蘇の門徒天主の教を尊尙すとして其僧に

向ひ腫を吐かぐれば僧共大に驚き早々逃去ぬ其後大刀取後に有て太刀の光きらめかし三人が首は其儘落たりけり役人共其首を六條河原に懸首して其首の傍に高札を立たり石田が首の傍に立しは

此者 石田治部 むほんをおこし京田舎の人をさやますによつてかくのごとくおこさるものあり

子十月一日

小西行長が魁首の高札には

此者 小西攝津 むほんにくみするによつてかくのごとくや付る者あり

子十月一日

安國寺ヶ首のうたはらに

此僧 惠理 むほんに組する科によつてかくのごとくや付る者あり

子十月一日

爰に東福寺に龍岡といふ僧あり安國寺もとの東福寺先住ありしちあみあれば彼首を盗み葬

り跡 懸に吊いやと寺中をかたらしりとも寺中衆僧一人も同意せず龍岡大に怒り單身にて夜中六條河原へ忍び行安國寺が首盗むてひろかに葬むり幽魂を吊ひしが東福寺の衆徒の釋氏の法にそむけりと怒て龍岡此後の東福寺を出て大徳寺に入て弟子と成りしとぞ(其業)

島津降参の事

嶋津兵庫頭義弘入道維新の主従に五十人斗にて關原の戦場を切ぬけ石田が方より案内に付置たる入江權左衛門に郷導させ一瀬土岐多羅の山路よがり八日市を過ぎて高宮川原に出しが主従どもに飢疲れしかば此所にて牛一疋捕て討殺し主従是を切て食とし飢を忍て甲賀谷にかゝり土民壹人頼み案内者とし水口三代寺信樂を過し頃郷民ども起り立て島津主従の道を遮り討留んと馳集りしを義弘入道真先掛て追散らし五人が首切て其所に懸並へ一人を生取て大木に縛り付夫より大河原嶋ヶ原笠置加茂をへて十七日の朝奈良に至り甲賀より案内せし土民に刀の并をさつけ後日薩州へ来るべしと約束し彼を此所より歸し河内路をへて攝州住吉へ着陣す堺の町人田邊屋作菴といふ者年頃嶋津が恩を蒙りしかばうひくしと侍候して美酒嘉肴を備へてもてなと嶋津が主従を以て梅酸の湯をまのぎけり義弘父子

大坂へ出世たる妻子悉く取て船五十餘艘に取のせて帆を開き薩州をさして歸りけり(嶋津が妻子を難なく取返したるを一脱に田邊やがはうらひなりしといふ原書に立花宗茂義弘住吉へ着陣以前盗取といふの誤るが如し)又八郎忠恒も同じく歸國に赴きぬ其後神君井伊直政本多忠勝山口勘兵衛直友に仰らるゝの今度嶋津義弘が舉動ころ不審なれ凡朝鮮軍功の豐多しといへども大關堯去の後勲賞の沙汰に及ばざる所義弘父子が功を賞し豊臣家の領所薩隅兩國の内四方石加恩としてあたへし恩を仇とし逆徒に一味し伏見の城を攻たるのみならず關原表にても衆人よ越て手を碎くよつて今度西國の諸將に令し嶋津征伐せんと思へども義弘入道龍伯の凶徒に組し逆謀に陥べき者にあらず汝等がはうらひにて龍伯が心を試むべしと命ぜらるる三人畏り早々其旨龍伯がもとへ送る又山口が手へ嶋津が兵太田助之丞新納旅庵を生取て鞠問せしに彼者いふに義弘内府公御厚恩を忘れず大坂の奉行等伏見の城を攻んとせし時義弘父子城中へ使を立て籠城して御味方し忠を盡さんとや入しうども鳥居元忠是を用ひざれば止事を得ず石田に一味すといへども更に本意にあらずとゆければ山口此趣を直政忠勝にはうり山口が家人と彼者にそへ委細に龍伯へ送る早く大坂へ登り義弘

父子が罪科陳謝あるべしとや送りければ龍伯既ひ斜ならず(大成記其業)家人鎌田出雲を大坂に参らせ陳謝しけるに義弘に於て更に内府公へ對し始より心をいだかず舍弟兵庫頭義弘未還相續もせず御敵に組せし條甚以て奇怪の至り之依て歸國の後對面をゆるさず櫻陽にありし返置いさりあがら義弘も御敵と成らん事本意ならず伏見へ籠城せんとせしむども鳥居内藤等の御家人同意せざるが故止事を得ず石田が催促に應じ今に於て深く後悔仕るよしにていもしも曠世の御仁恩にて義弘父子寛宥の御沙汰をも樂りなば生々世々御恩を忘るべからず義弘自身大坂へ馳登り陳謝せんと思へども病にさへられ心にまうせず愁訴したり又福島左衛門太夫へも様々訴へ歎じり神君龍伯が丹心を聞召といけられやがて龍伯に本領安堵あるべしと仰出され本多佐渡守山口勘兵衛義詞を以て其旨を送る龍伯はじつ薩隅日三州の民迄大に安堵の思ひをさす慶長七年四月十一日龍伯に本領安堵の御教書を送る又八郎忠恒と龍伯の猶子にして家繼すべしと有ければ龍伯益々悦び病を扶けて忠恒を具し上るべしとせし所に家入伊集院源次郎が隠謀の聞をあれは忠恒一人伏見に参り神君に拜謁御仁恩を謝し奉る是より永く臣屬して西藩の御守とぞ成にける(藩譜)

宇喜多秀家始末付進藤三左衛門の事

宇喜多中納言秀家關原の一戦先手の既に破れしうと旗本勢のいまだ崩れぬに今一戦して討死せんと怒られしに家老明石掃部畢竟秀頼公の御大事今日に限るべうらう君の今度大將軍にてまじませば亂軍の中にて御討死あらん事勿躰なし早う一方を懸破り御歸國あり備前岡山にて再び義旗を揚給へど諫はれば秀家も尤も其諫に従ひる掃部さうらへ某御先を仕るべしと早う都へ登り大坂より船に乗て岡山へ歸りけるにはや一兩日前に岡山城明渡し城兵皆退散しければ明石掃部後悔すといへどもかひなく備中蘆森邊に身を隠す秀家頼みと思ふ掃部に別れたり味方の惣取軍の事なりいつこに立寄らん陰もあく進藤三左衛門黒田勘十郎の二人を具し甲冑を脱棄馬をも乗放し伊吹山の阻侮ひ美濃の粉川の谷に至りしに雨のまきりに降來り木葉をさそふ山風に寒さの寒し日の暮ぬある岩陰に立寄て時雨の時間を待れしが此程日夜軍慮に隙なく心を勞せし疲れにや勘十郎が膝を枕とし覺えず眠を催して前後も分たず打ふし心ならずも時うつり秋の長夜も東雲近く遠里の八咫の鳥も聞ゆれば三左衛門心づよくも秀家の眠を覺しいつ迄もかくてはまじませずなき追兵の來らぬ先に何方へも落

させ給へといへば秀家も漸起上り次の日は猶兩人を具して中山の郷まで忍び落られしに郷人ども關原の落人が物具剣など多勢群り寄る中よ小池田郡白樫村の郷士矢野五郎左衛門といふ者あり秀家の有様流石只人からずと思ひ側に隣踞し夜半の時雨山路滑にして貴人の御歩行惱ませ給はん恐ながら下部に負はせ進らせ我住方へいざかひ参らせんと九藏といふ下部に秀家を負はせ五郎左衛門は郷人共に向ひ此御方は某が年頃知り参らせたる故隣村まで伴ふなり御邊等は跡より來る落人を待て手柄を願はし給へといひ捨て畔傳ひの細道をめぐり白樫村に至り二三日は茅屋にやどらせ食物をも進めしかど愛も郷人目にかゝらんかの陣ありとて家の後ある岩窟の中に赴を敷て主従三人を住はせ懇にいたはりけり秀家もかゝる世にありける物ぞとあまりに淺間しくことかた行末思ひやるにもたゞ涙のみ催されて

涙のみながれて来りくみせ河

水の池とやきえんとすらしむ

山端の月は昔にかはらぬと

わが身の程は面影もなし

或日秀家三左衛門に我は島津父子へ納せし事もあれば一度薩州へ落んと思ふとやされければ然らば我等ばかりで見ずさん御平生の御秘藏の御腰物を賜はり我は是を以て只今より謀を行ふべし君には早く勘十郎を召具せられ薩州へ御下向有て兎も角も計らはせ給へとて三左衛門は秀家秘藏の刀請取て主従涙とにも立別れしが三左衛門は大坂へ登り本多忠勝が陣へ至り秀家は關原敗軍の後主従三人に成りひそかに北國の方へ落延しが石田小西等の人も生擒となり既に罪科も定りしと聞今は天運の致す所運るべきにあらざとて自害せらる依て遺骸と一片の煙ともし一人の家士の主の白骨を首へうけ高野山に赴き以某も殉死せんとい存せしが主人の眷族重き拷問に逢んもなげうのしく早く主人の自害のよしとも注進し且の主人最期迄も身を放さる宇喜多家重寶の此名刀を失ひん事をよしみ持参して内府稱へ獻上仕此上の秀家息八郎助命の事一向願ひ奉ると涙とともにかきくとき訴へければ忠勝尤ありとて其赴披露して其刀を御覽に備れば神君も兼て知召れし宇喜多家重寶國次の名御此上の何疑うあらん先以て彼の者主人の事途を見届たる志御抄されば扶助すべしと命

せらるかくて秀家の五郎左衛門頼母しき者と見て事の子細をつまづ語り借其斗らひをたのみける五郎左衛門心得て大病人の有馬温泉に赴くとやあし秀家を古橋に乗せ勘十郎と五郎左衛門と二人付添慕深く江州の武佐逸出て翌日の伏見に着乗合船に乗て大坂に至る幸天王寺に五郎左衛門知音の者あれば此者をうたらひ夜に紛れて大坂の宇喜多屋鋪へ伴ひたり屋敷に北方も稚き人も今のはや此世の中におひすまじと歎きかたらひせらるる所にはうらすも昨夜秀家歸館ありこの夢も現うと悦ぶにも先きだつもの涙ありぬ五郎左衛門此日頃懇にいたわり愛迄送り参らせし志忘るべうらすとて黄金十枚それ妻にも北の方より小袖五襲賜りて故郷へ歸されける其後秀家の人目を忍ひやうくと薩摩方へぞ下られける此事つゝむとすれと世に隠れなく聞へければ近藤三左衛門偽を才上忠勝も欺れしを怒り三左衛門を殿に糾明あるべしと三左衛門少しも恐れず最前我等訴出し趣の悉く偽にて秀家を薩州へやすらうに落さんとの計畧にて秀家薩州へ落のびたる上の我等本意の違しは今の偽を才上欺き奉りしに紛れし早も某が首を刎られしとどうぞ神君彼の忠義の士いかに主人の爲神妙の事と御取あり采地千石をたまひ御家人に召出されしとぞ

有がたき神君人の善を捨給ひぬ御仁徳感ぬ者のみかりけり秀家の薩州に下られしが嶋津早く降参せし事あれば本意も遂がたくやうやく嶋津が扶助をもて慶長八年まで薩州に身を隠しけれども終に隠れ果へきにあらねば嶋津より本多佐渡守を頼みて宇喜多父子死罪一等を減せられん事を願ふ元來此宇喜多といふの赤松の家人浦上美作守紀則宗が被官にて和泉守能家が時に山陽道に武名をわらひす能家が嫡男和泉守直家が時ききりに身をあこし備前の國佐伯郡大神山の城主赤松宗景を討亡して備前美作を押領を是よりつねに毛利と雌雄を争ふ事年久し夫よりいく程あく直家の病死し其子八郎未十歳にもみたず家を継ぎしが家老戸川肥後守秀安あといへる智勇ゆかしき者八郎を補佐して常に毛利と争ふ秀吉公毛利を討んため備中の國に在陣ありしに京にて織田殿討れ給ふと聞て秀吉公毛利と和睦し俄に歸京せられんとせしに及び八郎が家老岡越前守の其歸路を追討せんといひけるを戸川秀安堅く制して秀吉公既に備前に入給ふとき、秀安幼主八郎を携て御味方せんと参る秀吉公悦給ふ事大方あらざ八郎を膝の上に抱上て永く一家の好を結ひ智君とせられんと約し備中の内九万石を加恩し給ひ八郎よりやがて首服を加へ諱の字を賜り秀家と名らせらる其後前田

大納言利家の息女を秀吉公の猶子とし八郎を輝君とせらる秀家かゝるちなみにより官加階といこふりなく從三位中納言に歴任し世の覺へ人の尊敬やんとあき富貴榮華を計りあくぞ見へにける此度石田がかたらしにより伏見の城攻關原の一戦にも惣大將にて手を碎かれし事なれば尤免許あるべきにあらずといへども龍伯が願ひも黙止がたく又前田中納言利長卿無二の御味方にて莫大の戦功あり利家卿息女秀家北方あり其子八郎家規の其腹にまふけられし事あり利長卿も頼に愁訴せらるれば旁餘義なく思召れ寛宥の御沙汰にて利長卿軍功に免じ給ふとて秀家父子このとし八月十八日遠流に處せられ主従繼に七八人大坂を發し駿州江尻の港か出船し豆州下田浦に順風を待て終に八丈島へぞ渡海せらる寛宥の御仁政にて秀家父子露の命のかげどめしが島に渡りての淺ましげある鹽の宮屋に身を寄てうしろの山前の海磯の松風波の音より外の事問者もあし竹を柱とし蘆を垣とし雨露のもるにまうせし住所はいつれに衰のきせぬべある時めくぞ口すさみて柱に書付られぬ

(本書のまへ)

とふはうりにやらふとてたへん

もしほたきうきめかゝる身のうら風

ある頃また備前の船人この島に來りしにさす故里の者どもつかしく港に招き入てさま
しくかたられし後に筆とりて

我こそよ新島より隠岐の海の

あらし波風こころしてよけ

といへる承久のむかし後鳥羽上皇隠岐の行幕にてあそびされし御製をかき故郷人に見せよ
とてたまひしとぞ心中思ひやられたり(常山紀談因談播磨)八郎家規の程さく失ぬるが秀
家のそれさき命あがらへて寛文二年に九十餘歳にて終りぬとぞ(紀談)

按るに室直清が老るせしもの、中に秀家父子八丈嶋へ配流せらるゝよ及び八郎が乳母
の逝去りぬさしの女房徒既にて官廳に至り八郎にまたがひ島へ赴き介抱せん事を願ひ
しに官吏ゆるさず其女房さての生て甲斐なき身なれば直に自殺せんといふ此事御聞に
達し彼女房が忠操を憐れみ給ひ其願をゆるさせ給ふ女房限りさく悦び秀家父子よまた
がひ嶋に赴く其女房三才の男子有りしを秀家内室のものと參らせわらわ若君の御事
あまり御いたしむ存せられはるゝ波風をまのさ嶋まで御供仕し此志のれと思存

いんにの此見をいたわり下さるゝしと置たり内室も此兒の母八郎が先途を見届に
はるゝ波濤をまのさ嶋まで供せし者なればとて此兒を膝下に養育せられ成人しけれ
ば此父の澤橋といふ者ありしと聞へけるにより元服させ澤橋兵太夫と名のらせ加州へ
請て所領をあたへ前田家に仕しめしと兵太夫朝暮母の事をまたひ落涙のみしけるに
幾程もなく通世して行衛知れずやがて出家して僧と成り元和の頃將軍家御上洛の折り
ち此僧御興近くまうりて訴状をさし且前田家よらなみあるよしすにより其時前田大
和守御供にありしとて大和守に此僧を預らる其訴状の赴の愚僧が母舊主の供して八丈
嶋にあり愚僧三才にて母に別れぬとせむらへん事詮なしめはれ愚僧をも彼嶋へつ
りりされ母を養育せしめて下さるゝしとの事之官吏是をさしこの國家の大法ある事な
れと思ひぬらるゝしとて其僧をけひかと思ひ切たる有る事あり
なれ官吏ももてあそび御聞に入しと家内四君彼の者を嶋へ遣りされん事大法により
らるゝ事ありしとて難し母を彼の島より返して僧に下さるゝし其母のものと僧文
うきと送るゝしとて御出さる僧承り此事やるとも主人を捨て歸らんとすべし

うれども仰ことこのありきたりしことければとて其旨を文にのきてのりしければ母
 の其文一目見るより大に怒り主君の御先途を見届んと上へ願て此島へ来りし身の才の
 愛に引れ主君を捨て歸るといふ事あるべき事めは口をこき事をも聞しかな重ねてか
 る事を送るとも返事もすへからずと申したり官吏僧を召てかくまて上よも御仁慈を
 盡されぬれども汝が母加様に申事あれば詮方あり此上にも上には汝が孝心を感じ給ひ
 何がな其願かなへ下され度思召されば此外に願ひもあらば申上へこと申渡たり僧涙を
 ながし卑賤の身上を憐らざる罪をさだめ給ひかくまて御仁慈にのみかりしうへは別に
 申上へべき事もあし去ながら加州家はもと宇喜多家とちなみ淺からぬ事されば加州より
 年々扶助の米金を贈りし事御ゆるし蒙らば宇喜多父子はすましてもあし某が母も悦限り
 かく某老母への孝道も立申へこと願ひけるに聞し召され是はくることかまじと群議一
 決し金銀其外買敷を定め加州より送るべしと仰下されしにより毎年定めぬ如くしたて
 めて加州より公庭へさしげ官吏扱ひ島へ送る事と成りぬ諸大名此事聞傳へかの兵太夫
 入道召抱んと招く人多かりしかども辭退して後は加賀の國に下り程かく身まかりしと

ぞ國家供恩や迄もあし入道が母子の忠孝願はれて主人の助とされる事天心にもかまへ
 るに成るべしいと有がたき事といふべし

九鬼嘉隆自殺付真田父子助命の事

志摩國鳥羽城主九鬼大隅守嘉隆上方の逆徒に組し伊勢美濃尾張邊の浦々を侵掠して關東勢
 の妨をせしかども關原味方敗軍の由聞て鳥羽にも安居なしがたく加勢に籠りし堀内安房
 守をば東國へ歸し其身は家人豊田五郎右衛門を具し勢州善志島に匿たる其子長門守守隆ハ
 始より無二の關東方あれば畔乘の古城を取立て父子相分れ敵と成りしが父大隅守鳥羽城を
 逃出しければ長門守再度鳥羽に歸入し頼て大坂に赴き其身の軍功にかへて父大隅守助命の
 事を願ひけるされども大隅守罪重ければ御免成りがたしと聞へければ長門守大よ歎き福嶋
 池田兩將をたのみ様と懇願して漸く御免を蒙り父が一命助給ふのみあらず其身も今度の戰
 功褒せられ二万石を加へ賜ふ爰に於て長門守早く其旨父に知らせんとて野津甚右衛門とい
 ふ家人を急ぎ大坂より勢州に下しける父大隅守ハ善志島のあまの宮屋に身を寄せてうき日
 數を送りしに家人五郎左衛門方へ池田の家人石丸雲若より書狀を以て長門守殿御味方にて

随分御忠節を盡されしうども御父大隅守殿の敵とし給ふのときならず逐電して身を匿し給ふ所に内府公御氣色よろしうらずと申來り此上の九鬼御家興亡の御思慮次第にいといためければ大隅守涙をばら／＼と落しおしからぬ我が命取を忍びながらへぬるも子共等の行衛を思へばなり忠勤せし長門守我故罪に陥れん事尤本意を失ふといふべし我命の露ほどもおしうらず我の自害すべし見苦しき白髪首恥うしあから大坂へ差出長門守が身の災を避よとて其儘腹切て死ぬ時に齡五十九歳十月十二日夜の霜と消失ぬかくどの知らず野澤甚左衛門日夜道を急ぎ勢州明星の茶屋迄着て此茶屋にて晝睡くひて疲れを休め居たる處へ供の若黨兩人甚左衛門が腰に付たる金子を見て貪心を生じ左右より切てうゝる甚左衛門切れあから起上り兩人を切倒し其身も手負ければ兩三日滯留して有し所へ彼五郎左衛門大隅守が首を持て大坂へ登るとて明星が茶屋迄來り甚左衛門に對面しければ甚左衛門かくと聞て大に悲歎したり長門守も本意なく愁傷じ大隅守も首骸を葬埋し豊田五郎左衛門が大隅守を進めて自害させし事餘りに腹立しく思ひ豊田を大隅守が墓所に引出し誅したり（天元實記藩譜基業）其頃本多忠勝は井伊直政榊原康政に申けるの眞田安房守并右衛門佐父子の事

重罪の者されば極刑に處せらるべき事ありといへども伊豆守其身の軍功にかえて父と弟が一命を御救の願ひを奉る事志きありされ共御存の通り我等内縁の事されば我にの遠慮あり御兩人より御願下さるべしと頼みける兩人聞て安房守左衛門佐大罪の者にのほへども伊豆守身に取ての父子の事助命願ひ尤にゆ上べしとて神君へ申上ければ中納言合點さればよきに先やて見るべしとの御詔ありさての大殿御前において別義ありとて中納言殿へ申上しかば以の外に御氣色を損じ伊豆守の父子の事願の趣尤ありされども其方違取持て彼是と申筋のあき事之安房守只今に至り助命を願ふ心底さらば式部も存の通り上田の城へ再三使を立しに其願の無禮の舉動し關原表一戦に手筈相違に及びしも彼が手向ひ致せし故之然ればたとひ内府様には御寛宥有とも我等に於ての成敗申付ずしてかありぬ者共あり以來左様なる取持無用と仰ければ兩人恐服して退き忠勝へ斯と告る其後伊豆守の又井伊榊原本多三老中列座の席へ出て此程安房守并弟左衛門佐兩人が事にて中納言續御意の趣御尤至極恐入奉りいへば以來父并弟助命の願の申上ずし夫に付其願は其事逆意の者の子にいへば切服相願は某切服仕ひうへ安房守事御成敗申付られ下されいへん天下の御刑法も相立やべく

いへば安房守御成敗以前に先某に切服仰付られし様各方御取持頼入いと思ひ切て中詞の下より榊原康政大音にて扱ふ其元の古の左馬頭義朝にの進まさりたる賢人にい安房守殿助命の事拙者請合いとして其儘兩御所へ康政申上しかば伊豆守孝志の程兩御所御威有て安房守左衛門佐父子とも助命仰出され高野山に蟄居すべしと命せられ安房守左衛門佐父子ともに高野山に赴しが安房守は慶長十五年六十七歳山中にて幽死す其子左衛門佐は元和の始大坂に籠城し難波浦のなみならぬ武名を世々に残したり(天元實記)

福知山城攻付小野木自害の事

細川越中守忠興大坂にて願ひ出しは細川越中守父幽齋御味方として丹後田邊に籠城せし所小野木總殿助重勝近國諸將を引具し忠興が領地を亂妨し老父幽齋居城を攻め事以外の外奇怪の舉動之忠興が一手を以て福知山を踏潰し總殿助に腹切らせ度よし願ひけり神君聞召其元には關原表にて骨折たれば福知山は他人に付べしと思ひしかども所望理りあれば其意に任ずべしと仰ければ忠興大に悦び二千五百余騎よて進發す木下右衛門太夫延俊は世間の形勢を窺ひ父肥後守家定入道が播州姫路城を守りしが兼て東國に志をよせしかば細川が福

知山の城攻るよし聞て幽齋また延俊が夙きりければ(藩譜)手の者四五百人召具し寄手に馳加はる前田主膳正宗利(其家の譜には茂勝と作り立以が次男之物領木下左近太夫秀次といふ此人の事つまびらかならず是は大谷がすゝめにより西軍に組せしよし第卅八冊に見へたり故に秀次が廢して弟宗利が家を繼せしあるべし)龜山城(丹波)より出て細川が馬堀村の陣に至り先に田邊城の寄手に加はりし事全く本意にあらず今度御先手に加はり志の程をも願はし度と懇請しければ忠興同意し長田野より二手にわかれて蛇が鼻江坂へかゝる福知山にても城兵を蛇が鼻へ出張して寄手を防ぐ細川家人中津海治兵衛其夜蛇が鼻を見めぐり堀と柵とを越て番兵の首切て歸る城兵は此所防難しとや思ひけん城に引とれば寄手追懸て福知山の城をかこむ城主小野木總殿助重勝(藩譜公卿に作り又安久とも有り)其始は丹波の波多野右衛門太夫秀治が被官ありしが織田殿の波多野を亡さるゝに及んで織田殿に降参し其後太閤に仕へて福知山の城主たりしが大坂の備促に應じ丹後田邊の城を攻しに幽齋勅命に應じ田邊退去の後小野木も大坂へ歸参し輝元増田が下知にまたがひ澁州へ馳下らんとせしに關原の味方惣敗軍と成り細川又居城福知山へ攻寄るときき、早く大坂より逃歸れば寄

手ハ城を取らむとむされ共小野木もいみじき者なれば山賊の姿に身をやつて従兵ハ城下は殘
 し只一人うらふじて城に忍び入防戦の用意を下知す忠興翌朝城近く押寄城の形勢熟覽し此
 城の形勢昨日と異なり城將小野木が城へ忍び入じか又ハ他より加勢の入しう今ハ容易に此
 城陥るべうらず計策を以て功を成就すべしと城中へ使者を立て其元老父幽齋が城を攻られ
 しの秀頼公仰成りと輝元長盛等の下知せしによりての事なればいうてう其元を恨んや關原
 一戦後天下 悉く内府の威徳に歸服す其元雖が爲に孤城に籠り討死を志給ふにや更に詮な
 き事なり早く城を出て大坂に登り前非を陳謝し家名を失ざる事を謀らるべきことや送る
 神君人を殺すをたしまざる仁君あれば其巨魁を誅して登從ハ治め給はず寛大の思召故此城
 を攻るとて雙方死傷する者を憐み給ひ山岡道阿彌を遣はされ小野木を様と説諭されけるに
 小野木今の頼みなき身心細き折らなればかくいふ人を頼みに剃髪して降人となり出けれ
 ば十月十八日龜山の淨土寺にゐひて細川より僉使を遣はし細川介が罪重ければ切腹すべし
 とや送る小野木從者にむらひ吾先年小田原の北條が敵の計略は陥らめくど城を出てつ
 いにハ腹を切らせられしを無下に無謀の氏政と爪弾して嘲笑しが今正しく我が身の上

めをり來りたり左りあぐら是も天運時節到來人力の及ぶ所みらず汝等必細川を怨むべうら
 ずと言て自殺せりこれより福知山城ハ忠興朝臣飯川豊前前岐左馬並に勤番させ小野木が首
 を大坂に登せければ大罪の者なりとて三條河原に梟首せらる石河掃部助頼明ハ立花宗茂と
 同じく大津の寄手に加ハりしが關原の戦ひ敗れて後脇坂安治をたのみ助命の事を願ひし
 うども此掃部介并小原隠岐守河尻肥後守ハ石田が無二の與黨今度の一亂の巨魁ゆるさるべ
 きにあらずとて皆腹切らせ小野木と同じく梟首せらる伏見城にて叛逆敵を引入し永原十内
 山口宗助并甲賀十八人の者共追捕せられ栗田口にて磔にかけらる(基業)

長曾我部所領没入の事

土佐國領主長曾我部宮内少輔盛親ハ去年の春父土佐守元親が家をつぎ土佐を所領し兄孫次
 郎ハ津野家を繼て別家と成り然るに盛親今度大坂の催促に應じ安濃津の寄手に加ハり關
 原にて毛利秀元に屬して南宮山栗原山に備へ長束安國寺鍋嶋等と同じく陣を張てありしが
 關原一戦敗れしうハ何の仕出したる事もあくとも崩れして逃去し伊賀路をへて泉州堺にい
 たり攝州より本國へ逃歸り家人立石助兵衛横山新兵衛を大坂に出し井伊直政につきて様と

陣謝しければ盛親自身大坂に登り罪を謝すべしとあり直政家人川手内配梶原源左衛門を盛親が使者に添て土州へ遣りし其旨を送る盛親大に悦び直に大坂へ登らんとせし所に家老久武内藏助が陳けるの御舎兄津野孫次郎殿の藤堂高虎と無二の御親友されば定て高虎内府公へ請奉り今度主佐半國を津野殿へ賜ひらん様にはごらぬれば眼前あり急ぎ津野殿を失ひ給ひて後大坂へ赴給ひて然るべしと申けるに兄弟の大倫も辨へぬ盛親なればこれ尤も姦臣が無道の詞に迷ひ孫次郎を無理に腹切らせ十一月十二日大坂へ登りし頃の伏見の居邸にて休息すべしと命せらる其頃神君藤堂に津野の何としたりと問せ給ふ高虎の盛親が津野を腹切らせしことを怒り盛親の兄孫次郎が東國へ志をよするを忌んで腹切らせしと申上るにより神君以外の御憤深く然らば盛親重罪之御ゆるし有べからずと仰出されしを直政やうく死罪をばや宥め直政盛親に對面し其旨を告てまばらく領國をわづらひしと申しはば盛親方かく承服す依て直政が家人鈴木石見(此時平兵衛)を長曾我部が家人とせしに土州へ遣りし其旨を送り城を請取べしといふ家老等いみじきにあらぬは城を渡さんとするに及んで長曾我部が家に一領の具足と號する小身の家士五百餘人は具足一領馬一疋鎧一筋にて

馬廻に勤仕する者共あり此者共僻郷邊土に生立て長曾我部より外に尊ぶとき物のあらざと思ふ田舎侍されば此事聞て井伊直政が謀略にて國を争ふと思ひ鈴木石見が旅宿雲溪寺を六七百の人数を催しとりこむ是を尤も同意する者も大勢に成りて五千七百人浦戸の城にたてこもる家老共大に驚き鈴木石見と同じく浦戸に十一月晦日押寄せ家老共計略を以て城を攻落し一領具足の組頭竹田又左衛門福浦助兵衛等の切腹も殘黨の皆敗北しければ土州一圓井伊が手へ請取盛親の入道して祐夢と號す京都に盤居しけるが其後大坂の亂に籠城して終に其子孫の絶たり又足利將軍家代々右筆の事司がし越川新右衛門親長同次郎右衛門親満の足利家衰廢の後四國に下り長曾我部に身を寄せてありしが今度四五十人をかたらひ鈴木石見が手に屬し浦戸の戦に戦功を勵むるの御恩を蒙り御家人に召出さる(安民記其業原書に加藤嘉内山内峰須賀を長曾我部が討手として土州へつくりするといふ事らみ其事ありと誤る)

大坂方將士御仕置の事

前田徳善院を以法印の最初より東國に心を通じければ其身所司代にて京都に在るがら大坂

の逆徒等伏見を圍みたるも余所に見て御家人古老の功臣鳥居内藤等を捨殺にし田邊大津安濃津等城々をも逆徒攻落すとも露若らぬ様して何一事忠節せし事もなし故に御不審少ならず依て一先丹州龜山城所領五万石を收公せられ北條左衛門太夫氏勝は勤番せしめらる其子主膳正宗利も逆徒に組じ田邊の寄手に加わりし罪あり然れども其後細川忠興福知山討手に向ひし時前非を悔て類に懇願し忠興の先手に加わりしに以て本領龜山を主膳正に賜ふ(其家の譜にのち以板倉勝重に預けられしが逆徒に同意せざる旨聞召されて本領をたまた慶長七年二月主膳正其家をつくとあると藩譜に關原の後別の義を以て主膳正本領を安堵すとい見ゆ寛永系圖を以て大權現に任へ奉るとのみするす其業にのち以父子所領没入せらるゝとのみ見ゆ其よを以て始末不審少からず今前田半右衛門信智は此を以て三男半十郎信勝が末なり)尾州犬山城主石河備前守光吉の關原敗軍の後京へ登りこゝかしこ匿しが終に罪を恐て播州へ下り池田輝政を頼み罪を陳謝しければ助命せられ入道して宗林と號す蘆浦親音寺の天津の寄手たりし罪を宥され其地の代官に命ぜらる大津の町人宗左衛門もさる者なれば召出され代官にせられ是の十四屋(此家に昔女子あり十四才の時人あらばうき名やた

ん小夜ふけて我が手枕にかよふ梅が香といふ歌よみしより十四屋とあづく)といふ町人成りしとぞ小堀新助正次の京都よて東國に内通しければ本領給ひり此三男の陸羽が餘流をくみ今の世迄も茶の博士の名を得たる小堀道江守政一あり木下右衛門太夫延俊の其陳狀聞召入られ翌年に至り豊後日出にて所領三方石賜ひる此外生駒修理亮藤掛三河守永勝谷出羽守衛好小出播磨守秀政同大和守吉政同大隅守三尹杉原伯耆守長房建部内匠頭寄徳山崎左馬允家盛片桐市正且元織田上総介信包同左衛門督毛利民部少輔高正宮城丹後守川勝信濃守新居越前守直正時田權佐等の其身大坂にありといへども兼て東國へ内通して志を顯ひしければ皆本領安堵し京極宰相高次高野山に暫居したるを井伊直政山岡道阿彌を以て召返され大津龍城の功を褒せられ若狭一國近江高崎の地を賜ひり舍弟修理大夫(此時早丹後守に任せしが)高知の關原御先手取功により丹後國を賜ふ高次は九万二千石高知は十二万七千石高知田邊の城こぼらて宮津に城築て住す勢州桑名城主氏家内膳正行廣同弟志摩守加州に籠りし寺西備前守は降参して氏家行廣入道し萩野道喜と改め大坂へ登り秀頼に昵近し寺西は處士と成り生涯を送り同國神戸城主羽柴下總守勝雅(藩譜雅利)降参し所領没入あり後御家人と

ありて本氏瀧川に改め常州にて一万石賜ふ(慶長十五年のとなり)同國龜山城主岡下野守も降参せしかども先年秀吉公にかたらはれ主君織田三七信孝を攻たる罪を以て追放たる赤松左兵衛督則房は石田無二の一味にて佐和山に籠城せしがやがて逃去て山林に匿れ居たるを奥平美作守信昌見出して誅す太田美作守は熱田を警衛せしが是も逃出し勢州朝熊に隠れたるを池田備中守山岡道阿彌尋出して誅殺す宮部兵部少輔が因州鳥取城をば龜井武藏守慈矩をつかはし收公せしむ其時播州小堀城主赤松左兵衛則繼(一本齋村とて石州濱田の城主とす)田邊の寄手に加はりたる罪を贖はんが爲龜井に力を合せんとて鳥取へ赴じに宮部が城子細なく明渡しければ左兵衛本意なく思ふのみならず左兵衛宇喜多が妹嫁なれば其罪重しとて鳥取にをいて腹切らせらる此左兵衛は赤松律師則祐より十世の後胤なりとぞ瀧州巖村城主田丸中務少輔具直野州小山御陣にて三成が先途見届たしと願ひ暇賜はりて巖村に立歸り籠城せしが逆徒早速敗亡せしかば大に恐れ居城に罪を待居たりやがて越後國へ配流せられ入道して道松(一本郭松)と號せしとぞ紀州新宮の城主堀内安房守は九鬼大隅守が加勢とて志州鳥羽の城中に有しが九鬼既に城を落る時堀内別を告て本國に歸りしに紀州和歌山

の城主桑山法印は關東へ志を顯はさんと其子修理大夫左近太夫兄弟をつかはして堀内が新宮の城を攻んとす杉若若狭守(一本主殿頭)も寄手に加はり押寄たり然るに輝元増田等の大老奉行等もみお降人に出るとき、今ハウあはじとや思ひけん城を出て熊野の山中に逃ぐへるされども堀内等ハ香従の徒なればあがち憎むべきにあらざとて一命を助られしに此後又大坂に籠城し其時も本國へ逃隠れ終をとりしとぞ此外小野寺孫七郎多賀出雲守木下周防守同美作守杉若越後守筑紫上總介横濱民部少輔寺田播磨守木村孫一右衛門勘屋隠岐守岸田伯耆守早川主馬首南條中務少輔服部土佐守菅平右衛門糟屋内膳正高田薩摩守別所豊後守三淵大和守秋田助左衛門矢部豊後守伊藤加賀守駒井中務等ハ關原表へ出陣せずといへども石田等の逆徒と一味まがひなうりしハ改易せられけり又松浦安太夫伊藤彦兵衛木下左京亮毛利侍從秀包ハ遠流に處せられ赤座久兵衛稻葉甲斐守同右近降人に出たれども罪重ければとて追放たる中江式部少輔池田伊豫守山崎右京亮丹羽備中守長正長重弟溝口大炊助赤澤備後守等ハ關原戰場を逃去て踪跡とらに知れずとあり(甚業によりて收む原書にハ此事あり)

豫州真崎三浦江原如來寺合戦の事

是より先に毛利輝元へ石田三成より承けるの貴卿の大一の大名にて數ヶ國人數に比大坂表へ召具せられたる御人數の外御國許の御人數四五千を御分有て豫州へ差向給ひ加藤左馬助藤堂佐渡守領地を攻給ひ然るべしと申されければ輝元は我等が國元より四五千の人數を遣ひきんの何より安き事ながら左馬佐渡などの小身の捨置たりとも何程の事うあらん黒田如水加藤主計頭關東へ内通する由風説あり兩人關東方するならび定て近國に出馬し味方を惱ますべし我等人數を周防長門より九州へ遣ひし味方を救ひんにやと申さる三成聞て如水も清正も妻子を大坂に差置ながら關東へ一味すべきにあらざ其上如水清正が居城へ取らるるとも容易に攻取かたがるべし勝安き方へむらひ速に二の城も攻落さば敵は力を落し味方軍威彌々盛なるべしといへば諸將も尤も同意したり輝元遂に三成が議に従ひ九月十日藝州より下知を傳へ大坂善左衛門曾根兵衛村上掃部野嶋内匠を大將とし三千五百人を引具し加藤左馬助が豫州松崎(又真崎)城を攻取れど奥居嶋(大成記家忠記五箇嶋基業與嶋安民記本文に同じ)へ軍船着岸す豫州はもと河野家代々番領あり村上野嶋は河野一族あり又毛利が家人平岡孫左衛門が善兵衛是も元は河野が舊臣善兵衛今豫州郷人たりぬるよしを以

て善兵衛を案内者とし豫州の郷人をとりたらしめ松崎にぞは城主左馬助は關東の御先手として東國へ赴留守には弟内記忠明家老綱三郎兵衛一成中嶋庄右衛門堀部主膳安達半右衛門守りたり九月十七日(原書十一月十八日といふ誤之)巳刻城より三里となら三津浦(又滿浦)お着陣し城中へ使者を遣ひし我々大坂表御下知に於九州遠敵方の城を攻ん爲相向ひし左馬助殿御留守といへども御留守の人より當城にばかり借用致さんと存は私に事にはいはず公儀御用筋に比違背なく御明渡あるべき旨申す送る加藤内記今年續廿四歳いまだ少年といへども智謀勇まじき者にて其使者に對面し各御用に於當國遠渡河せられ御苦勞察入は左馬助留守なれは心中知るべうらざといへども秀頼公仰とわれは違背すべうらざされど諸家中の者共妻子をも方より引返け城内掃除申付明後日晝後御引渡すべしと井上加之助を藝州使者に添て三津浦へ遣ひし内記の家老共を集め各のよく城を守られよ我等の仰と兩人の三津浦の敵陣へ夜討すべしといふ堀部黒田等此事甚危しと抑留すといへども内記承引せず都合五百余入引卒して其日申の下刻城を遠渡せり井上加之助の藝州の使者と同連して三津浦に至り突兵に對面し城中家老共の口狀を演れは突兵聞て然らば明後日城を借べしとて井上を返し

其後曾根村上等と評議し城兵の心中不審、明日早天より城下へ押寄せ、動靜を伺ふべしと用意す。かくて加藤内記、佃次郎兵衛等の一里計り馬を馳する所加之助途中にて行合ひ、毛利勢思ひの外小勢よて大將共の漁家を本陣とし、其餘の皆小屋をかけたるといへば、内記次郎兵衛夜を待て三津浦に押寄、漁村の東西より火を放ち、関を作らず矢一筋も射かはず一同に討て入れ、バ毛利勢物の具するひまもなく同士討する者多かりける。宍戸善左衛門勇ましき者あれば、城兵に不意を討れ大に怒り、眞先に立て士卒を下知し、宍戸の城兵荒川甚左衛門を討取、野嶋内匠の井上加之助を討取、佃次郎兵衛大に怒て村上掃部と鎗を合せ、遂に掃部を突伏て首をとる。内記縦横に馳廻り士卒を下知してはげしく討破れば、毛利勢散々に突立てられ、曾根兵庫野嶋内匠も亂軍の中にて討取、宍戸やうく手勢をまどめて引退く。内記次郎兵衛思ふまゝ、勝軍して夜明方に揚貝を吹かせ軍を納め城へ引かへず、宍戸の味方の隊長曾根内匠野嶋村上を始として、軍士若干討れしかば、平岡善兵衛相識と江原(一本窪原)の古壘へ逃來り、藝州へ飛脚を立て援兵を請ふ。加藤内記の黒田九兵衛、佃次郎兵衛を引具して内山より紀山に陣を張て、江原の古壘に籠たる毛利勢と對陣す。九月十九日、宍戸の江原より兵を出し、刈田と近村を放火す。内記

是を見て軍士をすゝめ、嚴しく追立てば、毛利勢の江原を捨て、久留の如來寺に籠籠る。内記、遠間かく追掛て前後をうこみ攻けるに、黒田九兵衛の鉄炮にうたれて討死し、飛松兵助、河合九郎兵衛も討死す。れば内記、人数を引揚てまばらく人馬の息を休めけりかゝる所、西國往來の船人どものいふを聞に十五日、關原上方軍勢惣敗軍となり、秀元も敗走して行衛知れず、東軍引つゝ、大坂へ攻寄せ、元卿存亡如何あらんとき、毛利勢大に騒動す。宍戸善左衛門止とを得ず、平岡善兵衛を頼み、江原山の後をめぐり三津浦へ引返し、湊山に陣取し、彌と上方勢惣敗北の風説さきりなれば、宍戸爰にもたまりうねて早々兵船に取乗、風早の浦より帆をあげて、藝州へ逃歸る。加藤内記かくと知らず、其翌日江原山へ兵をすゝむれば、敵はや一人も残らず逃去りし故、本意なく城へ歸陣せり(大成記家忠日記基業)

黒田如水中津出陣付大友九州下向の事

黒田如水入道、豊前中津に在城せしが、或日城下の町人伊勢屋彌左衛門が願ひにて、其宅へ招かれ、饗應最中大坂の家老栗山四郎左衛門、毛利太兵衛が使に野間源兵衛來り、逆徒蜂起の注進す。入道急ぎ歸城して、家老共を呼寄、今度石田治部やさしくも内府を敵とし、大事を思ひ立、昏暗無

謀の大小名是にかたらのれ關東へ下るよし聞ゆ我思ふ所あれば内府の味方して九州を切從へんと思ふ只今あしうりし城の普請も停廢し早々出陣の用意せよと渡家老共大に驚き城兵の多半甲斐守殿の御供して關東へ下れば城内の以の外無勢なり幸に城内修理も半ら成就せり彌堅固に普請を急ぎ御籠城こそ御尤あれ此窮兵にての御出陣思ひもよらずと諫ければ入道聞て汝等が所理あるに似たれ共此城計り堅固に楯籠りたりとも關東方敗軍せば何の用にうさらん早く敵地へ出陣し關東と手を合する事肝要ありまた城兵不足あれば近國の浪人のさらなり百姓町人出家社人の嫌なく出陣の供せんとおもふ者を召抱へし我年頃無川の浮費を省略したれば金銀の倉庫は満たり是皆箇様の節の備あり少も吝惜べきにあらずとて貝原市兵衛杉原一茶に奉行させ金銀山の如く廣間に積置新參の徒軍川のため分あたふべしと觸渡せば遠近より馳集る諸浪人時日に移さず三千人斗りあり其中に二重に金子を請取者ありしかども如水是をも咎めず家人共への猶更軍裝の金銀願のまゝに授しかば人皆威服せずといふ者あはざるにても大坂にある所の妻子をばいかいせんと入道流石心に思ひのづらひけるに七月廿九日夕暮に如水の内室甲斐守内室兩人とも家老母里太兵衛ひろ

かに大坂より船にのせ中津へ歸參あれば如水喜び大方ならず妻も新婦も久々の辛苦を慰めんと城下にて今様踊を興行し國中男女皆ゆるして見物せしむ又其頃加藤主計頭清正の内室も大木佐渡守護し大坂を出船せしが豊後の敵多ければとて是も豊前中津に着岸す此時供せし梶原助兵衛が一族黒田家に梶原八郎大夫といふ者あれば清正の内室此八郎太夫がもとにやどりをからるゝよし聞えければ入道より使を立て俄の下向さぞ不自由あらんとて衣服調度類を心細かに用意して送り侍女をもあまたそへて肥後熊本迄送らせけりすべて兵馬繁劇の中にも入道悠然として年若の小姓共に甚をうたせ亂舞をさせ見物す當時世に英雄豪傑少からずといへども如水が如きの古人所謂見敵靜見敵眼といへるにたがひず尤卓越といふべし其後如水近邊海邊の要害巡見せんとて中津川より船を浮め豊後國國崎郡富來の城安岐の場等の形勢を船中より熟覽し木付(一本拜築)の城に立より細川の家老松井佐渡有合四郎右衛門に對面し敵寄來らば早々注進すべし我後詰せんと約束し城内巡察し又船に乗て中津に歸城す其頃如水備後の柄と周防の上の關船を出し置諸國の風説を搜らせけるに大友左兵衛督義統大坂の下知をうけ九州へ進發するに既に出船せし由注進す抑大友が家系を

如何といへば右大將頼朝卿の近臣式部大夫親能が子左近將監能直と聞へし童名一法師丸といふ其母鎗倉右大將家に仕へ御寵を蒙りみごもりしを親能たまはりて妻とし後其子生れ給ひしを親能の子とし外祖大友四郎太夫經家の氏を冒して大友と名のる建久四年癸巳豊前豊後の兩國を賜り豊後の臼杵に在城して後代と鎮西の事を司り其子大炊助親秀其次は大炊介頼泰其次は左近將監親時其次は左近將監貞親其次は近江守貞宗實は貞親の弟之其次は刑部少輔氏時其子修理太夫氏續は宮方たりしにより鹿苑院將軍(義滿)より大友の家督は次男修理太夫親世に賜りて九州の探題職に定めらる是より大友が威勢九州をさびりせ奉り其次は中務大輔持直其次持直が弟出羽守親隆其次は氏續が子家つぎて式部大輔親看といふ其次は左京大夫親綱其次は弟豊後守親繁其次備前守親治其次は修理太夫義長其子左近衛少輔兼修理太夫義鑑其子左近衛少將兼左衛門督義統入道宗鑑迄十九代世に九州の總督として鎮西後肥前肥後を割據し日向伊豫半國を抑領し武威を遠近にかゝりし光源院將軍家(義輝)御相伴衆に加へらる大友系圖其子左兵衛督義統入道宗鑑迄十九代世に九州の總督として鎮西の諸大名皆門下に拜趨し威勢肩を並ぶる者あり然るに父宗麟代より天主教へ歸依し神社佛

閣を破却し政務驕恣暴横ありしうば國民多く怨み旗下の諸大名命令を用ひず國中大に擾亂し義統が代に至り豊臣大閥の仰により朝鮮軍に赴しが彼地にて軍事に怠りしとて愆世の舊領没入せられ毛利家に召預られて周防山口に盤居し其子宗五郎義乘(始は義延)徳川家に預けられて武州に盤居せり然るに今度大坂の大老奉行等石田三成が勸めにより大友入道本領安堵の奉書を送り秀家三成等よりて別して義統昔の郎從國人等をかたらひ毛利壹岐守太田飛騨守中川修理太夫等と評讞し九州を平均あるべき旨を下知し其上秀頼公仰とて甲冑百領馬百匹鎗百本鉄砲三百挺白銀三千枚其上玉藥迄送りしうば義統家内再興の時至りと早速に郎等共かりあつめ兵庫の津より出船せり黒田如水入道此事聞どひとしく大友を味方に引付んと家人宇治勘七に其頃大友が舊臣大神(一本蘆屋)大學といふ者中津に居住しければ大學を使者になして大友へ遣ひしたり此兩人九月五日の朝中津の浦より纜をどきいそぎし程に同月七日藝州大島にて大友に行逢て如水が旨趣演達しけるに今度本領安堵し給ふ事大慶に先年宗麟公太閤殿下と和睦の事も如水あつうひし事されば大友我に於て踈慮すべきにあらず今度の一亂幼雅の秀頼公結構あるべきにあらず皆石田等が姦計なる事明白あり既に賢

息義乘關東の御恩に浴せらるるかたゞ天命に應じ御味方有て後榮を期し給ふべきことの事
 之義統書狀を以て如水の懇志を謝し其上某數年毛利家へ預けられ輝元卿の懇志を蒙れ輝
 元卿今度大阪方第一の大將とわれ輝元卿を離れ東國方味方せん事思案に是非究めがたし
 豊後へ着陣の後是より返答すべしとて其使者を返し義統の九月十日未刻に豊後國速見郡
 濱脇浦に着船し國中へ觸流せし昔の普第舊臣等時刻を移さず馳集る者既に四千五百人其中
 にも田原遠江入道紹恩宗像掃部は近年中川家に寄食せし中川よりも鉄砲の者を添て大
 友が加勢に送る吉弘加兵衛統幸は立花宗茂が從弟ゆへ柳川に居住しけるが是も舊主の發向
 を聞て大坂に馳登り義統に對面し大坂方を辭じ東國の御味方になり給へと様々理を盡し諫
 けれども義統承引せず某は關東へ下り義乘御手を引て御家再興を計るべしとて別れし義
 統を見捨ん事心あらずとや思ひけん此時又豊後に來り如水の進めを幸に東國へ御一味有
 て然るべしと諫めしりども宗像掃部都甲兵部等の西國方をすめしりば義統ついに西國方
 に一決し然らば細川が木付の城を攻取て本城と定むべしとに石垣原立石が峯といふ所の
 元祖能直元久年中初て當國へ下りし時居館せし當國一の要害宗麟入道もこゝにて運を開た

る佳例あれバ木付を攻取迄の此所を本陣とせんとして田原紹恩奉行し俄に柵をうがち柵をゆ
 ふさらば一日も早く木付に攻められとて宗像都甲兩大將とし柴田小太郎といふ郷人一揆を
 荷擔し百姓町人を催し九月十一日木付におしよせたり木付に細川留守居松井佐渡康之有
 吉四郎左衛門立行其外中川井口下津坂本杉坂今井などいへる宗徒の剛士待受て防戦す大友
 方の城下を燒拂ひ外郭をせめ破るされども城兵嚴しく防戦し大友方今井惣兵衛平林伊介
 等を討取柴田小太郎高き所にて一揆原を下知して居たりしが有吉四郎左衛門鉄砲を以て楯
 上より二丁計をへたて、打殺せば大友方散らになりて敗走すされども大友方の大軍の事を
 れバ木付より其旨如水方へ注進す如水の中津城を弟黒田甲斐に守らせ高森の城の黒田兵
 庫蔵田の城の衣笠久右衛門馬岳の城の桐山孫兵衛宮崎助七に守らせ千五百餘人を國に留め
 置九月九日今日の吉日あらずと家老其の諫るをも川ひず辰刻中津を出馬し大九原に床机を
 直し陣列を整へ陸路の軍勢都合八千餘人海上の水軍五百人旗本九百餘人と定む此所へ大友
 が方へ使したる宇治勘七大神大學師て如水大友が返答の旨を告る如水然らば義統の敵に決
 したり急ぎ豊後に攻入て大友を虜とせんとして其夜の黒田兵庫が高森の城に一宿し翌十日に

豊後國に進入當國高田城主竹中伊豆守重治が方へ使を送り早々先手に加はるべしといはせたり竹中は輝元増田等廻文を落手せし折うらなれば心中大に疑惑し病中ゆへ出馬ありがたしと答ける如水さらば竹中を攻亡さんと高田に中黒の旗を指向ふ竹中大に恐れ家老不破藏人を如水が本陣に使し様々陳謝し息采女正重次に百騎計を添て如水が加勢に出したり其夜は赤根峠に陣を張り明日は垣見和泉守が富來の城を攻んと軍議の所へ木付城細川が留守居より大友勢木付へ攻寄たりと注進す然らば木付へ加勢を遣いさんと井上九郎右衛門後藤太郎助母里與惣兵衛時枝平太夫久野治右衛門曾我部五右衛門黒田安太夫池田九郎兵衛等に三千計りの兵をろへ木付の援兵に向いせ其身は十一日早天より富來の城に攻かへりしが如水此城取鎮めたる形勢なり急に攻んとせば人数を損ずべしことをすて、早く大友を討亡すべしと母里太兵衛を後殿とし富來の城を巻盡くし十二日熊谷内藏助が安岐の城邊へ陣どる（安政は富來より十三里辰巳にあたる）城内より物見の兵出けれども如水殿に制して手も出さず此城ははやりたる形勢されば明日此地を引拂ふころ城兵出て遮る事あるべしとて栗山四郎左衛門を後殿とさため齋藤五左衛門肥塚利右衛門小林甚右衛門に小姓岡田三四郎畑彌

平次山脇彌七郎本多半三郎すべて五十人計り西本といふ山蔭に伏置十三日早朝に木付の方へ馬を進む當城の主内藏助は濃州大垣へ山降し留守は一族外紀次郎助等籠りしが如水此所を引拂ふと見ければ案の如く次郎助甲士五十人雜兵二百餘人引つれ跡をまたひ討て出る相圖の如く西本の伏兵起りて是を追散らし熊谷次郎助をば小姓岡田三四郎討取其外高名少少うらざ二三丁追討するを見て如水山上より鐘を鳴らし軍を納め今日黒田へ討取る首四十八級中津へおくり高瀬川の岸へ掛並べたり（九州記基業安民記）

石垣原合戦付吉弘討死の事

木付城の援兵に向ひし黒田勢九月十二日暮時に着陣す大友勢はかくとき、城を立石へ引取れば木付城代松井有吉は黒田勢の先鋒と成り十三日早天より立石へ進發せり立石にて、吉弘田原都甲宗像等攻守の評議區々ありしが遂に吉弘が謀にしたがひ石垣原へ押出す此所茫々たる廣野片下りの地にて西へ鶴見山の高山聳へ東へ大海其中に高さ一丈ばかりの石垣土手六七町計りつゞきたり吉弘今朝も義統の前にて最前より某が謀を用ひ給はず大垣方に一味し給へばとても今度御開運うるべうらさ其今日討死と思ひ立し得ば只今御暇乞にいと

て涙を流し宗像都甲并一乃田民部吉良傳右衛門木邊兵部入道玄隊大神賢助清田民部竹田對馬入道一下を始其勢都合三千五百餘人謀を設けて敵をまつ寄手の先鋒松井有吉大友方の旗色不審なりとて備を立て進み兼たり吉弘手勢の敵を引付ん謀なればわざと崩立引退く黒田の一陣時枝平大夫母里與三兵衛是を謀どの知らず勝に乘じ討てりる吉弘よき圖を見て伏兵を起し横合より討り、れば母里も時枝も散り敗れ忽に八十餘人討れ石垣原の北犬の馬場迄逃たりける黒田が二陣久野治左衛門母里時枝が敗走するを見て相備曾我部五左衛門が諫をも用ひず久野の當年十九歳鋭氣盛の少年少しも屈せず中備宗像掃部が備へ突り、り手の下に敵三人突伏勇を振ひけるが宗像が從兵岡部半助久野を突伏首を取る曾我部五左衛門の如水より久野が後見せよと命ぜられ久野に付添出陣せしかば久野を討せて甲斐なしと面をふらず宗像に突てり、り馬上より組で落刺違てぞ死たりける松井有吉兩人の實和寺山の南小山に備たりしが母里時枝も敗走し久野曾我部備も亂れたりと見ければ住右衛門兵衛中村平左衛門等先手とし都甲兵部が備へに突り、り退立るはじめ敗れし黒田勢も追々引返し力取す久野が從兵荒猪軍兵衛大友方の隊長竹田一卜入道を討取都甲兵部も亂軍の中に討死

す松井有吉兩人の敵に一擁付て味方の陣へ引返す黒田の三陣井上九郎右衛門之房野村市右衛門後藤太郎助石垣原の北加來殿山に備へしが敵味方分れて引返すと見て唐冠の兜は鳥毛の棒の指物十文字鎗を手にして井上九郎左衛門真先に進み佩楯を取のけ小手の小はぜをばつしければすはやはげしき戦ひ有べしと其手の士卒勇み進む井上大音聲にて敵は九州に隠あき吉弘あると面を馬を下り鎗の鶴の首の折る、程突戦せずばかなふべからず我についけと馳出す最初敗られし宗像都甲が士卒も吉弘が手に一よ合し井上野村後藤兵と突戦ふ井上が屬兵大野久彌一番に大友が深柄七右衛門が首をとれば其兄大野勘右衛門も小田原又右衛門を討取る大友方吉良傳右衛門苗の縄を先陣に進め勇をふるひしが大村六太夫馬上より突落し首を取る井上後藤の早く兵をまとめ軍を退けて備をたてなをす是を見て吉弘いうさま物馴たる掛引之此上のか、つて雌雄を決せんと井上が陣へ馳り、る井上が人数も必死に成つて戦しが吉弘が猛勢激水の漲るが如くあれ、忽に突立られ半町計り引退く爰に野村市右衛門の十六歳にて朝鮮に渡海し漢南の戦ひに高名し武名を異國に顯へし今年わづかに十九歳猛勇の壯士之吉弘が勢の右の方より手勢を下知し突り、る後藤太郎助もついで懸入に

ぞ吉弘勢散々に成り敗走す吉弘統率我討死の時節ぞと朱柄の鎗をふるい奮戦す井上九郎右衛門とい一年中津に有て國志の交を結びし事故忠内といふ堀をへだて、互に名乗合い双方とも秘術を盡し勇氣を勵し突合し吉弘二三度も井上が胸板を突ども鎧堅くして裏うず井上一喝して突込む十文字の横手に吉弘が兜の忍ひの緒を引うけて兜を引落す流石の吉弘も眼くらみ退うんとする所左の脇より襯の青く見へければ井上すかさず突ければ吉弘が脇腹へ突込んだり猛勇無雙の吉弘も數刻の戦ひに精力勞れ郎等の肩にかゝり引んとす井上大音聲に吉弘うちもらすなど呼はれば後藤太郎助屬兵小栗治右衛門心得たりと退掛け吉弘を突伏て首をさぐる吉弘既に討死すれば敵は彌足を亂し敗走するを井上野村が勢追討し高名軍功わけてかぞへ難し凱歌をとなへて引返す今日大友方に吉弘宗像都甲を初とし竹田一ト木邊玄録吉良傳右衛門柴田治右衛門小田原又右衛門深栖七左衛門攝津角右衛門豊曉彈正山下石菴原田舍人安部左京永富田與右衛門同九郎秋岡式部橋本彌兵衛安部主膳大神劔助瓜畑左京等討死し黒田方へ討取首數五百餘級なり是を石垣原の合戦とて今の世迄も其名をのこす所とぞ又吉弘といふは大友譜第の家老鎮信が嫡子義勇隠れあき者なりとて土人其骸

を石垣原に葬り其塚今に存せり近郷にて瘧病をなやむ者いければ神靈驗ありとぞ西國武士の後迄も其塚の前を過る時は必下馬するとぞ聞へけるさても黒田如水入道十三日の朝安岐を立て立石より三里こなた頸城といふ所迄着陣ありし所へ石垣原より汗進のため田代彦助馳來り一演説す如水大に井上野村等が戦功を賞し久野曾我部が戦死を哀み此上の我やがて其地へ着陣する迄は備を堅固にして卒忽に人數を出すべうらずとて彦助を返しけり

(九州記)

正校 三河後風土記卷第四十二

大友義統就捨付安岐富來の事

黒田如水入道の老練の武者を以て近國を切靡け實相寺山へ着陣し井上九郎右衛門以下軍功を稱美し九郎右衛門に刀を授け野村市右衛門に馬をわたへ其外高名の輩には感狀を賜ひ細川の家人迄も取功の徒に感狀を授け松井有吉が舉動を厚く褒賞し討死の者には落涙して吊ければ諸軍且感じ且悦び勇氣日頃に十倍す又石垣原にて討取首共を別府村の畠の邊に二段に掛並べたり諸軍此勢に乗じ立石に押寄せ大友義統を討果さんと勇まじしに如水是を抑留し只今立石を攻破り大友を誅せんは飼鳥をしめ殺すよりも安しといへども大友が家舊好よしとせず是を殺すに忍びず母里太兵衛を立石に遣ひし此上の立石を一もみに攻亡さん事いと安しといへ共流石舊好忘れがたく降参わらば如水が軍功よかへて一命を承受べしといひせけるに義統の吉弘宗像等の勇士皆討せ今の頼みなき身と成りし故降参せんと一決せり然るに九月十四日早天より立石へ軍勢を進め水陸の軍を以て三面より押寄陣の聲山海を震動す義統大に恐れ母里太兵衛が陣へ使者を出し降参を請により如水下知を傳へ其夕暮

義統入道近臣十人計にて母里が陣へ降人に出ければ如水是を下野九兵衛に預け中津へ遣りし押籠置一亂靜謐後引具して大坂へ参りければ義統の常陸の國へ配流せられ其子左兵衛督義乗は武州牛山に配流せられ父子配所にてうせたり（義乗が弟右京正昭三男近江守義孝召出さる今高家因幡守義方が祖之爲に田原紹恩の大友家没落以後中川修理大夫に養われ豊後の岡の城にありしが今度大友家再興を悦び岡城より立石に來り義統を助け戦功を勵まんと思ひしに義統わいさくも降参せんと決したれば紹恩某は中川が恩を請たれば今より岡城へ立歸り相應の志を顯はさんと暇乞して立石の後の山傳に岡の城へぞ歸りける是より先細川の松井有吉兩人より大友勢木付の城を攻圍よし肥後熊本へも注進しければ加藤主計頭清正木付の城を救はんと言やがて熊本を出馬したりと聞へければ如水より石垣原の戦味方勝利のよし清正へ注進す此使肥州小國まで清正に告れば清正よりも返書を送り如水の軍功を稱しけり如水は九月十六日實相寺山を發し安岐の城をかこみ十七日より仕寄をつけ龜甲といふ物に乗て石垣を穿ち所々火矢大筒を仕向け柄櫓をわけ征大鼓を鳴らし攻立れば森孫右衛門同孫六郎かなはじとや思ひけん反忠して寄手を引入んと母里太兵衛が陣へ内通す如水不

義の降参はうくべうらずとて返答もせず別に馬杉喜右衛門を使者とし城の守將熊谷外記も申させけるは近國に後詰すべき味方も見へず城内反忠の者もあればとても籠城かふるべうらず此城早く明渡さば城中の男女一人も誅すべからずと有ければ外記此上は我一人切腹し城を明渡しやべし城中男女の命を助け給はるべしと返答す如水聞て外記切腹するに及ばず城中の男女を心まうせに落し資財をも運び出し城を渡べしと遣りしければ外記始め深く其恩を感じ城兵蘇生の心地して城を渡す城主熊谷内藏助も濃州大垣にて討れしと聞へしうば外記も後年筑紫へ下りて黒田家に仕へしとぞ聞へたり扱如水安岐の城には黒田五郎右衛門手塚孫太夫貝原市兵衛をどめ十九日城兵の降参せし者を先手に加へ垣見和泉守が富來の城へ發向す二十三日より富來の城を攻うこむ城主和泉守は濃州大垣にあり城には兄垣見利右衛門并和泉守が妻の兄藤井九右衛門月成平右衛門殿しく城を守りける（九州安民記基業）

黒田嶋津船軍付富來落城の事

黒田如水の富來の城の陣の方小山に本陣を定め黒田兵庫同圖書母里太兵衛等を先手とし

城を攻かこむ富來の浦には兼て召拘置し伊豫讃岐の船軍に馴たる海賊に命じ番船數十艘懸置晝夜海上を守らせたり其頃嶋津義弘入道の内室并息女に伊集院左京有川助兵衛を添て本國へ下すとて九月廿六日申刻に防州上の關嶋尻にて順風を待けるに夜半風直りしとて船を漕出しける頃しも廿六夜月はなく風は次第に吹つものり薩摩船とも八重の摺合に吹ちらされ黒田夕番船の辨火を先船の立火と見誤り富來の浦近く漕寄する今宵黒田方番船の大將は松本吉右衛門宮崎嶋之助村上三郎右衛門石川十左衛門(其業勝吉)等なりしが疑もなき敵船と見ければ逃すまじと追かくる伊集院有川心得て棹の先に笠をつけて出し櫓の鏡に降参と書て流しけれども黒田方にては是にもかまはず鉄炮を打掛る薩摩船は詮方なく力にまかせ漕板んどすれども薩摩船は大船番船は小船ゆへ忽ち乗付鉄炮を打かけく攻たり其間に夜は仄々と明渡る嶋津方今は逃れぬ所と思ひ伊集院有川嚴しく下知しかさにかへり突立れば小船の黒田勢突立られ三十八人討れ既に舟を乗戻さんとす時黒田方海賊庄林七兵衛船に立あがり黒田家に野嶋の輩ある事は世に隠れあしもし此舟を取損じ本の藩へ引かへるば野嶋一黨の名を失ふべし我等は此所仕損じなば生て歸るべうらすと諸勢を勵まし争戦せ

しが庄林火攻の術を思ひ出し管に火を付嶋津方船へ頭に入れば其火船中器物に燃付て船は皆もへ上る伊集院有川を初め船中の兵士必死とありて働ども或はうたれ或は焼死し三百餘人一人ものこらず失にけり女童部は髪毛衣服に燃付ば泣きけぶ事波風にひいき哀といふもあろかなりさすが義弘内室は船屋形の中に端座して少しも騒がず船諸どもに焼焦れ千丈の底の藻屑と沈しは無慙なりし事ども之卯の下刻豊後姫路邊にて戦始め申刻佐賀の關にて事終る如水此洋進をき女子婦人の船を焼討せし事不仁とて機嫌を損じけれども戦功の徒へ恩賞を施し又生取の婦人八人水主十三人に衣服食物をあたへ薩州へ送り遣ひしたり又同じ廿六日の夜半富來城中より藤井九右衛門を大將として黒田兵庫が陣へ夜討を懸志に雙方烈しく戦ひ寄手も死傷多うりしと兵庫烈しく下知し城兵の跡を取切んとせしうべ九左衛門早手の手をまよめ城に入て門を閉たり(夜討の事基業にあり九州記に見へず)廿七日城兵塙上へのぼり火矢を射て竹束を焼立る寄手鉄炮をもつて其城兵を打落さんとすれ共どいかず其時如水田代彦助に彼兵を打落せと命ず彦助畏りいどて塙の矢切を打ちする程に見込て打けるにあやまたず其玉敵の眉間にあたり塙の下に打落す其後寄

手懸に鉄炮をつるべて外郭の塀を打破れば城兵たまりかねて二九へつぼみ鉄炮を打出す其時如水の近習吉田六郎太夫如水を諫て城兵突て出ん物色之御具足を召るべきにやといふ如水いや〜我等が物の具をする時節にあらざるとて具足も着せず猶も用ひず悠然として見物す其頃又先手の黒田兵庫同伯耆守此城攻へ忽に落べしと見つる諸陣へも諜し合せず兩人の手勢計りにて深夜に城へ忍びよる城北の番兵も少あかりしうに難なく塀一重乗破りしが本丸の兵かくと見付て續松ともしつれ大勢走り來り鉄炮激しく打掛其跡よりおめきさけんて突立れば兵庫伯耆が人数塀より下に追落さる此合戦の聲本陣に聞へしかば兵庫伯耆が鹿忽ち如大水大に怒り兩人を召戒しめ其後の陣をかたくして守りけるに城主も防戦の術盡て力を落したり然るに十月二日の夜城主垣見和泉守濃州大垣にて討れたる事を注進のため來る飛脚の乗たる船を番船とも取あさへ又垣見が右筆江良新右衛門といふもの大垣より逃來りしをも生取しかば彼等が使者をうへて如水越中へ申遣りしけるに今其城守りて詮なし城内男女助命せん事いふ迄もあし如水に奉公せんと思ふ者の召抱へしと有ければ垣見利右衛門并藤井九右衛門を始め城中男女悉く恩を謝して城を出降參し九右衛門月成忠左衛門

始皆々如水の先手に加へる如水の益大軍と成り富來に上原新左衛門を留め守らせ栗山四郎左衛門并母里與惣兵衛喜多村甚右衛門菅七郎右衛門と毛利民部大輔が領地（九州記毛利伊勢守高政）日高郡隈の城球珠那角牟神兩城を攻しむ栗山謀略を以て守將毛利隼人降參して兩城を明渡しければ母里與惣兵衛菅七郎右衛門は兩城を守らせ栗山の人数をまどめ富來へ歸參す（黒田兵庫城攻の事九州記にありて基業にの見へず）如水の夫より毛利壹岐守が豊前小倉城を攻取んと西をさして旗をすゝめける（九州記安民記基業）

加藤清正宇土城攻の事

肥後國熊本の城主加藤主計頭清正の兼々石田小西等が邪曲を憎む事あれば關東方の御味方せんとて黒田如水と諜し合せ關東へも明石茂兵衛谷崎權太夫等を以て其旨を上げる茂兵衛の途中にて見咎られ切腹し權太夫の御陣に參り西國の事共々上て御威を蒙りき然るに清正の小木土佐が計らひにて大坂に在し内室も歸國せられしかば大に悦び然らば近日に出陣し小西が宇土城を攻取んと軍議する所に細川が木付城より加勢を頼み來りしかば清正聞て我等近う出馬せんとす先木付の加勢に二三宅喜藏を遣はすべしとて喜藏に木付に罷越松井有吉

よ合力すべしと命じければ某御馬前にて相應の心操を顯のしや度し木付への他人を遣のされ下さるべしと願ひたり清正以の外氣色を損じ喜藏に沙汰の限り之急ぎ當國を立去るべしと勘當し木付加勢の坂川忠兵衛日下與助に命じ鉄炮五百挺づゝ雜兵二百人添て遣のし清正の黒田如水に力を合せんと九月十六日小國迄出馬ありし所如水方より大友義統既に生取れば常表の小城ども主計頭殿御合力を待に及ばず近日に一踏み潰し筑後へ進發せんと存し其節主計頭殿も御出馬給へるべしと注進せしうば清正肥後の益城郡木山峠にて引返しけるが小西播津守の逆徒隨一なれば彼が居城宇土を攻取んと木山より三里をへて九月廿日宇土の城もむらひ清正大臼山に陣取先手加藤百助吉村橋左衛門をして宇土城下鹽瀬口石瀬口にむかりしむ播津守行長が留守の城代小西隼人兼て期したる事あれば町口の木戸を閉鎖火を燒て待懸しに吉村が手の若者ども翌曉丑刻より石瀬の町口へ攻付て難なく町口を攻破れば城兵三町目に引取水戸を固めしが城兵嶋津又助老功の者にて左右の町屋へ鉄砲を打掛しうば軒下に付たる寄手數十人忽に打殺さる又跡の町屋へ火を掛しうば城兵此あかりを目當に鉄砲を打せければあだ矢のさらになかりけり寄手和田備中前野助兵衛蘆野久太夫

右田嶋太夫是にも屈せず眞先に一文字に馳掛りしが備中鉄砲にあたり淺手あれども郎等の肩にかゝり退けば前野蘆野等も皆町口へ引返す鹽田口へは加藤百助向しが城中隨一の勇士南條伯耆入道玄録(伯州羽衣城主西前守家勝が子其臣山田越中護にて秀吉公小西に預給ふ)城兵の妻子を城中に取入しめ其身其跡より福西九郎左衛門一人具し閑と引取たり爰に先日清正の勘氣を蒙りたる三宅喜藏の庄林隼人を頼みて手に屬し出陣しけるが此城攻に天晴高名し清正の機嫌を直さんと心掛茜三本志あへの指物にて掘田口の堤を馳過んとして玄録に行合て究竟の敵と思ひ詞をかけ大身の鎧にて玄録が頬先を突て肩を突落す玄録是を事どもせず其鎧に取付引合しが終に鎧を捨て組合たり是を見て玄録を討せしと城兵數十人馳出る清正も本陣より此跡を見茜三本志あへの正しく喜藏なり彼討すあど下知の下より庄田隼人飯田角兵衛等五六百人引つれて馳寄るを見て玄録寄手付入にするうと覺束あく思ひ速に三宅と物分れして退去し城門を閉たり寄手の城下の町屋を燒拂ひ城近く攻寄たり或夜城兵風雨に乗じ加藤百助が陣へ夜討をうく木付の加勢に赴き坂川忠兵衛日下與助も木付城は天友勢既に退散せし故來て百助が陣に有しうば伊東新五左衛門井上彦右衛門田中兵助佐

久間角助等と共に一番に馳付て勇をふるへば城兵竹内茂兵衛を擧て引退く其後又風雨の夜城兵一人竹東際を過る者あり寄手足輕見付組伏て生取たり清正聞て其者何ぞ取落したる物いなかりしめと尋らる此者生取れし時傍に投捨たる竹杖ありしと答ふ清正其竹杖を取寄て割らせ見ければ小西隼人より八代城代小西若狭方へ後詰を頼み送る書狀あり清正大に悦び其書狀を元の如く封じ心きたる里民を雇ひ宇土の城より忍びの使に仕立其書狀をもたせ八代へ遣はしければ八代にて小西若狭其狀披見する所まがふべくもなき隼人が手跡故少しも疑がらず其使へ後詰の日限時刻まで委細申合て歸しけり清正大に悦び吉村左近相田六左衛門に千餘人をそへ約束の日時を違はず小川邊まで差向て八代勢の來るを待りけしむ八代にわかゝる事どの夢にも知らねば高瀬半左衛門を將とし宇土後詰の人数約を違はず馳來る所を吉村相田待設たるとなれば鉄炮を打掛く一文字に突てりゝる八代勢思ひもよらず大に驚き備四度路に追立られ散らになり八代へ逃歸る相田權六後れ馳に馳來り跡より追掛殿後の武者討て首を取る今日八代勢討る者三十八人とぞ聞へける兎角する程は十月初旬に關原西軍大敗にて行長も生取と成たると聞へたれば寄手矢文を射させ城兵の降參を

進めしむとも小西隼人寄手の謀略あらんと疑て返答もせず其後行長が家人關原より本國へ逃歸りしを生取城中へ遣はし實事を告しうべ城兵すべて力を落し防戦の術も盡果て隼人若狭兩人は切腹し宇土八代兩城明渡すべし城内の者共の清正公御家人にあし下さるべしとや送る清正大に感じ城兵に於ての壹人も残さず清正家人として扶助すべし隼人若狭の切腹すべしと返答す兩人やがて城を渡せば南條玄孫以下の勇士の清正みま家人とあし大成記に南條の生取とするの誤へ(宇土城に川藤與左衛門並川金右衛門を止め八代城に吉村權右衛門堤權右衛門を留め置清正は熊本城に歸陣し戦功の軍士に恩賞を行ふ其中にも飯田角兵衛に千石加増し三宅喜藏も勘氣をゆるさるのみあらず本知千石に千石加増し角左衛門と改む此兩人加藤家の兩角として武名を西海にうやうしたり(九州記基業)案ずるに清正此一亂の始大坂に使を出し大和國一圓に賜はらば大坂の味方せんゆたりしを毛利輝元長東増田等ゆるさうりしうべ清正關東へ一味の志を決せりと大成記并毛利家記等に載ると雖ども是のひとへに英雄の本色を失ふ物之成績等にしるす如く清正平生石田小西等が姦邪を憎し故始より關東の御味方せし者なるべし又原審に薩州よ

り宇土の加勢来りしを清正是を討て相田權兵衛其隊長本御能登を討取事を志す清正
年譜并關原始末記にも此説ありといへども八代加勢を誤り傳へし薩州勢佐渡の城を
襲ひしといふも文祿の頃梅北が事を誤りしなり今基業成績并九州記の説に従ふ

鍋嶋本領安堵付鍋嶋立花江上合戦の事

肥前國佐賀城主鍋嶋加賀守南茂の神君上杉御退治として東國へ御發向ありと聞へければ息
信濃守勝茂をして軍勢差添馳下らしむる所石田三成近江國愛知郡邊に押留め大坂の奉行等
より書状を送り安國寺も来り秀頼公仰ありとてすめしかば大坂の輩に一味し此所より引
返し西軍の先陣して伏見城伊勢國安濃津城を攻落し同國松坂の城を攻りこむ父直茂本國に
有てかくと聞下村左馬介を使とし凡今度の事皆三成等が姦計に我兼て内府と盟誓せし事あ
りまへて東國に向ひ弓を引事有べうらずと教訓す勝茂時に廿一歳我年若くて逆徒の姦計
に陥りたりと後悔し甲斐彌左衛門といふ家人を内へ神君御陣に參らせ陳謝す又久納市右衛
門といふ家人黒田長政にたより様う前罪を謝したり長政又井伊直政といかり此よしかくと
神君直茂と約し給ふ事ありいかで其約に違ひんとて速に勝茂が罪ゆるされ早く本國に

下り父と共に柳川の城攻よと仰らる(藩譜)勝茂が父直茂が神君と絶奉りしといふは先に太
閩薨去後大坂の奉行等神君を失ひ奉らんと計り世上物騒ろりし頃直茂に於ては無二の御
味方せんと御館に參上す此時今より後直茂が早く死せんにぬ息信濃守一向に御慈育を蒙る
べしむし又直茂御跡に留りあは黄門の御事よろしく補佐し進らせんと誓書を奉りし故之と
ぞ聞へける筑後國柳川城主花立左近將監宗茂の七月十五日大坂の奉行等が廻文到來しけれ
ば我の年頃太閤御恩を蒙る事山海もなほたどへをどるべうらず輝元卿ちなみも捨がたくと
て家の老臣立花賢賀入道が諫も聞入ず二千五百人従へ柳川へ出馬し同國久留米の城主毛利
侍従秀包(季元父)と同じく七月下旬大坂に至り輝元増田等下知を受け天津の城を攻落し志
ばらく人馬を休息し關原へ出陣せんとしたる所關原一日の戦に西軍皆敗れしと聞へければ
宗茂も大津より引返し九月十六日京都三條御幸町に至り木下肥後守家貞上立賣の高臺院と
の(秀吉公政所)御所を守護して有しうば使を以て其元の定て高臺院殿守護して大坂へ下向
せらるべし然らば某も御供せんと申遣ひしけれども家貞もとより關東へ志をよせければ貴
殿先大坂へ下らるべし我の跡より下向せんと返答へ宗茂扱ひ此人頼むに足らずと思ひ大

坂へ下り天満邊に備を立て輝元長盛へ使を立て此所御籠城のんにも某も一方を承はるべくいど中遣のす輝元長盛の此方相談して跡より兎も角も返答せんとすて使を返す宗茂打笑ひ此人の覺悟にて東軍に敵せんと思ひもよらず我等の本國へ引返し討手を待て討死せんといへば家老共聞て大岡の御恩も輝元卿御ちなみも是迄之此上の一向關東へ罪を謝せられ内府の御宥免を御願有て御家を長く保たせ給ひ御尤にいと諫るにぞ宗茂も理りに伏し薦野半左衛門を使として御陣に參らせ前非を後悔し陳謝せしめ其身の大坂より老母采雲院をいざあひ九月十七日大坂を出船し廿一日筑前遠賀郡の若松へ着船し宗像郡赤間街道へり香椎浦より名島の大橋へり箱崎の松原へ山席田郡より宰府街道へすみ神代の渡を越へ府中に入時柳川表より迎の者數十人來り廿三日黄昏柳川に歸城す毛利侍從秀包の大坂にて宗茂關東へ降參の事を相談せしに我等の輝元次第にせんとて大坂に留りたりかくて鍋島勝茂の御宥免を蒙り本領安堵の謝恩に柳川久留米兩城を攻取て軍忠を顯のさんと十月九日筑後川安民の渡りを越たりやがて大善寺原へ押出し先久留米の城を攻落し柳川へ發向せんとぞ聞へける久留米の城に秀包出陣の時家老桂民部にす置けるの万一方軍敗北に及

び敵當城に押寄ん時に黒田如水の年頃の契り淺うらず彼入道が向ひたらば城を渡し妻子の入道の心に任すべしよも情あくの振まふべうらずも又他人向ひあば妻子の刺殺し汝等の城を枕に討死すべしとありしに今度鍋島が勢向ふと聞桂民部の秀包内室に向ひ我々の君のため防戦して骸を當城に曝しすべくい北方始御方々に某が一左右次第御自害有べしとすければ内室を始め稚子女童部等の泣くも最期を今やくと待居たり其中に高良山の方に黒田の旗見ゆると聞て城内の男女蘇生せし心地して悦事限る如く如水より鍋島が方へ使をたて城攻をといめ城中への黒田圖書を使し其城明渡すべしと中遣のす桂民部兼て主人秀包のす置たるとされば早速に城を明渡し内室稚子等いざなひ民部の肥前田代の方へぞ退ける加藤清正よりも和田備中を使としこの隙をす入られしうば城をば圖書備中請取て兩人守りけり柳川に筑後の江上八院城島榎津まで鍋島既に着陣す黒田加藤兩勢もやがて當地へ發向すると聞へければ立花宗茂家老を集め敵を領内へ入たてし道雪紹運以來の武名を水の泡とすべし明日江上表へ發向し鍋島と有無の一戦をいどむべしと有しに立花賢賀始家老共すけるの仰御尤にいへども既に大坂より薦野半左衛門を御使として内府へ御陳謝有る

から御自身御山馬あらん事然るべうらざ御人數計り差出され一戦をとげんに鍋島が手並左のみ恐るゝに足らず後日内府御咎あらんに家中の若者共卒忽の働と陳謝し給ひ後難もあるべうらずと陳ければ宗茂も尤ありとて十月十九日立花吉右衛門采地城島邊敵寄たりと聞しかば榎津邊まで兵を出せば鍋島方一万四五千の大軍にて叩へたり吉右衛門二丁ばかり兵を進めて鉄炮をうたせけるに鍋島勢もおおしく進んで打鉄炮に吉右衛門左の腕をうたせけれども浅手ゆへ少しも屈せず柳川よりも小野和泉立花右衛門太夫新田平右衛門立花三太夫等千餘人にて打て出し日既に暮りければ吉右衛門和泉下知して軍をまどめて柳川城へ引返す今日寄手廿七人討取たり翌廿日の未明より小野和泉立花右衛門太夫新田平右衛門立花三太夫天島左助千三百餘人鉄炮頭安附五郎右衛門石松安兵衛奈良右京千手六之允井出與次兵衛等を先手とし江上表へ押出す立花吉右衛門の黒田勢をおさへんが爲三百餘人にて水田口へ發向せり和泉が與力松浪小源和泉が口狀と偽り先手へ命を傳へしかば安原石松が手に忍ぶ組子を操出し鍋島が先手へ突てりる立花三太夫味方におくれたりと怒て三備迄突破をば鍋島方一の橋より二三の橋迄追立られ中村勘兵衛森彌七牟田外助矢加部堤等討

死す三太夫勝に乗じ五反田に叩へば鍋島七左衛門が備に突てかゝるを鍋島勢引包て突落す此間鍋島方後藤左衛門同善次郎諫早神代等直茂の下知をうけ鐘江を渡り八院村の西より鉄炮烈しく打掛て突てりれば安東石松奈良并寶珠山主計三池太郎左衛門榎村三右衛門等の柳川勢多く討れたり立花右衛門大夫後陣に叩へけるが横合の敵を追崩せと大音に呼り矢嶋左助新田平右衛門と一所に敵陣へ割て入敵四備を三町計り突崩しげれども跡を取切られ三人共討死すかゝりしうば鍋島勢の勝に乗じ小野和泉が陣へ溢れりる和泉無雙の勇士といへども左の乳の下を鉄炮に打貫れ股にも矢疵を負て進退爰にきりまる所に水田口に向ひたる立花吉右衛門此所に黒田が旗も見へず江上の方の味方破れたりと聞いざ味方を救ひんと三百餘人従へてもみにもんで江上の北より眞黒にありて馳り入り鉄炮を打ちけ横筋進に突てりれば勝ほこりたる鍋島勢思ひもよらず辟易し道を開て立退く吉右衛門の和泉を救ひ出し殘兵をまどめ引退んとする所鍋島の大勢故堀を隔て鉄炮を雨霰の如く打かくる此時後藤善次郎打せたる鉄炮に吉右衛門胸當を打ぬりれ落馬しけるを安藤惣右衛門(基業河部半内)迄肩に掛けて柳川引とる今日吉右衛門なかりせば和泉も危き所を救出せしのみな

らす大敵四五町追ひちらし味方を引とらせたる勇猛を感せぬ者こそなかりける（九州記基業）

香春小倉柳川山下開城付立花始末の事

黒田如水の安岐富來角牟禮隈等の城に思ひの儘に攻抜て豊後豊前の國へ進發し十月四日筑後へ馬を進んど中津の町を通行しながら居城へも立よらず妻子にも對面せず廣澤山に野陣し翌日の豊前の香春の城へ五千餘人にて攻寄たり此所毛利壹岐守勝信が家老毛利九左衛門が子吉十郎守りける如水居城下を過かから妻子にも對面せずして野陣して翌日早天打立けるが古に謂三度其門を過れども入らずといへる大岡の聖徳にひとしき舉動義經義貞にの違にまされりと世上おしあへて感稱せぬ者なく毛利勝信の貪吝の入にて家老九左衛門伏見城にて討死し其子吉十郎十七歳あるよ父が家督を授けず我末子に九左衛門の家を繼せんとい計りし故郎等みな怨み吉十郎も郎等も早速如水に降参し先手に加わり小倉へ押寄る毛利壹岐守勝信父子の小倉に籠城しけれども勝信のねに聚斂の政を専とし財寶を積置て人を惠まず士怒り民怨み城を守る事を得ず如水に降参し勝信父子小倉の濱より小舟に棹さし京

の方へ過ぎ建仁寺に盤居せしが加藤左馬之助あがらに愁訴しければ勝信父子助命せられ山内對馬守に預らる後年勝信の病死し其子豊前守勝永元和の亂に大坂へ籠城して討死せり如水の同月七日筑前嘉摩郡八町坂をこへ甘木に宿陣す金吾實門より種々響應せらる此頃舍弟圖書をバ久留米に遣ひし鍋島勢と毛利侍従が城兵と和睦を扱ひせ其身の筑後三瀬郡藤山に數日滯留して同月廿日柳川より二里水田迄着陣すれば加藤清正も宇土城を攻取是も筑後を治めんと柳川より二里こな九瀬高村へ着陣し如水と相議し立花賢賀をまねき宗茂に城を渡すべく諫べしとぞ中合ける廿一日鍋島が大軍にの昨日立花が勇士數多討取今日の柳川へ押つめ城を攻落せと勇み進んで攻寄る所へ如水より使を以て早く先手を引備られよとすいめしうが鍋島も先手を大善寺へ引入たりかくて如水清正の賢賀に宗茂先日内府へ降参せられし事なれば早く城を明渡し我と同心く薩州へ攻入て軍功を勵まるべし内府御前の我等兩人よろしく申上べしと説諭しければ賢賀大に悦立歸り宗茂に其旨を説て諫る所へ薦野半左衛門も大坂より歸り内府御寛宥の御返答を頒れば宗茂も同心し嶋津が賢父紹運の仇なり先手に加わり幸に薩州へ發向せんと近臣五六人具して廿四日の夕方清正の陣所に来

れば清正大に悦び如水鍋嶋へも其旨告て宗茂をバ清正ガ領地へ引取去ららく留め置城にハ
 加藤美作を入て守らせ夫より同國下妻郡山下城へ押寄て如水より使者を以て城主筑紫上野
 介廣門にも立花と同じく城を渡し薩州の先手へ加へるべしと説諭す清正よりも同じく送
 る筑紫のやがて城を渡し刺髪して夢菴と號す城にハ加藤百助を入れて守らせ夢菴の熊本へ
 引取養置し其子主水信門ハ關東へ召出され御家人に召加へらるかくて清正如水ハ鍋嶋
 立花を引具し嶋津を攻んと肥後薩摩の境佐敷水股まで軍勢を進めし所大坂より嶋津龍伯既
 に降參せし上の薩州進發に及ばず早大坂表へ參るべしと御教書を下されしハ清正如水
 を始め皆水股より引返す立花宗茂ハ清正千人扶持を授け懇にいたりしが其後宗茂近
 臣十人計り召具し江戸高田寶祥寺に來り彌御惠を仰ぎしハ其義勇をわかれみ給ひやが
 て奥州棚倉にて一万石賜りしが台徳公御代に齋領柳川十三万二千二百石下され大猷公御代
 迄もあがらへ立花立齋入道と聞へ子孫長く國家に浴すこれまうしなから宗茂義勇深くたし
 なみ亡故ならん(九州記安民記基業)

中川伊藤歸順付如水進退全節の事

豊後國竹田岡城主中川修理太夫秀成ハ宇喜多毛利等に一味して黒田如水加藤清正より諫を
 も用ひず池田輝政中川とゆりあるゆへ關原表にて西軍打負て宇喜多石田等生擒られ誅に
 伏し毛利既に降參しぬ速に關東へ御忠節の色を立られずバあしうりなんと説諭すれば中
 川秀成も其詞にしたがひ九月廿八日岡の城を出馬し太田飛騨守政信(九州記政元安民記一
 吉)ガ同國臼杵城を攻取て先罪を贖へんと同晦日臼杵の町家を攻破る然れ共此城堅固され
 ば容易に破りがたく先城下に陣を取る此頃田原紹恩ハ大友既に黒田へ降參せしハ立石を
 立去て岡城へ歸らんとする所に中川ガ家人中川平右衛門古田喜太郎(成績甲斐)五右衛
 門柴屋了加其子勘兵衛等伏見より下るに行合い佐賀の關にて相談し幸同道して岡へ歸ら
 ず直に臼杵の寄手に加らんと其夜ハ關權現の社内に陣取けるに中川ガ兵無類の者多く神明
 をも畏れず社壇にて酒肉を取散らし狼藉限りあかりしが夜中俄に怪風吹おこり社壇より火
 燃出境内一圓に灰燼となりぬ社人郷民等大に怒り其由臼杵へ注進すれば太田政信甚憤り
 それ追立よと久徳勘馬山田三左衛門小鹽源内橋本傳十郎に鉄炮足輕ろへて佐賀へむかひし
 むかくとも知らず田原紹恩中川平右衛門等の佐志生降きて來かゝる所郷人共正岡寺三丸山

に屯し佐義長鼻にて嚴しく鉄炮を打かくる平右衛門是を事どもせず郷人どもを追拂ひく
 進み行所に佐志生村の林中より太田の伏兵あこり神主作之亟眞先うけ鉄炮を打くる中川
 勢の引返し本道を下浦へ退るんとする所有屋畔より郷人蜂の如く起り鉄炮を打くる臼杵
 よりの中村太郎左衛門三百餘人久徳山田を援けんと横合より討うる中川勢散々に討あさ
 れ古田喜太郎の鹿嶋平右衛門にうたれ萱野五右衛門の姫野清助に討れ其外牧野勘左衛門を
 始め中川勢三十餘人討死す臼杵勢のいよく勝に乗じ中川平右衛門に討てかゝる平右衛門
 もとより勇士なれば士卒を下知し勵むく戦て臼杵勢を二度まで切崩すされども臼杵勢の次
 第にかさみ中川勢の追う残り少あれば流石の平右衛門も大勢に取こめられて討死し神主
 作之亟其首を取る田原紹恩も殘兵をまどめ二三十人計にて小松原に息を休め居たるを中村
 太郎左衛門士卒に下知し打てかゝる紹恩今の逃れぬ所と志を決し大勢を迎討て勇戦し其身
 數ヶ所の深手負終に中村太郎左衛門が爲に首を得られたり柴屋丁加中尾宗悦も討死し赤尾
 掃部も深手負其外二百餘人悉く討れ臼杵勢も橋本傳十郎始め百六十餘人討れたり久徳山田
 等の討取し敵の首を臼杵城へ送りければ太田飛騨守感悅斜ならず此勢に乗じ近日に中川勢

を追散さんと用意をさす佐賀の戦に討もらされし中川が奴僕二人岡崎へ歸りかくと告けれ
 ば中川が留守の家老ども早速其旨中川秀成が臼杵の陣へ注進す秀成は頼みに思ふ郎等共若
 干太田がために討れしと聞大に怒り然らば近日此城攻落し怨を報せんと謀をめぐらすとい
 へども此城の海中より湧出したるが如き天險の要害なれば力攻に攻落し難くかゝる所へ黒
 田如水富來より舍弟兵庫を使者とし太田が方へ遣ひしける關原西軍皆敗れ秀家三成皆
 生取と成りぬ今の其城雖が爲に守り給ひん速に城を渡し後築を期せらるべきと申送る城
 中にも石田方敗軍の事追々聞ゆれば力を失ひ城兵多半落失る飛騨守も今の詮方なく寄手
 の陣へ使者を出し味方惣敗軍のうへの我等一人孤城を守るべきにあらず黒田如水公へ此城
 御渡し申度いと有ければ中川より其旨如水へ申送る如水此頃までの富來に在陣せしうば舍
 弟兵庫を以て其城請取に遣ひしける政信此城を中川に渡さば世上にて飛騨こそ修理のため
 に城攻取られたれど評せられん事遺恨あり當世老宿の名將如水公に渡さん本望ありとて
 兵庫に其城を渡し政信の城中男女を引つれ船にて退去せしが後に朝鮮へ漂泊せしといふ
 城もやさて黒田兵庫白杵城を請取て中川へ引渡す府内の城代早川右衛門も人質を出し如水

へ降参すれば其外大友に與力せんとて所々に立籠りたる國人共皆跡をくらまし逃散たり日向國依肥城主伊東豊後守祐岳大坂より來りしが神君會津御發向のよし聞て其の本國の兵を召のぼせ御跡より馳下るべきよし井伊直政につきて予ける神君御感有て御書を下されし程なく上方の逆徒蜂記も其身も又病にふしぬ西國にての黒田如水一人關東の御味方と知りければひそりに如水の方へ使を立て志の程を顯はしはる如水聞て和殿が分際にて大坂に於て軍起す事然るべうらずた日本國に下て軍せらるべしと答たり然るに祐岳病ひや、重く心にまうせぬば左京祐慶(後に修理大夫)僅に十一歳なるに家老共をそへて國へ歸し如水が家人宮川半右衛門を請て軍監とし稻津掃部を大將とし九月晦日高橋右近大夫元種が同國宮崎の城をかこむ元種は濃州に出陣し留守の近藤(家忠日記椎藤其業椎藤)平左衛門其子長左衛門一男八右衛門殿しく防戦せしかども伊東が郎等荒武伊右衛門岩切四郎左衛門四本與左衛門等勇を勵まし攻立て終に近藤父子始二百餘人が首切て其城攻落し十月朔日島津中務大輔豊久が佐土原の城を攻其下種佐倉岡高岡絞合の地にて島津が大軍とた、かひ終に一度の不覺もなく其地悉く打志たが依肥の城へ引返す如水より伊東が戦功悉く注進しければ伊東父

子御感書賜り稱せらる然りとはいへども高橋左近將監大坂の城に籠り反患して御免を蒙り島津龍伯も降参しければ伊東攻取たる地みち其本主に渡り下されたり又肥前國原城主有馬修理大夫晴信の本國に有て其子左衛門佐直純に三千餘人をへて小西が水津城を攻め關東戦ひ終て後直純を御陣に参らせ其由ゆければ本領安堵せしめらる(是藩譜の説之其業に晴信の上方一味故誅討せらるべきを其子直純多年仕奉る故父を宥めらると言誤之晴信最初下關より歸國せし松浦五島の同類之)さて今度九州平均の功ひとへに黒田入道が武略による神君御感悅斜さらず官位なりとも領國ありとも所望に任せらるべし又今が後の天下万機の政輔佐あらん様頼思召と仰ありしうども如水齡既にかたふき身も又多病あり浮世は願ひ更になし長政大國拜領すれば長政に養われ老身を生涯安逸に明し暮し度いとして御免を蒙り長政所領筑前國福岡は城築りせ城中高き所に菟裘を營造し安樂に老を養ひ翌慶長六年より四年をへて慶長九年三月廿日六十九歳終に死去す其始終進退の節當世又有がたき英雄といふべし(九州記其業藩譜備考)

上杉最上畑谷長谷堂上野山合戦の事

北越軍記にハ
佐竹ハ岐島落
城を圍て自川
落寺山鑪城に
置一遊井内勝
も大洪を越へ
て水戸へ引取
り上杉方に
ては直江評定
一内府と自川
口にて一戰と
計り一所引違
へて上方へ付
てのほり給へ
は石田始西軍
力にて内府と
合戦思ひもよ
らず西軍敗北
うたがひなき
會津ハ堪度く
て大軍を引う
け持こらへが
た一東軍上方
へ向はれ候間
最上へ攻入り
上山長谷堂谷

城山邊を攻落
一山形へ取掛
り東根城を取
て會津より妻
子を籠め内府
軍で攻寄ハ東
根に引籠る岩
子淵を東南に
向ハ北ハ羽黒
湯殿山を併せ
一秋田山を後
に當て籠城せ
は内府親征あ
りとも寄付給
ふ事あたハ一
と豫勝を謀め
九月九日會津
山圍十日米澤
十二日最上若
澤十三日内通
の者有て幡屋
一攻寄る同日
順原其外小城
六餘所攻取

上杉景勝ハ先日最上出羽守義光に欺れしを大に憤り米澤口を堅めたる直江山城守兼續杉原常陸介親憲其外上泉主水憲元溝口左馬勝路色邊修理長實松平空春日右衛門宗貞岩井備中經俊等一万二千人直江ヲ旗本八千人最上ガ所領出羽山形へ攻入べしと命じける山形にも此よし聞て畑谷城江口五兵衛光堯方へ其城ハ堅固ならず早く其城を捨て山形へ來るべしと申遣りす五兵衛聞て主君の仰ながら敵の旗も見ず當城を退去せば本意を失ふに似たり此所にて防戦しもしかゝらず一方を突破て馳參るべしと申けり然らば矢桐相摸(矢柄といふは誤へ)飯田播磨石田並右衛門日野伊賀守等に兵士百人添て畑谷の加勢に赴らしむ直江ハ色部を先手とあし九月十四日早天に畑谷へ押寄る江口は城外に伏勢を設けるといへとも直江是を追立又城邊に水をたへけるに杉原常陸介其堤を切て落し城近く押寄せハ城兵矢炮を嚴しく放しけれども寄手竹束をつけて攻近づく其夜城中忍びの者寄手の旗を奪取しを卒忽者有て此旗を堀際立置けれハ寄手の翌朝是を見てはや城へ攻入し者ありと思ひ透をあらせず攻りける江口甲冑の上に經帽子を着し十文字の鎧をどつて突出れハ其子小吉甥忠作も手勢を勵し必死を極め力戰するゆへ寄手もさす攻めぐみしが後の山へ廻り火箭大筒を打

入れハ城兵死傷する者數を知らず江口五兵衛今ハ是迄ありと寄手數多突倒し雜兵の手よかいらしと城に入小吉忠作と一所に並居て腹を切れハ寄手上泉ガ屬兵反町内膳(北越に反町大膳とす)一番に乗込終に城を乗取城に火を掛凱歌を奏し城兵を始三百五十首切て會津に送る寄手の落行城兵を追討し備を亂したる所山形よりの加勢ハ途中にて畑谷の方に火うりたるを見て飯田播磨ハ矢桐相摸に向ひ御邊軍士を引つれ早く山形へ歸られよ我ハ追兵を追拂ふべしといふまゝに勝に乗じたる敵の中へ一文字に突て入四面にあたり決戦して討死す矢桐ハ高き所へ馬をひかへ此跡を見引返し追かくる敵を四五町追きひけ敵の取落したる飯田ガ首をひろいと直垂につゝみ山形へ引返す(原書畑谷の軍の注進を江口出馬以前の事とす家忠日記成績にも此戰九月十四日とす江戸御出馬ハ九月朔日此一戰關原前後あり故にあらたむ)畑谷落城の後上泉水主憲村ハ直江に向ひ内府は上方へ御出軍ありしと風聞す上方の軍勝利あらハ最上等ハ忽當家へ降參し旗下に屬すべし然れば此城攻取たるを面目に會津の軍を返さるべしといふ直江聞て宇喜多毛利等大軍にて一旦勝利を得るとも内府ハ老算妙謀其上に出る者なし速に成功を得べうら其間に最上伊達を攻むひけて佐竹

北越軍記長谷
山形より二
里上の山へ一
里半山形の上
の野相距三里
上の山へ山形
の南まで天竺
へ北州足持
河の勢をなす

を先手とし打て登らんと思ふありわづらの小城一を攻取て引返しなげ後の 嚙りを得べし
急ぎ長谷堂上野山を攻べしといへば主水も諫めぬて退たり九月十六日直江の門天村の陳山
(北越軍記葵澤山一本須賀澤山とあり)杉原常陸介等の戸上を右になし營柵を立たり又上野
山の此所より僅一里なれば其押とて上泉主水并穂村造酒之允(北越後野井)推野彌七郎等三
千餘人にて差向たり最上方に志村伊豆同九郎兵衛長谷營を守りければ其援兵とて小國大
膳谷地守伯耆川嶋(北越川熊)讃岐氏家左兵衛其外旗本組百騎鉄炮の者二百人籠らせしと猶
覺束なしと維延越前をも遣はしたり都合最上勢四千五百餘人なり志村維延相談して大風右
衛門横尾勘解由に二百人ばかりそへて十六日の夜半に春日左衛門が陣所へ夜討をかけたる
に春日の方への不意を討れ立足もなく散亂す春日も馬に乗べき隙なく直江が陣に引留しう
べ城兵勝に乗じ押寄せしうとも直江が備嚴重あるゆへ追捨て城へ歸る此夜城兵の手に討取
首百五十味方討死のわづら八人なりとどかや春日が陣夜討は逢たる遺恨を思ひ同十八日寄
手の諸軍一同に竹東を付て物堀邊迄攻寄せられども城兵の兼て覺悟の事なる故矢炮嚴しく防
ければ寄手死傷三百人に及び根小屋へ引退く十七日に上野山を押たる上泉主水穂村造酒

北越軍記景勝
より中山武部
に四十の兵を
うへ上の山へ
攻入しむれば
直江も穂村篠
野井に兵三百
餘を加勢す推
野と篠野井は
共に名は彌七
郎にて別人と
す討死せしハ
穂野なり

之允推野彌七郎(北越軍記篠野井)等城内の小勢と察志ければ城より十餘町此方ある物見山
を打越し上泉も山のことあたに陣をどる城主里見越後の軍議の事有とて山形に招かれ城には
其子民部に草刈志摩三千計りにて籠りしが民部草刈に向ひ御邊の岸傳ひ物見山へ上り先手
の跡を取切給へ我等の敵の先陣を打破るべしといへば草刈の健士三百人ばかり撰み物見山
へ取上る寄手は是を見て跡を取切られしとや思ひけん先手より色めく所を城兵関を作り打
てかゝる寄手思ひの外駈立られ推野彌七郎を始め討るゝ者數を知らず寄手の後陣に力を合
せんと物見山を引取らんとするを草刈横合より人數をすゝめ鉄炮を眼下に打かくれば手負
死人若干にて引取事を得ず穂村造酒之允城兵坂彌兵衛と組んで取ておさへし時彌兵衛脇差を
抜て脇腹をしたゝか突しかば穂村弱る所を刎返し首を取る是より寄手の益亂れ立城將民
部の寄手の後陣を破らんと山の峠に押登る上泉主水の先手を救へんと地煙立て馳來る所を
草刈横合より鉄炮にて數十人打倒す主水是を事ともせず退兵廿人計を従へ死物狂に戦しガ
里見民部が兒小姓金糸七藏十六歳民部七藏に向ひ先手の者共皆高名す汝うちやましくいな
きうといふ七藏先刻より飛立如く存ずれども御免なれば此所にひくへいといふ民部健な

北越軍記上泉が討死の九月廿四日長谷堂の戦にて此時ハ伊達より加勢來最上も自身後詰すと見ゆ

る従士數十人に七藏を見繼いで高名させよと命じければ七藏悦びて従士等と共に先手にうけつけて見れば花やかによろひたる武者味方をまくりたて力戦する者あり徒士淺山九郎兵衛彼武者と引組谷底へまろび落けるが石にあたり引分るゝ所を徒士等七藏に聲かくれば忽飛かゝり首討て見れば兜の正面に上泉主水と象眼に入たればまがふ方なき敵の大將なりと七藏悦び其首を主水が首討しとて持參すれば民部大に感稱せり今日民部が手へ討取たる首上泉主水穂村造酒之允椎野彌七郎松下空をはじめ四百八十三級山形へ送りぬれば義光感悦斜ならず長谷堂にてハ上野山の戦功を聞て寄手定て氣を失ひはうゝ敷事あるべうらず此方にてもしぞ打出て城下にて一戦し寄手を追拂へんといふ者多しされども志村伊豆突出るハ大切の見切りある事とて是を制し一人も柵外へ出さず其頃寄手城邊に來り刈田しければ難延越前某出て此好原を追ちらし搦合よくハ寄手一手二手も追拂ふべしといふ伊豆も尤といハハ越前旗本組百騎左右に從ひ打て刈田の奴原追散らし直に直江が山際の陣へ突つかゝる直江が方にも幸と待受て戦じが此戦不意に起りし事故散々突立られ城兵ハ後陣迄も突入んとするに日既に西山に傾けハ難延自身揚貝吹て兵をまとめ歸城せんとす寄手是に

北越軍記伊達ハ搦軍を伊達上野石川彌兵衛とす

力を得て城へ付入にせんと追來る志村伊豆兼てかく有べしと思ひければ鉄炮の者三十人計り大手より一町ばかり道の左右に伏置しが此時起り立て一同鉄炮打かけ三十人計り打倒す寄手是に驚きためらふ間城兵ハ難なく城に引取り山形にハ伊達家へ加勢遣へしけるに政宗より伊達壹岐遠藤彌兵衛に千百餘の勢をそハ山形へ送りしりハ義光長谷堂の後卷せんと都合一万餘人九月十五日山形を出馬し直江が陣と五十町計り隔て對陣す然る所ハ關原一戦に上方の軍敗れたりと聞ゆれば會津勢定て逃去べし追討せんと最上方にハ軍議をこらす上杉方の景勝より早し其地を引拂ふべしと令しければ直江諸將と相談し杉原常陸介溝口左馬之助兩人先手に至り山の尾崎を取替て諸軍を引取らせんと廿九日早天より會津勢陣拂して引取らんとす最上方にハかくと見て長谷堂城主志村伊豆を先手とし義光其子修理太夫義康伊達に加勢引取敵ハ喰付て攻立れば會津勢死傷する者惣知らず其中に二本松右京當年十六歳地利によつて備をたて最上勢を請どめて首十餘級討とる溝口杉原も踏といまり最上勢を追まくり手痛く働けば志村平右衛門天堂七郎始討るゝ者數十人義光大方なればいつも鉄の棒を振廻し味方を勵まし又會津勢を追返すされども直江ハ險阻に據て陣を張故義光も陣を

立て備たり十月朔日早天に會津勢旗を返すを見て追討せんと最上勢一同に軍を進む直江兼て用意せし鉄炮山上より雨霰の如く打かくる其鐵砲義光の旗本まで頻に來る堀喜叫齋（一本喜雲）筑紫にて名を得たる劍術者義光に従ひこゝに出陣せしがあまり御陣敵に近き故打越の鐵砲來ると見へし今少し御陣を退き給へし然るべしと諫しうバ義光はたど白眼で大將戰地を退く時ハ士卒引色に成り味方敗北すべしと馳かゝり此山の敵を追落せと下知を喜呼敵ハ必峯谷に伏兵を設て味方を難所に引入んどの謀に見へて敵の中へ馳入て討死するハ何の難事のいんやといふまゝに馳出し左の肩先より右の乳の下迄鐵砲よて打扱れ即死せり義光ハ峯をへだて、備へしが騎馬かなひがたしと二千餘人步行立にて峯を越て馳らゝる小國大磨谷地守伯耆川熊讚岐氏家九兵衛等敵の跡を取切らんとするを見て會津勢色めけば義光義康勝に乘じ烈しく下知し追かくる直江ハ備を少しも亂さず謙信の家風かゝり引といふ術を以て度々大返しに取て返し追兵を打拂ひ難さく米澤へ引返せば義光義康も軍ハ是迄なりと山形へ歸陣あり其頃直江ハ武畧謙信の遺風を失はずとて敵も味方も大に感稱したりとぞ又直江既に軍を返す所に上杉家士小田部大學助直江に向ひ伊達ハ石川彌兵

北越軍記原地
城は庄内城主
由利八郎國盛
上杉を叛き
かば直江下治
右衛門を以て
攻落させて下
は堺村が陣を
取此村ハ山形
ハ四里西なり

術詞をかへし度以得ば暫時御暇給へるべしといふ直江暇をとらずべし必卒忽の働すきとゆるしければ小田部悦び只一騎門田といふ所迄引返し伊達ハ勢の中より石川を呼出し今度貴殿ハ武勇を感じ以故以來交を結ばんため此所迄見参いといふ石川も小田部ハ只一騎味方を離れ來る武勇を感じ互に武勇を稱美し小田部ハ立歸り志ハ上杉降参の後所領減じ家人多く退散するに及び伊達家より招かれ小田部ハ政宗の家人と成しとぞ其頃羽州庄内酒田の城に上杉家人川村兵藏志田修理籠城していまだ退去せず又下治右衛門（慶彦記志茂とあり今ハくだりと呼ぶと言）谷池郷に在陣するよし十月二日郷人ハ最上の陣へ告來る志村伊豆に命じ治右衛門ハ其名聞えし勇士なり汝謀を以て味方とあし酒田の先陣させよと命ず伊豆心得下ハ籠りたる古城をひたしと取巻夜ハ入て使を遣へし降参をすめしに同意し一族下美作戸井半左衛門下勘七郎原八左衛門井上牛之助同道し伊豆と共に山形へ來れば義光大に悦び本領安堵させ直に酒田の先陣を命ずやがて義光三男大藏大輔楯岡甲斐を大將とし里見源右衛門加藤越後由利豊前志村伊豆延越前延澤能登白石備前原田大膳都合五千餘人月山嶽を越へ狩川を夜中に渡り最上川迄押寄る城兵ハ川端に出て防じ下治右衛門ハ一族兵

船十四五艘取乘て五百餘人川上より押渡るを見て城兵堤の上より頻に鉄炮を打ちくる下
 一族の中より戸井半左衛門少しも恐れず堤にかけのぼる治右衛門の戸井を討すなど下知し
 大將大藏大輔の下が一族救へと下知し一同に惣軍川を渡せば城兵たまたらず城に逃歸る寄手
 ついて城を攻れば城將川村志村こゝを専途と烈しく矢砲を放せば寄手里見源右衛門を始
 め討るゝ者も數多しされども寄手の大軍なれば加藤越後先登し延澤能登隠れなき大力量に
 て勇をふるい諸軍追て攻入にぞ川村志村も防戦かきり降参を請けるに志村伊豆山形へ其
 旨を送り兵藏修理兩人の命を助け會津へ送り歸し最上勢の悉く引拂ふ下治左衛門今度の
 戦功を稱美して田川郡一万二千石を授け大浦の城主とし義光此旨大坂へ進進しければ神君
 大に義光が功を御感ありしとあり一家忠日記に酒田城攻を慶長六年八月の事とす然れば
 景勝會津より米澤へ轉封後の事なり今の藩譜戸澤が傳并基業の説により五年とす

戸澤六郷秋田等の事

出羽國角館城主戸澤右京亮政盛其頃九郎五郎といふ最上が酒田の城攻る時政盛も軍勢具
 して馳加はり其城を攻落しければ慶長七年の夏常陸の那珂郡にて四万石賜はる(元和八年

出羽の新庄にうつる六万八千石と成る) 同國山北郷の領主六郷兵庫頭政乗の同國の住人小
 野寺遠江守綱元雙ふき石田が一味と聞へしうば政乗馳向て十月初より十一月の始にいたる
 まて多くの敵を討亡し味方も討たるゝ者少きうらら關原上方の軍敗れしと聞て小野寺はじ
 め其方人共皆退散しければ政乗早速大坂に馳登り神君に拜謁して御感を蒙り常陸國府中の
 地二万石賜ふ(元和九年出羽本領二万石餘賜ふ) 同國秋田領主安樂太郎實季はじめ神君會津
 御發向有りし時與羽の人々の最上に從ひ軍すべしと令じ下されしうば實季病と稱して軍勢
 計りさし向たり上方便徒蜂起すと聞て仙北の人々皆故里へ逃歸りしが關原事終て後義光よ
 り實季石田に一味せりと訴ふ依て義光實季召決せらるゝに及んで實季あへて二心なきが故
 に景勝が徒黨せし出羽由利郡八幡の庄自然古の城に籠たる敵を攻破り百餘人が首を切又石
 田が方人小野寺遠江守が弟の大森孫五郎が籠たる雄勝の城を攻落せりといふ義光の彼城攻
 落したるの石田方敗軍と聞て御咎を恐れ味方を討しこと實季承はり自然古を討し八月
 月の末大森を亡したるは九月五日の關原の戦の九月十五日實季鬼神を欺く明智たりとい
 うて味方の十五日に敗れん事を察し其以前に味方を討事あるべきと陳じければ其後御尋の

旨むなかりしが七年の夏佐竹を秋田にうつされし時常陸の赤戸にうつる五万石賜ふ(藩譜
 による原書に秋田實季羽州坂田の城を攻る事をしるせしり更にわらぬ事あり) 浦生侍從
 季行領地は會津と境を交けれは景勝より越原の郷人に財寶をわたへ一揆をおこさせけるを
 代官の神戸平左衛門早く察し其張本四五人徒黨數千人を誅しけるに殘黨會津領へ出奔し南
 山城主妹川縫殿に注進し再び野州を侵掠せんとも同國鹿沼にも一揆蜂起せしかども石田方
 打負たりと聞皆秋風に霜葉の散ごとく落失ぬ(譜藩基業)

諸將恩賞の事

神君の大坂西城にまじく天下萬機を沙汰し給ひ中納言殿の十一月十六日伏見へ渡らせ給
 ひ十八日御參内二條御城へ入らせ給へば攝家竹園をはじめ上達部殿上人其外大小名さらに
 もいはず京大坂奈良堺の町人出家社人迄大路狭しと群集し天下太平四海靜謐の御祝儀上
 益撥亂反正の御政を仰ぎ奉る同月十九日軍功の諸將恩賞を行る

一 越前國 北庄政 福井 結城少將秀康朝臣
 六十七万石 本領下野結城十万石

- 一 尾張國 清洲 松平下野守忠吉朝臣
六十四万六千石 本領武藏忍十万石
- 一 加賀能登越中三國 加州 金澤 前田中納言利長卿
百十五万二千石 能登一圓加賀半國加恩
- 一 備前備中美作三國 金吾中納言秀秋卿
七十二万石 本領筑前三十三万六千四十石
- 一 安藝備後兩國 藝州廣島 福嶋侍從正則
四十九万八千石 本領尾州清洲廿万石
- 一 播磨國 姫路 池田侍從輝政
五十二万石 本領三州吉田十五万二千石
- 一 出雲隱岐兩國 雲州 堀尾帶刀吉時
三十三万五千石 松江 同信濃守忠氏
本領遠州濱松十一万二千石
- 一 筑前國 福岡 黒田甲斐守長政

五十二万五千石 本領豐前

一 伯耆國 米子 中村一學忠一

十七万五千石 本領駿州府中

一 肥後國 熊本 加藤主計頭清正

五十一万五千石 本領三万石

一 紀伊國 和歌山 淺野左京大夫幸長

三十九万五千石 本領甲州郡内谷村二十二万七千石

一 豊前豊後 小倉 杵築 細川越中守忠興

三十七万石 本領丹後田邊十一万石

一 筑後國 久留米 田中兵部少輔吉政

三十三万五千石 本領三河岡崎十万石

一 土佐國 高知 山内對馬守一豊

二十万二千六百石 本領遠州掛川五万石

一 若狹國 小濱 京極宰相高次

九万二千石余 本領江州大津六万石

一 丹後國 宮津 修理太夫下改 京極丹後守高知

十二万七千石 本領信州飯田八万石

一 伊豫國 松山 加藤左馬助嘉明

二十万石 本領同國真崎十万石

一 同國 今張 藤堂和泉守高虎

二十万石 本領同國宇和嶋八万石

一 阿波國 徳嶋 蜂須賀長門守至鎮

十八万六千石 本領安濃

一 讃岐國 九龜 生駒讃岐守一正

十七万石余 本領同國高松六万石

一 肥前國 佐賀 鍋嶋信濃守勝茂

- 一 三十五万七千石 本領安堵
- 一 飛騨國 高山 金森法印
- 一 三万八千石 本領外濃州上有賀關河州金田二万石加恩
- 一 因幡國 鳥取 池田備中守長吉
- 一 六万石 新恩
- 一 攝津國 有馬三田 有馬法印
- 一 二万石 本領安堵
- 一 丹波國 福知山 有馬玄蕃頭豊氏
- 一 六万石 本領遠州横須賀三万石
- 一 美濃國 高須 徳永石見入道壽昌
- 一 六万石 本領同國松木三万石
- 一 伊賀國 上野 筒井伊賀守定次
- 一 十二万石 本領安堵

- 一 伊勢國 安濃津 富田信濃守知信
- 一 七万石 本領の上二万石加恩
- 一 同國 神戸 一柳監物直盛
- 一 五万石 本領尾州黒田二万石
- 一 同國 松坂 古田兵部少輔重勝
- 一 六万石 本領の上二万石加恩
- 一 同國 田丸 稻葉藏人道通
- 一 四万五千七百石 本領同國岩手二万五千七百石
- 一 備中國 庭瀬 戸川肥後守達安
- 一 一万石新恩
- 一 同國 松山 小堀遠江守政一
- 一 三万石新恩
- 一 同國 足森 水取宮内少輔利房

- 一 二万千石 是の元和元年の事之關原の時にはあり
- 一 豊後國 日出 木下右衛門太夫延俊
- 一 二万五千石 五千石加恩是迄父家定が姫路を守りし之但し延俊が此地賜りしり翌慶長六年之府内 竹中丹後守重門
- 一 同國 一万五千石 本領濃州菩提六千石
- 一 同國 七万四千石 竹田岡 中川修理太夫秀成
- 一 同國 本領安堵 白杵 稻葉右京亮貞通
- 一 同五万石 本領濃州郡上四万五千石
- 一 肥前國 大村 大村丹後守喜前
- 一 一万五千石 本領安堵 一
- 一 同國 平戸 松浦肥前守領信
- 一 同國 六万石 同前

- 一 同國 唐津 寺澤志摩守廣高
- 一 十二万石 本領の上四万石加恩
- 一 備中國 成羽 山崎左馬允家盛
- 一 三万石(基業若狭トス)本領攝州三田二万石
- 一 志摩國 鳥羽 九鬼長門守守隆
- 一 五万六千石 本領の上二万千石加恩
- 一 大和國 芝樹 織田有樂入道 同河内守長孝
- 一 一万石宛
- 一 同國 宇多 福嶋掃部助正頼
- 一 三万石 本領勢州長嶋一万石
- 一 同國 一万六千石 布施本領安堵 桑山修理太夫一晴
- 一 同國 二万六千石 五所同 同 伊賀守直晴
- 一 同國 三千石 竹田同 同 左近太夫貞晴

- 一 和泉國 二万石 田竹同 同 法印重晴入道家榮
- 一 駿河國 久野 松下右兵衛佐吉綱
- 一 一万六千石 本領遠州頭陀寺一万石
- 一 美濃國 西尾豊後守光教
- 一 三万石 本領二万石
- 一 同國 郡上 遠藤左馬助慶隆
- 一 二万六千石復領 邑割 木曾群士
- 一 同國 刈谷 水野六左衛門勝成
- 一 三万石 本領の上二万石加恩
- 一 常陸國 府中 六郷兵庫頭政乘
- 一 一万石 本領羽州六郷
- 一 陸奥能登兩國の内 土方河内守雄久

- 一 二万七千石新恩 雄久去年佐竹に預らる其以前の尾州犬山 四方五千石領せし
- 一 出羽國庄内山北 山形 最上出羽守義光
- 一 五十一万石 本領同國山形廿四万石今度庄内三郡山北加恩
- 一 日向國 五万七千石 本領安堵 伊藤左京祐慶
- 一 同國 財部 秋月三郎種宗
- 一 三万石 本領安堵
- 一 肥後國 一万二千石 本領安堵 求麻 相良左兵衛佐長每
- 一 淡路國 三万石 同前 須本 脇坂中務大輔安治
- 一 石見國 濱田 浮田左京亮政 坂崎出羽守孝親
- 一 二万石新恩 此人の名藩譜直行成正重長貞盛信顯基業にハ本書の如し
- 一 信濃國 十二万石 本領安堵 川中嶋 森美作守忠政
- 一 同國 沼田 上田 眞田伊豆守信之
- 一 十二万五千石 本領沼田二万七千石上田三万八千石加恩五万石

- 一 越後國 高田 堀左右門督秀治
 - 一 四十五万石 本領安堵
 - 一 同國 四万石 本領二万石 坂戸 堀丹後守直寄
 - 一 同國 六万石 本領安堵 柴田 溝口伯耆守秀勝
 - 一 同國 九万石 同前 木庄 村上周防守義清
 - 一 但馬國 竹田 山名彈高豐國
 - 一 六万七千石 基業村岡齋村左兵衛秀則が城を請取て直に領せしめらる
 - 一 因幡國 龜井能登守茲矩
 - 一 四万三千石 本領の上三万石加恩
- 翌慶長六年辛丑二月に及び譜第関閣の功臣恩賞を行はる(基業)
- 一 江州佐和山十八万石 本領上野箕輪十二万石 井伊兵部少輔直政
 - 一 勢州桑名十二万石 本領上總大多喜十万石 本多中務大輔忠勝
 - 一 上總大多喜五万石新恩 同 内記忠朝

- 一 濃州大垣五万石 本領上州鳴戸二万石 石川長門守康通
- 一 三州岡崎五万石 本領上州臼井二万石 本多豊後守康重
- 一 常州麻橋三万三千石 本領武州川越二万石 酒井河内守重忠
- 一 三州土浦三万五千石 本領上州布川五千石 松平伊豆守信一
- 一 三州吉田三万石 本領武州八幡松山一万石松平立齋允家清
- 一 濃州加納六万石 本領宮崎二万石 奥平美作守信昌
- 一 遠州掛川二万七千石 本領下總廳南一万三千石松平隠岐守定勝
- 一 常州笠原三万石 本領武州寄西二万石 松平周防守康重
- 一 三州喜良西尾三万石 本領總州小築五千石 本多總殿助康俊
- 一 遠州横須賀六万石 本領上總久留里三万石 松平飛騨守忠政
- 一 同濃州金山合領濱松五万石本領武州八幡山一万石松平内膳正忠頼
- 一 駿州沼津二万石 本領總州裝原五千石 大久保治右衛門忠佐
- 一 同州駿府三万石 本領豆州龍山一万石 内藤三左衛門信成

一 上州那波一万石 本領武州川越五千石 酒井右兵衛大夫忠世
 一 上總下總之内一万石 本領武州之内五千石 青山播磨守忠成
 一 三州深溝一万石 本領總州小美川同高 松平又八郎忠利
 一 駿州興國寺一万石 本領同五千石 天野三郎兵衛康景
 一 尾州小川一万石 水野彈正忠分長
 一 三州之内七千石(基業に近江)本領武州之内 永井右近太夫直勝
 一 同州田原一万石 本領三州和地村五千石 戸田土佐守高次
 一 上總勝浦五千石 本領の上三千石 植村土佐守泰忠
 一 豊後森一万四千石 本領伊豆之内同高 久留嶋左衛門佐康親

是より以下の輩各武功の淺深により加恩新恩若干なりしかば各歡娛の聲止む時あり
 上杉伊達合戦の事

伊達政宗の關原合戦前に白石の城を攻取直に築川の城攻取んと思ふ所神君より重て御下知
 あらん程の軍勢動すべからずと仰下されしうへ心あらず岩手澤に引返し其後最上に加勢

して上杉と合戦のしけれども關原戦ひ終りて後の天下悉く神君御威徳に服し天下はや太
 平の化に浴せんとす政宗の兎角此舉に乗じ上杉が所領を切取ん志されば御下知をもちまたず
 慶長五年五月六日上杉が家人本庄越前守繁長が籠りたる信夫郡の福嶋城へ押寄せ同八日伏
 兵を設て城兵を透引せんとせしに城兵永井善左衛門安盛是を察し伏兵を追立四人討取らる
 夫よりの寒天なれば白石迄引返し七日滯留し出羽長井郡湯原の方へ出張する所上杉方甘糟
 備後守清長が巡見に来るを見て大に驚き引返さんとする時景勝も二万計の大軍にて境目ま
 て出張すと聞えければ政宗早を引返せば景勝も會津へ引返すいよく本意なく思ひ翌慶長
 六年二月七日伊達郡へ押出しけれども福嶋城主本庄繁長其子出羽守滿長宮代替の守將矢内
 彌書等嚴しく防戦すれば政宗討負て引退く三月廿四日政宗又出馬し廿五日白石の城に着廿
 七日信夫郡を放火して廿八日福嶋を襲ひんとす城兵岡左内の卒雨に打出べからずと云ども
 鈴木彦九郎は是非打出て追散らさんと云により左内も遂に打て出政宗方木幡四郎左衛門と
 戦ひ木幡を突伏て首を取る政宗此城急に攻落し難しと見て福嶋を捨て築川を攻んと阿武隈
 川を渡り来るよし築川城主須田大炊介聞て廿九日の曙城下へ伏兵を設て政宗よするとひ

としく大炊介打て出ると其儘政宗大に驚き兵を返さんとす大炊介相圖の貝を吹バ伏兵四方に起り政宗を取籠て討んとすれば政宗の散々に敗走す片倉小十郎一人踏留りて苦戦し味方を引取らせんとするを見て政宗濱田治部を返して救しむ小十郎是に力を得て須田伏兵を追散らす須田又もりかへして切てかゝる川を渡り追討せんとせしを築地修理諫で引返せば政宗も幸に引取けり政宗度々敗軍し無念に思ひ早く軍を止むべきよし志バ、台命を蒙りあぐら福嶋築川兩城を攻取らずしては置べうらずと四月十六日又白石を出勢す此時伊達上野介成實斥候をよくす廿一日政宗本陣を小山に遷す福嶋城より杉原甘精本庄出羽守栗生美濃守出勢し松川に屯せり(松川の阿武隈川枝流之)政宗兼て土民に金銀多くわたへ上杉方油断を聞出し廿五日夜半に小山を打立て瀬上をこへて廿六日曉松川に着上杉方に栗生美濃守岡左内も松川に出張せり本庄美濃守守重の猪股主膳を斥候に出しけるに政宗川を越へんとすとす其後井筒小隼人本城岡右衛門を斥候に遣ひしければ此兩人政宗半時程に川を越し打てりゝるべしといふ此中分尤なりとて上杉方備を立て待所に岡左内八人の留るをも聞入す乗出し川を越す是を見て壯士三十人計りあなじく川をわたしかゝる時に川

霧晴て朝日かゝりやけバ上杉伊達の兩勢川中にてはしあゝ行き合ひ合戦と上杉方散々に駈立られ川を乗戻さんとす政宗と左内川中にて太刀打あり政宗が方の上杉方を追立て川向の岸にわかれバ上杉方栗生美濃守進み來り先陣片倉が勢を退崩す伊達安房は是に取合す敵の後へ廻り切掛る片倉もり返して戦へば上杉方終に桑木原まで敗走す政宗眞先かけて追行に上杉方散々に成り福嶋城へ逃入りたり此時青木新五兵衛鎗にて政宗の内兜を突て前立物にわたる本庄豊後守のひそかに伊達勢の後を襲ひんと兵をまゐす梁川城中に須田大炊助横田大學築地修理車丹波守福嶋の城兵危しと聞て是を救ひんと大炊助采配とつて大勢を進め阿武隈川を渡り越し無二無三に政宗本本を目かけて切てかゝる政宗勢又散々に切立られ軍伍散亂し敗走す此亂軍の中に齋野道三眞先かけて政宗に切てかゝり政宗が猩々緋の陣羽織を切らさしが政宗跡をも見ず逃去たり又此亂れに伊達家の寶物九曜の紋の幕紺地黄糸の法花廿八品の幕を須田の組西村仙右衛門曾田宇平次奪ひ取る(世に竹に雀の幕を奪ひとりしと此事)岡左内も先備城せしが再び打て出本庄越前守が西門より切て出政宗が陣屋に火を掛け小荷駄を燒立しかば政宗足をとりのめ得ず大崎へ早く引入しとぞ政宗今度御味方にて粉

骨を盡したりされども、いづれに命に叛き上杉方に軍を任掛たる所、廢罷もあるべきか、と皆
八思ふ所、寛宥の御沙汰にて、結句今度切取たる柴田刈田の二郡をば、む都て六十二万石に封
せられ、白石の片倉小十郎に下され、政宗が長子、遠江守秀宗、後年別に伊豫國守和嶋十萬石を賜
ふ(慶長十九年の事)いとありがたき御恩なり(夏目記安民記武張荒嶽藩譜)

按ずるに原書此戦を慶長五年七月廿七日廿八日とし、第卅六卷に其注進をのせたり、家忠
日記に、七月廿一日とす共に、誤あり、今の夏目記安民記に從ひ、六年のこととす、武張荒嶽
にのせたる上杉の家士北川次郎兵衛の記も、夏目記におなじ藩譜の注文にも、此戦の事關
原諸記誤多む、たゞ北川が記、詳よし、してより、とて、ころありとしるせり

上杉佐竹岩城降參付蒲生益封の事

徳川家御威徳至らぬくまもなく、天下にかゝり、やけに、今の上杉中納言身勝も、孤城を守り、がたく
家臣等評議して、結城少將秀康朝臣につきて、懇願しける、直江山城守不慮に石田が姦計に陥
り、新城を築き、御不審を蒙り、是を申開く詞、さく重愚不肖の景勝逆徒の名を得し事、全く本意に
あらず、切腹仰付らるゝとも、領國召上られ、いとも敢て怨奉るべきに、いはず、方一寛仁の御徳に

より、高免を蒙り、いづれの子々孫々、永く徳川家臣、屬として、忠勤を怠らず、奉公仕るべし、とす、其上
豊光寺承覺長老を以て、本多佐渡守にたより、懇訴しければ、慶長六年六月十二日、忽に御免あり
秀康朝臣にしたがひ、大坂に登り、八月廿四日、拜謝奉る(夏目記に、十一月末と有)奥の會津仙
道庄内百廿万石、收公せられ、改めて羽州米澤三十万石、賜ひる、直江山城守兼繼の石田隨一の一味
なれば、極刑にも處せらるべけれど、思ひの外、主と同じく、其罪ゆるされ、別に五万石を賜ふ、是を
聞傳へ、直江すら、猶かくの如く、あれば、我徒患なし、と毛利の兵、戸福原の嶋津新納野村等をはむ
め、大小名の藩中、迄も大に安心し、天下、忽に靜謐したる、漢高祖が雍齒を封じ、晋文公が里鳧須
を車右に用ひしも、和漢同轍、うしとき、御沙汰とぞ、仰奉るべきと、之ける、又常陸水戸の佐竹右京
太夫義宣も、最初より、石田が無二の一味、ありしかば、度々御使給ひり、召せども、參らず、内府公會
津へ、攻入給ひ、御うしろより、襲ひ、參らせんとは、うりけるが、其頃、父常陸介義重、隠居し、竹隈と
いふ所、に住居せり、義重さる古の、もの、老練なれば、いやく、此と然るべからずと、諫にぞ
義宣も、どやかくと、打過る内に、眞多賀善太夫御本陣へ、夜討せんと、進めしうども、夫も、義宣返答
延引する間、多賀谷が姦計も、露顯したり、關原軍終りて、後父義重使を參らせ、義宣の罪を陳謝す

今年三月廿七日に中納言殿大納言に昇進ありて四月十日伏見より江戸に歸らせ給ふ是
 の東國にて石田が殘黨御征伐の爲ありと風説しければ義重大に驚き頓て水戸を立て上洛す
 るとて神奈川の宿にて大納言殿に参りあひ奉り家亡びん事を歎きやさらば伏見へ参りて内
 府にやさるべしと仰ければ義重伏見に参り神君にまみへさまと歎き願ふ神君も佐竹が
 家の新羅三郎義光より出て數代連綿たる所一時に斷滅せんともなさけなく又老父が歎きや
 所も哀に思召ければ御ゆるし有べしと仰出され同七年五月八日義宣伏見に召され御對面有
 て常陸國八十万石收公せられ出羽秋田の地二十五万五千石餘賜り其六月十四日秋田にぞ
 うつりける其臣車丹羽(上杉の方)へ加勢して築川へ籠りし者(主人累代の地召上られしを
 わまりいひがひなく思ひ義宣の秋田にうつりし跡にて兵をあとし遂にの擲とられ誅せられ
 ぬかくて蒲生飛騨守秀行の神君の御君にあつしければ石田かねて説じ大間會津の所領百万
 石奪ひわづりに下野宇都宮十二万石授けしを六年の八月廿五日會津の舊領を復し六十万石
 になさる又奥州岩城郡十二万石の領主岩城次郎貞隆の佐竹義宣が弟あり兄と同じく石田が
 方人にて召に應ぜざりしうば是も佐竹と同じく岩城郡を召上られ出羽の龜田にうつされて

二万石賜ふ其後又攝津河内和泉三國を以て大坂の秀頼賄料に充賜ひ猶も御懇遇淺からず
 後又大納言殿姫君を進せられ御尊君となされ又禁中御料をはじめ攝家宮門跡公卿殿上人の
 采邑悉く絶たるを繼廢れしを興させ給ふ万機の仁政殘方なく執行の板倉四郎左衛門勝
 重加藤喜左衛門正次を京都所司代と定られ洛中洛外成敗正しく取行のしめ神君めてたく十
 一月十五日江戸へ還御ありければ四海昇平に歸し諸民萬歳を唱ひけり(夏目記藩譜)
 神君將軍宣下の事

この時の主上の後に後陽成院と聞へ奉る贈大上天皇陽光院の御子にて正親町院の皇統をう
 けつがせ給ひ人王百八代にあたらせ給ひき極めて聰明にわたらせ給ふ事いどかしこしされ
 ば神君應仁よりこのかた四海擾亂し兵革止む日なく王威衰廢せしより倫理地に墜天下塗炭
 の苦しみをまぬがれざりしを一度戎衣して普天の下忽太平に歸し四民雨露の恩に浴し朝
 廷を尊崇し給ひて王道を興隆し給ひ文武を兼備て八荒を鎮撫し給ふ聖徳大業古へもたどへ
 んかたなく後の世も又有難しと敬感ましし(慶長八年癸卯二月十二日と更に聖斷ましし)
 神君を以て征夷大將軍に補せられ従一位右大臣又轉じ給ひ淳和院學兩院の別當源氏長者た



家康將軍
宣下諸侯
参賀の圖



月科

るべしと宣下し給ひ牛車隨身兵仗を賜ふ官務外記宣旨を伏見城に持参す此時より廣橋大納言兼勝勘修寺宰相光豊を以て武家傳奏とある同廿五日の御拜賀御参内た人御隨身舎人牛飼迄も花刺かざす粧ひ前騎倍従の土民單衣の色目まで天地もかやくばりあり主上に銀一万兩親王(後水尾院の御事)一千兩女院に二千兩(漸上東門院)女御(中和門院)一千兩献じ給ひ内の女房達へも白銀あまたあくらせ給ふ御拜賀終りて御盃まいる折うら四海の兵亂一時に靜謐し天下昇平の基を開くとひとへに將軍の武功による者こと詔のらせ給ひ神君にも天恩の厚きを謝し撥亂反正の功志うしあがら聖徳の致す所ありと拜謝舞踏してまうり出給ひぬそも征夷大將軍の職の景行天皇の御時日本武尊をもて任せられしよりこのうた武門に於て尤重んずる所と云どもなりんすく右大將頼朝卿此職に任せられし後ひとへに武門の棟梁たるのみならず天子を輔佐し方機を沙汰せらるゝ事とありしうへ天下の治亂盛衰みち此職にかゝる所なれば尤重任と云べし頼朝卿清和の御末にて三代此職を傳へられし後或は藤原(朝理朝綱)或は親王(宗尊以下六人)にて補せられしも只其名のみにて實なし等持院尊氏公以來足利家また清和の御流にて此職を傳ふ事十五代に及べり織田信長の右大臣

まて歴のぼり豊臣秀吉の攝籙に至り官位人臣を極むといへども猶此職に補せられず神君今清和の御一流にて此重任に補し給ふこれまうしあがら伊勢岩清水の神慮と思ひやられていと尊じかくてぞ久堅の天長くあらかぬの地久しく聖子神孫の御末まで常磐堅磐にこの重職を傳へ給ひ武藏野の廣き御惠みの筑波根のうげよりもまげく補陀落の山の日の光の秋津嶋の外までも照給ふかしこと萬世の末までも普天の下卒士の濱仰ぎかしこみ奉るべきことにこそ

正校 三河後風土記卷第四十二 大尾

天保八年丁酉三月上巳卒業六十翁司直

東京府平民
南島飾那須崎村百九十四番地

版權免許 明治十七年九月十三日
分板御届 明治十九年六月三日
別製本御届 明治十九年六月十日

定價金七圓

改撰者 東京府平民 成島司直
南島飾那須崎村百九十四番地

出版人 東京府平民 近藤瓶城
深川區葛岡門前町七十番地

分版人 東京府平民 辻岡文助
日本橋區横山町三丁目四番地

發兌書林 金松堂

東京秀英舎印行

金松堂新版發兌書目

爲換ハ海草種郵便局へ宛御廻シラセ
郵便切手代用不苦且前金ヲ要旨トス

近世紀聞

染崎延房著 全部壹卷洋綴美製
松齋吟光密進 定價金四圓

該書ハ嘉永六癸丑年相州浦賀港へ始メテ亞米利加ノ軍艦渡來セシヨリ幕府甚ダ苦慮セラレ
テ之ヲ諸侯ニ質問アルニ到底和戰ノ二ツトナリタル故公武ノ間ニ紛論ヲ生シテ至リ
兼シテ彦根中將ノ斷ヲ以テ米國其他ノ各國ト互市ノ條約ヲ結ビヨリ勤王ノ聲主ハ中將
ヲ惡ミ遂ニ万延元年三月三日櫻田外ニテ彦根侯ヲ刺殺シ尋テ文久二年ニハ安藤關老ヲモ暗
殺ナサント謀ル等ノ事ヨリ世上ノ舉動一方ナラズ諸戰爭ヨリ地震其他凶年大風雨等ニテ萬
民ノ困難ヨリ維新以來西南ノ戰爭等ニテ大團圓ヲ結ビタル迄一モ漏サス悉皆書綴リタル良
書ナレバ四方諸君幸ニ本編ヲ緝キ賜ハバ眞僞自カラ瞭然アラズ

版權 免許 釋迦八相倭文庫

萬亨應賀著
猩々曉齋書

全部六十五編本尾西洋綴頗美本二冊定價金五圓 郵便稅自辨す

是ハ釋迦世尊世に出生する奇瑞衆生濟度のため王位を棄深山に入難行苦行をつみ出山して
涅槃に至る迄庶人の機に臨み變に應じて教化する德行娑婆往來八千度の因位の物語り羅漢
諸弟子の履歷五戒及び方便瞋恚憍悔禪定忍辱神力智慧造惡慳貪供養精進報恩孝行不孝懈怠
等の人身に大益ある條にハ悉く其要文と事跡の譬迄皆梵説を倭國の人情に留意を摸寫すれ
ば是に賴る幼年達は世尊の手口から寶玉を授りて善道の京へ登る其捷徑ハ此書なり

伊藤博文公題辭

巖谷一六君題辭

川田老漁君序

宋疊山謝枋得編次

日本久保田梁山先生訓譯

隨頭 文章軌範讀本

全二冊 定價金六十錢 郵便稅自辨ス

該書ハ梁山翁文章軌範ノ善本ヲ撰ヒテ異同ヲ校シ誤謬ヲ正シ註釋ヲ去リ頭ラニ略解ヲ掲ケ
正本貳冊トナシ初學者ノ讀本ニ盡力シタリハ訓譯モ又々簡便ニシテ見易ケレバ質問ノ一
助ニナリ因テ諸學校ノ用要ハ勿論英童敎女御教育ノ御方ハ一讀ナサマレバナラザル良本也

羅田梁山先生著

佐藤卓堂校

記事論說祝文例題

銅版全貳冊 定價八十錢 郵便稅自辨ス

該書ハ記事文ニ有名ナル梁山翁ノ著述ナリ先生今般一層注意ヲ加ヘ新奇ナル題ヲ集メ頗ル
盡力致シタルハ初學作文者坐右ヲ缺ク可カラザル善本ナリ因テ諸學校之生徒者申ニ不及作
文ニ志ケル諸君ハ一讀シテ記憶アラソテ奉懇願候也

曲亭馬琴著 一椿說弓張月 洋本綴合本一冊 定價二圓四十錢	一繪本楠公記 日本仕立五冊大尾 合本價壹圓五拾錢	一繪本楠公記 西洋仕立全一冊 定價壹圓五拾錢	一青砥藤綱摸稜案 西洋綴全一冊 定價金壹圓	一繪本岩見武勇傳 洋本綴全一冊 定價金壹圓卅錢	染崎延房編輯 一近世紀聞 半紙本全卅六卷 大尾定價金七圓	渡邊文京編輯 一通日本小史 初編ヨリ十編マテ出版 以下近日價廿五錢宛	一上等紀事論說文例 銅版寸珍二冊 定價四拾五錢	一作紀事論說文例 同全二冊 定價四拾五錢	一繪本英雄美談 西洋仕立全一冊 定價壹圓五拾錢	一繪本西遊記 西洋綴全一冊 定價壹圓五拾錢	一護國女太平記 西洋綴全一冊 定價七拾錢	一赤穂精義參考內侍所 洋本綴全一冊 定價壹圓八拾錢	一繪本柳菴美談 西洋綴全一冊 定價壹圓五拾錢	橘嶋卿編輯 一銅版開化玉篇 全一冊定價金二圓	宮本與晃著 一袖日本史類玉編 西洋綴小本 定價金六拾五錢	一增補明治節用集大全 全一冊定價 金壹圓卅錢	一漢語伊呂波字引 全一冊定價 金六拾錢
---------------------------------------	--------------------------------	------------------------------	-----------------------------	-------------------------------	---------------------------------------	---	-------------------------------	----------------------------	-------------------------------	-----------------------------	----------------------------	---------------------------------	------------------------------	------------------------------	---------------------------------------	------------------------------	---------------------------

一校廣益字林小成 銅版小本全 定價四拾八錢	一增國史略字引 中本全一冊 定價七拾錢	一小學躰操便蒙 西洋綴全一冊 定價七拾錢	高田銀一郎注釋 一土佐日記註釋 全三冊 定價七十五錢	久保田栗山編輯 一假名附正續文章軌範 美製小本全四冊 定價壹圓	一幡隨院長兵衛實記 西洋仕立全壹冊 定價金七拾錢	一さられ與三郎實記 西洋仕立全壹冊 定價金七拾錢	一義烈回天百首 中本全一冊 定價金貳拾五錢	一藝妓三十六佳撰 同全一冊 定價金貳拾錢	一興草 銅版橫本 全定價五拾錢	一雅俗日用文 中本全一冊 定價金四拾錢	一開化三體用文 同 定價金廿五錢	一增補算法大成 半紙本全一冊 定價金九拾錢	一今人名譽百首 銅版中本全 二冊定價五拾錢	一鈴木主水榮枯錄 西洋仕立全壹冊 定價金壹圓拾錢	一石川五右衛門實記 西洋綴全壹冊 定價金壹圓卅錢	一金松百人一首 同全一冊 定價金拾五錢	一開化女用文 同全一冊 定價金拾五錢
-----------------------------	---------------------------	----------------------------	-------------------------------------	--	--------------------------------	--------------------------------	-----------------------------	----------------------------	-----------------------	---------------------------	------------------------	-----------------------------	-----------------------------	--------------------------------	--------------------------------	---------------------------	--------------------------

IT 8-24

一 郵便開化子供用文 端書	同全一冊 定價金拾五錢	一 開化早割塵劫記	同全一冊 定價金拾五錢
一 算法開平全書	半紙本全一冊 定價金四拾五錢	一 數開平開立教授書	半紙本全一冊 定價金三拾錢
一 英國政治論說	西洋綴全一冊 定價金五拾錢	一 萬福天カラフル 万享應賀著中本活版	定價金二拾五錢
一 古今東京名所	桐板表紙附極彩色折本全三冊 定價金七拾錢	一 東海道見立五拾三次者見立極彩色折本價四拾錢	豐原國周筆役 折本價四拾錢
一 新撰音曲大全 歌集	洋綴小本全一冊 定價金三拾錢	一 醉客歌曲大全	同美本全一冊 定價金三拾錢
一 古谷定吉著 算法通書	全二冊 定價金五十錢	一 敵討天下茶屋	西洋綴全一冊 定價金七十錢
一 片山國太郎編 日本地理全圖	彩色全一冊 定價金六十錢	一 明治塵劫記	全一冊 定價二十錢

後藤先生定點
新刻
改正
四
書

全拾冊

